

一・積年の想い

多摩川河川敷、深夜―。

今、男は二年越しの想いを遂げようとしていた。

とうとう、女神を手に入れられるのだ。昨年、公会堂の集会でひと目惚れした彼女を、ついにものにできるのだ。

美しくて地位のある女性活動家は、自分にとっては高根の花だと諦めていた。だが、あの時、彼女も同じ気持ちになっていたと告白された。運命を感じたとも言ってくれた。

できれば、きちんとしたどこかのホテルの部屋であればよかった。だが、相手の女性は今この場でもいいからと承諾してくれていた。強壮剤のドリンクを手渡しながら、一刻も早く、あなたの愛が欲しいと言ってくれた。幸い、彼女が運転して来たこの車は大型の高級セダンだ。男女の交わりを行なう最低限のスペースはある。背の高い水草が生い茂るこの辺りには、見渡す限り誰も邪魔者はいない。それに、もはやそんなことは気にも留めなくなっていた。情熱的な彼女の仕草を前にして、周囲の様子を気にする余裕などはなくなっていた。

車を停めるや否や、彼女は待ちかねていたように男に抱きついてきた。柔らかい唇を男の口に押しつけてきた。彼女の長い髪からいい香りがする。男をたまらない気持ちにする香りだ。もはや、男の思考回路にはそのことしかなくなっていた。彼女の期待に応えるのだ。彼女をものにするのだ。それ以外は考えられなかった。

男は野獣のように、女の上にのしかかって行く。黒い大型のセダンが激しく揺れた。

その時、急に眠気が襲ってきた。さっき飲んだドリンク剤の副作用なのか。とても抗えない眠気だった。

車の振動が止んで、辺りに静けさが戻った。

ガチャと音がして、トランクが開いた。

次に運転席のドアが開いて、女が出てきた。女は助手席の男を引きずり出す。力が抜けた男の体は、想像以上に重い。一度車の外に落とすように降ろしてから、車の後部へズルズルと引きずるように運んでいく。幸い地面が滑りやすい草地なので、女の力でもなんとか引きずることができた。女は苦勞して、やっと男をトランクの中に押し込んだ。

トランクを閉じて、周りに誰もいないことを確認すると、女は運転席に戻った。車はゆっくりと、その場から去っていった。

二・突然の招集

昭和十六年、春―。

その鉄砲工場は、滋賀県の坂田郡国友村にあった。

この日も、工員の田代幸吉は一生懸命にその金属部品を研磨していた。

軍用銃の機関部に当たる部品だ。このところ、にわかには忙しくなっていた。軍部からの注文が急激に増えてきていたのだ。中国での戦闘が拡大するのもかもしれないと、内心幸吉は感じていた。世間にとっては、満州や東南アジアでの出来事は新聞やラヂオを通しての対岸の火事にすぎない。だが、武器を提供する自分達にとっては、よりそれを肌で感じる立場にいるのだ。

「おーい、田代」

社長の奥村の声だった。

声の方を見た幸吉は、思わず身構えた。奥村と一緒にいる二人の男の出で立ちに対してだ。一人は軍服姿だった。しかも陸軍ではなく海軍のだ。もう一人は、黒いソフト帽に仕立ての良さそうな黒いコートを羽織った大柄な体格の男だった。

「田代幸吉さんですね？」

黒いコートの男が、帽子をとって挨拶した。

五十歳半ばくらいの品のよさそうな顔つきだった。

「は、はい。そうですが……」

「私は、外務省の児玉洋之助と申します」

そして、物腰は柔らかかった。

「わ、私に何か？」

「はい。急なことで、誠に申し訳ありませんが……。私と一緒に、しばらく旅をしていただくこととなります。その説明にまいりました」

「えっ、何故ですか？」

あまりにも急な話に、幸吉は動転した。

そうなるなという方がおかしかった。

「それは、あなたの鉄砲職人としての腕を見込んでのお願いです。奥村社長も含めて、この地方のどなたに伺っても、若手の中で銃を造る技術は、あなたが一番であるというお話しですので、それをお国の為に役立てていただきたいのです」

「そ、そんなことはありません。この国友には、私なんかよりもずっと腕の立つ職工さんが大勢いらっしゃいます。ねっ、社長？」

幸吉が奥村に同意を求める。

「確かに、おまえと同じように腕の立つ者は何人かいるが、彼らはみな年寄りだ。お役人さんがおっしゃる通り、若い衆の中では、おまえが一番だ」

奥村は事実を語るしかなかった。

「はい。私も他のご同業の方から同じように伺っております」

児玉が、にこやかに言った。

「何故、若手でなければならぬのですか？」

「それは、後ほど説明させていただきます」

「で、この私に一体何をしろと？」

「それについても、後ほど車中でゆっくりと説明しましょう……。取り急ぎ、旅の支度にかかってください」

「えっ、今すぐにですか？」

「はい。急かして申し訳ありませんが、今すぐにです」

それについては、児玉はきっぱりと言った。

幸吉は、工場の裏手にある自分の住居に戻ると、急ぎ支度をして、工場の前に停めてあった黒塗りの車に乗り込んだ。助手席には、さっきの軍人が座っていた。運転席にいるのも軍人だった。

車が走り出した。

幸吉は、旅行の荷の入ったカバンを抱きしめて体を硬直させていた。不安と緊張とで、どうにかかなりそうだった。

「ははは…。まあ、緊張するなという方が無理な注文なのでしょうが、どうか落ち着いてください。別に、あなたを誘拐してどうしようというわけではありませんから。これは、れっきとしたお国の為の任務なのです。本件については、奥村社長も充分に理解をされて、あなたの出向に同意を下さいました」

隣りに座る児玉が、にこやかに説明した。

「何の為の出向ですか？ 任務とは何のことですか？ …それに、この車は、何処へ向かっているのですか？」

幸吉の質問が、止まらなくなった。

「ははは…。とにかく、落ち着いてください。順を追って説明しましょう。まず、この車の行き先ですが…。神戸です」

「こ、神戸…。何故ですか？」

「まだ、それは最終目的地ではありません。そこから、船に乗っていただきます」

「船…。で、どこまで…？」

「イタリアのジェノヴァです」

児玉から出た地名は、あまりにも幸吉の想像を超えたものだった。

「ええっ、イタリア？」

幸吉の驚きの声が、車内に響き渡った。

「一体、イタリアに何なのですか？」

絞り出すように、幸吉が訊ねた。

頭の中が、ぐるぐると回っていた。

「驚かれるのも無理はありません…」

予想通りのその驚きの反応に、児玉は同調するようにゆっくりと頷きながら、少し間をおいた。

「田代さんは、日独伊三国同盟のことは御存じでしょうか？」

「は、はい…。まあ、名前くらいなら…」

その名称は、最近新聞の記事やラヂオのニュースでも頻繁に流れていた。

他の列強国に比べて有益な植民地のほとんどない三国は、共通の利害を持っていた。また、対ソ連、対アメリカ、対国際連盟という個別の共通した利害も手伝って、協調関係を強化してきた。そして、ついに正式な同盟関係になったのであった。

「その同盟の一環として、三国がお互いの持つ様々な技術や情報を提供し合うことになったのです。無論、礼義として学ぶ方の国が相手の国に行かなくてはなりません」

「は、はい。そうなる、私の場合は…」

「ええ。お察しの通り、銃の製造や開発の技術の習得です」

「なるほど。それで、イタリアに…」

それで始めて、幸吉は納得がいった。

確かに、イタリアの銃の製造技術は世界の中でも最高峰と言われていたからだ。

「ははは…。どうやら、納得していただけただけなようですね？」

児玉も、幸吉の落ち着いた様子を見て安心したようだった。

半日後、無事船に乗り込んだ幸吉は、同じ理由で日本中から若者が集められ、乗船していたことを知った。

業種は様々だった。ある者は、通信技術を、ある者は航空技術の習得を担っていた。

一か月を超える船旅は苛酷であった。体調を崩す者も大勢いた。児玉洋之助が、熟練した年配者を採用せずに年齢の若い者を選んだ理由がそれでわかった。その行程は、体力の劣る年配者にはあまりにも過酷であったろう。児玉は、以前ベルリンオリンピックの日本選手団に随行した際に、それを間近で見知っていたのだった。

ジェノヴァの港に何とか到着した幸吉ら一行は、そこでドイツ組とイタリア組の二つに分かれることになった。そのほとんどはドイツ組で、幸吉の入るイタリア組は少数であった。

幸吉は、現地のイタリア大使館の職員に連れられて、イタリア北部に位置するブレシアという町へ渡った。多くの歴史ある銃工房がひしめくそこは、イタリアの銃造りの聖地と言われていた。

時代は、風雲急を告げていた。

### 三・成敗

昭和二十年、夏。

瀬戸内、某所―。

真つ暗な茂みの中に身を隠した三人の若者は、息をひそめてその作業を凝視していた。

八月の半ばは、真夜中でも三十度近い暑さだった。だが、三人は額から流れる汗を拭うことさえ我慢して、十メートル程ほど先の洞窟の前で行われている長いその作業をじつと観察していた。

入口に鉄格子が施されたその洞窟の前には、大きな空の木箱が五つ置いてあった。その辺りだけは、茂みが途切れて更地になっていた。

けもの道を上って、四人の男達がまたそこへ戻って来た。

海軍の下級兵達だ。皆、両手に四個ずつ布袋を持っている。小さな布袋だが、かなり重そうだ。そのことは、時々聞こえてくる男達の荒い息使いで容易に想像できた。それは五百メートル程離れた下の船着き場に停泊している小型の運搬船から運び出されていた。彼らは、もうそれを六回繰り返していた。

ようやく、船着き場と洞窟の往復の運搬作業が終了した時、洞窟の前に置かれたその重そうな布袋は百個程になっていた。息つく間もなく、それらを木箱の中に移す。頑丈そうな木箱だ。五つの木箱の中にすべての布袋を入れ終ると、途中からやって来た上級将校が

それを確認した。口髭をたくわえた目つきの鋭い男である。四人の下級兵達のきびきびとした応対から、その男が絶対的な立場にあることが窺われる。やがて、全部の袋の数が確認されると、木箱に蓋が被せられ、釘が打ちつけられる。

トン、トン、トーン……。釘を打ちつけるハンマーの音だけが、辺り一面に響き渡る。三人の若者は黙ってそれを凝視し続ける。

蓋の釘の打ちつけ作業が終わると、今度はその木箱の一つ一つを洞窟の中へ運び込む準備に入る。男達は、木箱に太い棒を二本差し込むと、神輿のようにそれを持って前後四人がかりで洞窟の奥へ運び込んでいく。洞窟の中はオイルランプのわずかな灯りがともっていた。

すべてを運び終わると、入口の頑丈そうな鉄柵に施錠がされる。四人の男達の長い作業は終り、彼らはふもとの船着き場の方へけもの道に戻って行った。一帯は静かな闇に戻った。

茂みに隠れていた三人の若者は、注意深く辺りを伺う。

ランプがなくなった今、月明かりだけが頼りだった。誰も見張っていないのを確認すると、三人はその洞窟の前に駆け寄った。

「糞っ！」

思わず一人が悪態を吐いた。

掛けられたチェーンの太さから簡単な工具では切断できないとわかったからだ。

とりあえず三人は、洞窟の中の「荷」を急いでどこかに移す方法を先に思索した。仮にこの頑丈な鉄格子を開けられたとしても、岸壁に囲まれたこの無人島から持ち出すには、一カ所しかない船着き場を使うしか手はなかった。今は、まだ連中の小型運搬船が停泊している。しかも、しばらくは本州側には近寄れない。広島にアメリカ軍の新型爆弾が投下され、放射能が充満しているからだ。

一般の市民は、まだその爆弾の恐ろしさのすべてを理解していない。原子爆弾の恐ろしさは、爆発時の爆風や熱風の威力に留まらない。その後も残る放射能が着弾した周辺地域の人間の体を蝕むのだ。三人の若者はそのことを研修先のドイツ人の仲間から聞いて知っていた。だから、運ぶとしたら四国側のルートがいいだろう。とにかく、運搬船が船着き場から引きあげるのを待つよりほかはなかった。

その時だった。その船着き場の方角から、パーンという音が聞こえた。

三人の若者はギョツとして、耳を澄ました。拳銃の音に違いなかった。それは始め、数秒の間隔で四回聞こえた。更にその後、断続的に三発聞こえた。

三人は、けもの道を船着き場の方へ急いだ。ふもと近くまで走り降りると、それからはずつくりと歩いた。息を整える為だ。

船着き場で何が起きているのかは分からない。だが、極めて危険な状況であることには間違いないかった。船着き場が見渡せる茂みの切れ目まで、身をかがめてさらにゆつくりと進む。

三十メートルほど先に男の姿が確認できた。

立っているのは一人だけである。コンクリート製の栈橋の上に置かれたランプの灯りに、その男の姿が照らしだされていた。あの口髭の将校である。下から灯りに照らし出されるその顔は、まさしく鬼の形相そのものであった。

将校は、周りに倒れている男達の服を脱がせ始めた。

すでに死体となってその場に倒れているのはあの四人の下級兵達だ。全員の服を脱がせると、その将校は一人一人を担いで運搬船に運び込んだ。運搬船には誰もいないようだ。その将校は船内までではなく、デッキの上で担ぎ込んだ死体を降ろしている。おそらく、沖に出たらすぐにそのまま海に投げ込むつもりなのだろう。賢明な方法だった。万が一、死体が流れ着き発見されたとしても騒ぎにはならないからだ。原爆が投下された今の混乱した状況下では、誰も通常のような特別な関心を示す余裕はない。仮に抱いた者がいたとしても、警察も軍も捜査どころではない。まったく機能していないのだ。

全員の死体をデッキに運んだ将校は、棧橋に残る脱がせた衣類を一カ所に集めると、その中心にランプを投げつけた。すぐにそれは燃え始めた。勝ち誇ったように不敵な笑みを浮かべる将校の姿が陽炎のように揺れている。人間の様ではなかった。まさしくそれは、鬼だった。

若者の一人が、近くから拾ってきた丸太の棒を無言で二人に手渡した。ちょうど野球のバットの大きさだ。一人はすぐにそれを受け取ってこくりと頷いて返したが、もう一人は受け取るのを躊躇した。が、結局、二人に握らされて「それ」に同意させられた。

三人が互いの顔を見合って、大きく頷いた。

「うおー！」

丸太を手にした三人は、獣のような雄叫びをあげながら棧橋へ向かって走り出した。

それに気づいた将校が、慌てて腰の拳銃を手にする。だが、走り寄る若者達にそれを向けて威嚇してみても、彼らが怯むことはなかった。

将校が引き金を引いた。

だが、弾は出なかった。彼が手にする南部式拳銃は七発しか装填できない。彼はすでに、下級兵達を始末する為にそのすべての弾を使いきっていた。そして、若者達はそのことを承知していたのだ。

「ぐうっ！」

踏みつけられた蛙のような声を出して、将校がその場に倒れ込んだ。

最初の一撃はかわしたものの、後ろに回った若者の一撃が、将校の後頭部を強打していた。そして、間を入れずに振り下ろされた三本の丸太が、倒された将校の後頭部に次々と打ちつけられる。もはや、若者達に躊躇いはなかった。相手は、平気で四人の若い兵士達を撃ち殺した鬼畜生だ。これは、成敗なのだ。

やがて、将校は大きく痙攣してから動かなくなった。

三人の若者は、ハアハアと大きく肩で息を切らせながら、その様子を見下ろしていた。将校が、完全に動かなくなったのを確認すると、若者の一人が将校を仰向けに戻して、それを探し始めた。

「あつたぞ！」

勝ち誇ったように、若者が声をあげた。

若者が探し出した「それ」は、将校の腰のベルトに付いた革製のケースの中に入っていた。若者は、その戦利品を二人に見せた。見せられた二人は、まだ血走っている目を細めて小さく笑った。それは、洞窟の鉄格子の鍵だった。

#### 四・訪問者

昭和二十八年、秋。

滋賀県長浜市国友町―。

広島、長崎はもとより、東京などの大都市は戦争の空爆によって全面的な復興を余儀なくされていた。だが、この地だけは戦前と何一つ変わらぬ景色を保っていた。

「茨城県ですって…?」

田代幸吉は、その突然の来訪者の出身地を聞いて驚いた。

「はい、茨城県は友部という町から参りました」

内心幸吉は、その友部町はおろか、茨城県がどのあたりにあるのかもピンときていなかった。少なくとも、東京よりは北にあるというくらい認識であった。それにしても、この滋賀県の国友まで来たとすれば、大変な距離であったことには違いなかった。

「そんな遠方から、はるばるこの私に会いに…?」

「はい。その為だけに参りました」

押しつけがましいわけでもなく普通にそう言って、男は大きな風呂敷包みをほどいた。

「地元の土産物です。どうか、お収めください」

「折角ですので、遠慮なく頂戴します」

「けっこう重い箱であった。」

「失礼ですがこれは?」

「これは、干し芋です。茨城の名産品です。お口に合えばいいのですが」

「こんなに重いものをわざわざ茨城から…」

「それほどのことでもありません」

背筋を伸ばして座る礼儀正しいその男に、幸吉は好感を抱いた。幸吉より少し下の世代のその男は、三上則夫と名乗った。

聞けば、代々その友部の地で鉄砲造りをしている家柄で、最近引退した父親の跡を継いだという。

「なるほど、それでは私と御同業というわけですか」

「いいえ、そんな。国友一と謳われる田代さんに比べたら、私どもなんぞはまるで…」

「そんな。ご謙遜を…」

「いいえ、本当です。あなたの造られる銃に比べたら、私どもの造るものなんかはオモチヤの鉄砲です…」

滋賀県長浜市国友町は日本の銃職人達の聖地だった。それは、遠く室町の世に遡る。いわゆる種子島の鉄砲伝来の時だ。

当時、国友には武器や農耕器具を作る優秀な鍛冶職人が数多くいた。そこへ足利義晴の鉄砲を造れという命が下ったのだ。その後、鉄砲を取り入れた戦術の注目と共に、他の地域でも鉄砲造りの動きが活発化した。その中でも、国友衆の作る銃は抜きん出て優れていた為に、その時々々の権力者に取り立てられてきた。

国友衆は、優れた銃の製造技術と共に、創意工夫に定評があった。徳川家康が、大阪城を攻略する際に大いに貢献したのが、国友衆が考案した様々な銃であった。家康はこの貢

献に報い、国友の銃職人を幕府の正式な鉄砲鍛冶として定めた。田代幸吉は、その国友衆の末裔であった。

その国友衆の中にあつて、若手でありながら、幸吉の力量はすでに一番と言われていた。イタリアでの修行を終えて帰国すると、その評価は更に高くなっていた。だが、当の幸吉はあくまでも謙虚であった。

「そんなことは…。もしや、どこかで私の銃をご覧になったのですか？」

「はい。先日、偶然に銃の同業者に見せていただきました。その時、頭をハンマーで打たれたような衝撃と、震えるような感動を覚えました。それで、居ても立ってもいられなくなり、失礼を承知で参った次第です」

「そうだったのですか…」

「どうやら、則夫の言葉は単なる儀礼ではなさそうであった。

「田代さん、この通りです！」

突然、その則夫が座布団を外して、土下座をした。

「ど、どうされました？」

「そんな田代さんに対して、失礼は重々承知の上でお願いがあります」

「何でしょうか？」

「どうか、私どもの会社へ一度でも来ていただけないでしょうか？」

「その…、茨城にですか？」

「はい、そうです。遠方で大変ではありますが、それでも、是非ともおいでいただきたいのです。勿論、それにかかる運賃や宿代などはこちらで負担させていただきます」

「まあ、それはいいとして、いったい何の為にですか？」

「銃造りのご指導を賜りたいのです」

「し、指導ですか…？」

「はい。是非とも！」

則夫の言葉に力がこもる。

「まあ、とにかく。そんな格好をされていたら、私も落ち着いて話が伺えません…。どうか、座布団を当ててください」

「はい。では…」

則夫が座り直し、幸吉が茶を勧めた。

幸吉が、それをひと口飲む間に、則夫はゴクゴクと音を立てて茶碗の中をすべて呑み干した。よほど、緊張していたのだろう。

ひと息置いて、幸吉が笑みを浮かべて言った。

「三上さん。世間では私のことをいろいろと良く言っていたようですが、ご覧のように、私はまだこの世界では若輩の域を出ておりません。修行中の身もいところですから。人様に、まして御同業の方に何かを指導するなんてことは、はなはだ分不相応な話だと思えます。そういうわけですから、どうかその件は…」

幸吉が、やんわりと辞退しようとする、

「いいえ、分不相応なんかではありません。あなたが言葉でどんなに謙遜されようと、あの銃がすべてを物語っていたのです！」

則夫が真剣な表情で、力強く返した。



「ま、まあ。それは…」

幸吉は、二の句を失った。

則夫のその言葉には、幸吉が否定する言葉を打ち消す説得力があった。

しばらく沈黙が続いた後に、幸吉が口を開いた。

「わかりました。では、もう少しお話を伺いましょう…」

「ありがとうございます。では…」

安堵したように、則夫が説明を始めた。

「朝鮮戦争の特需が終ったのを機会に、私は父から事業を引き継ぐことになりました。もともと私どもは狩猟用の銃を造って生計をたてていました。しかし、これからのこの国の発展の状況を考えて見れば、狩猟用の銃の生産だけでは事業として立ち行かないということに気づいたのです。銃造りの専業で生き残って行く為には、狩猟用の銃に加えて、競技用の銃の分野にも手を広げていかなければならないと考えたのです」

「確かにお国は、これからはどんどん工業に力を入れていきますからね」

今や世は、戦後復興とその次のステップである本格的な高度経済成長を目指す為に、官民が一体となって鉱工業の発展の方に力が注がれていた。

「ええ…。しかし、競技用の銃を扱うとは言っても、まだ需要の少ない国内だけでは食べられません。そこで、海外に目を向けようと考えたのです。社名もこれを機に三上銃器製造会社からMJと言う名称にすることにしました」

「MJ：か、なかなかいい響きですね」

「はい、私も気に入っています。そして、世界に通用する銃を造ろうと思ったのです！」

「ほう、世界に…」

幸吉の瞳が、輝いた。

「はい。そこまでは、よかったですね…」

そこで、急に則夫の説明が止まった。

幸吉には、その理由が手に取るように理解できていた。

「だが、競技用の銃を造るのはそれほど簡単ではなかったと、おっしゃりたいのですね？」

幸吉が則夫に代わってそれを言った。

「は、はい。その通りです…。当初の私は、競技用の銃も狩猟用とそんなに変わりがないと高をくくっていたのです」

「まあ、見た目は同じ散弾式銃ですからね」

「は、はい。その通りです。その通りなんです…。今さらながら、お恥ずかしい話です。今までと同じ技術、同じ材料で製造できると舐めていたのです。しかし、競技用の散弾銃を知れば知る程、それがとんでもない間違いであることに気づかされたのです。まったく、私は大バカ者でした…！」

そう吐き捨てるように言ってから、則夫が頭を抱えた。

「なるほど、そういうことだったのですか。それで、私の所に…」

幸吉は腕組をして、天を仰いだ。

再び、沈黙が訪れた。そして、田代幸吉が口を開いた。

「年齢がそれほど違わないのに、あえて生意気な事を申し上げます。今のあなたを見ていて、私は十二〜三年前の自分を見ているように思えました。大戦前にイタリアへ銃の修行

に行った時のことです。当初私は、世界に冠たるイタリアの銃造りが、この国友のそれとほとんど変わらないことになりました。使っている材料も、銃を造る作業の様子も、工具も、ほとんど同じだったのです」

「ええっ。それは、本当ですか？」

「ええ、本当です。ですが、結果的にそれは大間違いでした。日が経つうちに、それが大きな間違いであることに気づき始めたのです。当初の私には、上辺だけしか見えていなかったのです」

「何だか、今の私に似ていませんか？」

則夫の表情が和らいだ。

「ははは…、まさに」

幸吉も、笑って続けた。

「一見すると、イタリアの銃造りはこの国のそれとほとんど変わらないように見えるのですが、実は、ひとつひとつのことが僅かに違うのです。しかし、その僅かな差こそが、この世界では決定的な違いになるのです。それこそ、百年、二百年の開きになるのです」

「な、なるほど…」

「そのことが分かり始めて、私は落ち込みました。そして、どうしていいのかわからず焦るばかりの日々が続きました。当時の私は、国費で銃の勉強に来ていた身でしたからね。そんな時に、その本質を教え、私の力になってくれたのが同じ工房で修業に励んでいたあの友人でした」

「友人…。やはり、イタリアの方ですか？」

「はい、そうです。今の私があるのは、その友人のおかげであると言ってもいいくらいです。そして彼とは意気投合し、いずれ一緒に新しい銃造りをしようと約束をしました。私は、本気で彼の力になりたいと考えていました」

「それから、どうなったのですか？」

「でも、その後、第二次大戦が始まってしまい、結局その約束を果たすことはできませんでした。イタリアと日本は最終的には敵国同士になってしまいましたから…」

「そうだったのですか…。その恩人へのお返しが果たせなかったのですね…？」

「ええ。私は、今でもそのことを悔いています」

「そうでしょうね。わかります…」

則夫がしみじみと頷いた。この時、二人の気持ちが一瞬ひとつになった。

「ですから私は、あなたに協力しなければならぬと思いました」

幸吉がポツンと言った。

「えっ…。今、なんと？」

「こんな私でよろしければ、MJに何うと言ったのです」

今度は、則夫の目を見据えて、はっきりと言った。

「ほ、本当ですか？」

「ええ、喜んで伺います」

幸吉は笑顔で答えた。

「三上さんの夢の実現に少しでもお役にたてるのであれば、喜んでそうしたいと思います。お話を伺っていると、あなたは銃造りの何たるかという一番大切な部分で、私と同じ志を

持っているようですから…」

「いや、そんな。あなたほどでは…」

「そんなことはありませんよ。三上さんは銃に対して、とても真摯な方であると感じました。何よりも、熱い情熱をお持ちです。それに正直に申しますと、実のところ軍用の銃造りには辟易していたのです。今のまま国友にいたのでは、いつまでたっても新しい競技用の銃は造れそうもありませんから」

「じゃあ、本当に来てくださるのですね？」

「はい、間違いなく！」

「ありがとうございます。ありがとうございます！」

則夫は、幸吉の前に歩み寄ると両手で彼の手を握りしめ、何度も何度も礼を言った。

それから二週間後、田代幸吉は約束通り則夫の待つ茨城のMJ社に向いた。

いったん国友に戻った幸吉は、更に二週間後、再びMJ社を訪れた。そして、彼はそのまま国友に帰ることはなかった。

## 五・新規事業

昭和五十六年――。

愛知県、渥美半島南端。伊良湖岬――。

岩壁の上で、その初老の男は海を眺めていた。

強い海風に頭髮や衣服が激しく煽られ続けている。だが、今の男にとっては、それがかえって心地よかった。

男は、横にそびえ立つ巨大なプロペラを見上げた。そして、満足気に何度も頷く。ゆっくりと、だが力強くそれは回転していた。

もともと自分の起こした会社は、電気を溜めるのが本業であった。いわゆる蓄電池器、バッテリーの分野である。だが、これからは、電力を生み出す方に会社の軸を移していくしかないと感じていた。

新規分野への参入には大変な労力が必要になるが、幸い風力を受けるプロペラの設計には、最高の技術を持った仲間がいた。共にドイツで学んだ仲間だ。こうして、社運をかけたプロジェクトが始まった。この巨大なプロペラが自分の会社の命運を握っていた。この伊勢湾の荒々しい風がプロペラを回し、タービンを回し、そして、電力を生み出すのだ。これは、その試験機の第一号であった。

きっかけは、十年前からたびたび起こっているオイルショックであった。石油の大半を外国に委ねる日本にとって、その影響は計り知れなかった。資源に乏しいこの国は、海外で何かが起こる度にそれに翻弄され続けていた。自分が若かりし頃参加した四十年近く前の太平洋戦争も、その石油が一因であった。だから、男は中東やアメリカの事情や思惑に左右されないエネルギーの開発が急務だと感じていた。

国は、石油に代わる代替エネルギーとして、原子力発電を積極的に導入する様相を見せていた。だが、それは、一民間企業が参入できるような規模のものではなかった。それに、その真の恐ろしさを男は身をもって知っていた。そこで目を付けたのが、この風力発電と

ソーラー発電という自然エネルギーの開発であった。風と太陽光なら、世界のどの国も平等にその恩恵を受けることができる。資源の乏しいこの日本でも、同じ条件で電力を得ることができなのだ。だが、その実現には根気がいるだろう。実用化には何年かかるかわからない。おそらく、何年では済まないだろう。何十年の歳月が必要だろう。

男は、それをやり遂げる決意を新たにした。自分には、人に負けない信念と行動力がある。そして、それは五十歳代後半にさしかかった今でも、いささかも衰えていなかった。

自分が子供の頃、生まれ育った村には、まだ電気が通っていなかった。囲炉裏と、油のランプが生活の照明だった。初めて近くの町へ行つて、電燈を見た時の眩さが忘れられなかった。初めて、ラヂオを聞いた時の興奮が忘れられなかった。それが、自分の出発点だった。取り憑かれたように、電気にかかわる猛勉強を始めた。一切の遊びを断った。友達も作らなかつた。誰とも交わらなかつた。ただ、その勉強だけに大半の時間を費やした。そして、高等学校を出るころには、誰にも負けない電気の知識を身に付けていた。

男は、おもいっきり両手を広げて、その風に対した。負けない気力でその風を全身に受け止めた。

ふと、背後に何かを感じて目をやった。

小さな子供が、自分と同じようにプロペラを見上げていた。四、五歳くらいの少女だった。二人の目が合った。

「おじさん。これはお空を飛べるの？」

つぶらな瞳が眩しかった。

「ははは…。確かにプロペラではあるけど、これは空を飛ぶものではないんだよ」

「なあんだ、そうなんだ…。でも、とても大きなプロペラね」

「ははは…。そうだね。おじさんは、これからこの大きなプロペラをたくさん造ろうと思つているんだよ」

「ふーん、こんなに大きいのを…。たくさんつて、十個くらい？」

「いいや。もつと、もつとたくさんだ」

「へー、凄いいんだ。でも、そんなにたくさん造ったら、困っちゃうわね」

「どうしてだい？」

「きつと、地面がお空に飛んじやうもの」

「ははは…。それは傑作だ。わははは…」

男は大笑いした。

「大丈夫だよ。そんな風にはならないよ。ははは…」

男の笑いは収まらなかつた。

「そうなんだ。じゃあ、綾子、安心したわ」

二人は、笑顔を交わした。

男は思った。こんなに心の底から笑つたのはいつ以来だろうか。こんなに人と笑い合つたのはいつ以来だろうか。老若男女を通じて、自分の人生の中で今までにそんな相手と出会つたことはなかつた。勿論、女の笑顔には何度も遭遇してきた。だが、その裏に損得や計算透けて見えるのが嫌で仕方がなかつた。だから、今の歳まで独身を貫いていた。

どこかで、声が聞こえた。

向うの方から、誰かが叫んでいた。強い風とタービンの回る音で、ほとんど聞き取れな

いが、女性の甲高い声なので僅かに聞こえていた。

そちらの方を見てみると、着ている服装で遠くからでもそれが誰なのかはすぐにわかった。この岬のふもとにある教会のシスターだ。男は以前、このプロペラを建設する旨の挨拶に行った時に彼女とは面識があった。どうやら、この少女を迎えに来たらしい。

「その節はどうも」

「ああ。あの時の、発電機の社長さん……」

「これの音などで、教会に御迷惑はかけていませんか。礼拝の時ですとか……?」

「大丈夫ですよ。海風の音にまぎれて、全然聞こえてきませんから」

「そうですか。安心しました」

「さあ、綾子ちゃん。帰りましょう」

「おじさん、バイバイ……」

少女は、まるで仲良しの友達と別れるかのように手を振った。

男もつられて、手を振っていた。

シスターも会釈して、立ち去ろうとした。

「あ、あの……」

男は、呼びとめた。

「ひよっとして、その子は、保護施設の……?」

シスターは、笑顔でコクリと頷いた。そして、再び会釈し、歩き始めた。

男は、以前に聞いて知っていた。その教会に親のいない子供達を預かっているホームが併設されていることを。

しばらく、男は二人の後姿をじっと見ていた。

二人が自分の視界から消えかかった時、男はそちらに向かって走り出した。

## 六・小さな代理人

茨城県西茨城郡友部町の山間部――

MJ社、友部射撃場――

浅尾義和は一人、その射撃台の前で途方に暮れていた。

朝の九時を過ぎてても、射撃場のプラー担当者来ないからである。

彼は、目前に迫る日本選手権の練習の為に東京からわざわざここまで来ていた。現役の日本チャンピオンである彼にとって、連覇のかかっている一番大切な大会であった。この射撃場のオーナーの息子である三上恵造とは高校生時代からの親友であることから、大切な大会の前には、必ずここまでやってきて試合の為の最終調整を行うのが常であった。

ただ、困ったことに肝心のプラーが来ていないのである。

クレ―射撃場には、必ずプラーが存在する。彼らは、プラー室で作業を行う。そこは言ってみれば、射撃場のコントロ―ル・ルームである。そこでは、打ち出されるすべてのクレ―の角度や速度などを制御できるようになっている。

日本一の腕前の浅尾義和をしても、そのプラー無しでは、クレ―射撃を行うことはできないのだ。

「おじさん、撃たないの？」

浅尾が背中越しに声をかけられた。

みると、小学生の高学年くらいの子供が笑顔で立っていた。

細面の綺麗な顔立ちの少年だった。首に、金属製の丸いペンダントをかけている。

「君は、どこから入ってきたのかい？　ここはとても危ない所だから、子供が入って来てはいけないんだよ」

浅尾は、すぐに注意した。

「大丈夫だよ。場内のルールは、ちゃんとわかっているから…。それにちゃんとこれの用意もしているよ。ほら…」

そう言って、少年は半ズボンのポケットから取り出したものを浅尾に見せた。

それは、耳栓だった。クレー射撃場の中でも、射撃台付近では、プレーヤーはもとより見学者なども皆、耳栓やイアー・プロテクターの着用が必要であった。大きな銃の発射音から耳を保護する為である。

それを見た時、浅尾は急にこの少年に親近感を持った。同じくらいの歳の頃の自分を思い出したのである。どうしてもクレー射撃をやりたいと駄々をこねた時に、父の謙三が同じような耳栓をくれたことがあったのだ。

「君は…？」

浅尾が訊いた。

「どうやら、普通の子供ではなさそうだった。」

「田代水丸です」

よどみのない瞳で、少年ははっきりと名乗った。

「田代…って、ひよっとして君のお父さんはあの田代幸吉さんかい？」

「はい、そうです」

「なあんだ、そうか…」

その名前を聞いて浅尾は、認識を新たにした。

少年がああ田代幸吉の子供ということであれば、話は別であった。

日本を代表する銃造りの名匠である幸吉には、浅尾自身もひとかたならず恩を受けていた。未成年の時は、立场上親友の三上恵造にこっそりと銃の面倒を見てもらっていたが、成人してからは堂々と幸吉の世話になってきていた。三上の才能もなかなかのものであったが、幸吉のそれは次元が違っていた。勿論、今自分が手にしている銃も幸吉が手がけたものである。

「はじめまして、水丸君。僕は、浅尾義和といいます。君のお父さんにはとてもお世話になってるんだよ」

「じゃあ、浅尾さん、って…。お父さんがよく話しているのと同じ浅尾さんかな…。おじさんは、日本チャンピオンの浅尾さん？」

「ははは…、一応そうだけど。田代さんは僕のことを何て言っているのかな？」

浅尾は、内心幸吉の評価が気になった。普段は決してそういった類のことを口にしない人間だからだ。

「日本で一番きれいなフォームで撃つ選手だって、言っているよ」

「ははは…、それは光栄だな」

「射撃のフォームには、必ずその撃ち手の性格が表れるんだって。浅尾さんは、人間としても素晴らしい人だからそうなんだって言っていた」

それを聞いた浅尾は嬉しくなった。

あの田代幸吉にそういう評価を受けていたのは意外であり、光栄であった。若い頃から自分の銃の製作や調整で幸吉とは頻繁に会う機会があったが、射撃そのもののことで評価やアドバイスを受けたことは一度もなかったからだ。そういう意味では、幸吉はあくまでも「造り手」に徹する男であった。

「浅尾さんは、どうして撃たないの？」

田代少年が不満気に訊ねた。

目の前の男があつた浅尾義和だと分かり、一刻も早くその射撃を見てみたかったのだ。

「実は、おじさんも早く撃ちたいんだけど、プーラーさんがまだ来ていないんだよ」

「そうなんだ。そういえば、岡島さん、昨日体の調子が悪いつて言っていたから、休んでいるのかもしれないね……」

田代少年は、この射撃場の専任プーラーの岡島のことでも良く知っているようだった。

「そうか、そうだったんだ。それは弱ったな……」

浅尾は途方に暮れた。

そうなると、せっかくの射撃練習は諦めなければならなかった。M J社でもプーラーが務まる人間は限られている。専任の岡島が駄目だとすると他には心当たりがなかった。親友の三上恵造なら務まるが、今日出張でいないことがわかっていたので。だが、浅尾はもう一人それが務まる人間がいるのを知ることになった。

「大丈夫だよ、僕がプーラーをしてあげるよ」

「僕がつて、君はまだ……」

そう焦って止める浅尾の声を気にも留めずに、田代少年はプーラー室へ走っていった。

プーラー室に飛び込むや否や、田代少年は慣れた様子で手際よく発射の準備を整え、正面の窓越しから浅尾へOKのサインを送ってきた。

他に客が来ていないのを確認した浅尾は、射撃の準備に入ることにした。少年の手慣れていることがわかったからである。それに、防弾仕様のプーラー室の中にいれば、逆にその方が彼が安全であると考えたのだ。

浅尾義和の射撃が始まった。

打ち出されたクレーを、次々と粉碎していく。

「わー、本当にきれいだった！」

プーラー室の窓越しから、田代少年はその射撃に魅入った。

父親が言っていた通り、それは流れるような美しいフォームだった。この時彼は、自分の射撃の手本にするべきフォームに出会ったと感じていた。

## 七．父の教え

十年後――

J R常磐線の友部駅から西へ五キロほど入った山間部に三上銃器製造会社、通称M J社

がある。MJ社の工房は長い夏季休暇に入っていた。

田代水丸は、ひと気のないその工房で、ひとり散弾銃の銃床部分の削りの作業に励んでいた。大まかにカットしてある木材を顧客の注文に合わせた寸法に精密に削り、研磨していく工程だ。

扇風機の風の音に交じって、時折、研磨機のモーター音が響く。汗がひと滴、こめかみの辺りから顎に伝わった。田代はいったん作業の手を止めて長い髪を後ろに束ねると、ゴムバンドで結わいた。母親譲りの鼻筋がとおった細面の顔には、その髪型もよく似合っていた。額と首の周りの汗をタオルで拭ってから、再び目の前の木材と向き合う。

作業には常に慎重さが要求される。それは、父親の幸吉から厳しく教えられた習慣でもあった。ともすれば、金属でできた機関部や銃身の方に気持ちが行ってしまいがちな息子に、幸吉は常日頃から木材の部分の劣らぬ重要性を説いていた。その昔、イタリヤで修業した幸吉は、使用する木材の重要さを誰よりも理解していた。そして、その妥協を許さないこだわりこそが、彼を世界屈指の銃職工と言わしめるまでにしたのだ。

例えば、高級な銃には高価なフランス産のクルミが多く使われる。ブナやカエデといった他の材料よりも温度や湿度による歪みなどの変形が少ないからだ。銃造りというのは、そういった「僅か」なこだわりの積み重ねである。そして、その「僅か」な差が、銃の世界では最後には「決定的」な差になって現れてくるのである。つまり、最終的には銃の命中精度に関わってくるということなのだ。

そんな父の日頃の教えを守って、この時も田代は削る木材に全神経を集中させていた。

「水丸君、ご苦労さま」

後ろから声を掛けられても、すぐには気づかなかった。

「ふふふ…。よく集中しているね」

「ああ…。恵造さん」

やっと、気がついた田代が振り返った。

声の主はMJ社のオーナー・三上恵造であった。

「少しは木のことかわかってきたかい？」

温厚さを表すハの字の眉毛を更に丸めて、三上が笑顔で訊いた。

「奥が深過ぎますね。三年やそこいらでは、とても…」

成人して一年足らずの田代が返した。

「うん、そうだろう。でも、それがわかるだけでも大きな進歩だよ」

「褒められているのか、そうでないのか…」

田代は困ったように笑った。

「勿論、褒めているのさ。実は、僕も木の部分はいまだに苦手なんだよ」

三上が、田代の肩をポンと叩いて笑った。

田代水丸がこの工房で学ぶべきことはもはやほとんどないと、三上は感じていた。本来、銃造りの職工ではなく競技者を目指している田代にとって、学ぶべきことは技術的なスキルではなくその精神なのだ。そして、そういう意味において、すでに彼はそれを十分に習得していた。

「夏休みを返上して、頑張ってくれているんだね？」

「はい。今日も撃たせていただきましたので」



田代は、三上の会社の手伝いをするのと引き換えに、無料で射撃場での練習をさせてもらっていた。

二十歳になるや否や、田代は待ちかねていたように銃所持の免許を取得した。クレー射撃をする為である。父のように銃を造る方にも関心があったが、撃つ方にはそれ以上に関心が高かったのだ。

田代水丸は、その国友衆の末裔であった。代々、鉄砲を造ることを生業にしてきた国友衆の中にあつて、田代のように撃つ方の道を選ぶということは尋常ではなかった。だが、父親の幸吉はそれを許してくれていた。

MJ社の中で生まれ育つたような田代は、これ以上ない環境に恵まれていた。使用する銃や弾については、タダ同然で手に入る。射撃を教えてもらえる人間も周囲に山ほどいる。そして、何より有利なのは、練習する射撃場がすぐ近くにあるからだ。MJ社は、工場のほど近くに射撃場も経営しているからだ。

三上恵造は、田代が大学を卒業したらMJ社に就職してくれることを願っていた。それは、田代の父親である幸吉への感謝の気持ちであった。幸吉が国友からここへ来てくれたおかげで今のMJ社があるのだと、父の則夫からずっと聞かされてきた。事実この二人の二人三脚で、MJ社は日本の一製造業者から、今ではイタリア、アメリカと並んで世界のシェアの一角を埋める存在までになっていた。

田代を社に招きたい理由は、それだけではなかった。純粹に、田代の持つ銃への「才能」を買っていたからだ。それは、最近始めた撃つ方の才能に留まらなかった。田代は、単に手先が起用だと言うのではなく、銃に対する独特の感性を持っていたからだ。それは、人間の感覚を超えたところにあるもので、言葉ではたとえにくいものだった。あえてそれを人の感覚で表現するとしたら、特別な「嗅覚」ということになるのだろう。そして、それは普通の人間が努力して身に付くものではなかった。おそらく、何百年も続く鉄砲職・国友衆の血統のなせる業なのだろう。まぎれもなく、彼は名匠・田代幸吉の血を引いていた。

「ここは暑いだろう。ひと休みして、上へ行って冷たいものでも飲もう」

三上が、二階にある社長室へ田代を誘った。

## 八．ある種の予感

社長室に入った三上恵造は備え付けの冷蔵庫から麦茶を取り出して、田代に振る舞った。「さあ、どうぞ」

そう言つて麦茶の入ったグラスを手渡した時に、三上は田代の टीーシャツの首周りの隙間から金属製のチェーンの存在に気付いた。

「そのネックレス、子供の頃からずっとしているのと同じものかい？」

「ああ、これ…。そうです」

「そうか、例のお母さんの形見だね」

「はい、そうです。これを身に着けていると、なんか安心するんです」

「そうなんだ。きつと、天国のお母さんも喜んでるよ」

恵造は、以前そのネックレスの全体を見たことがあった。金属製の丸いペンダントがつ

いているものだった。円形の中はちょうど鳥居のような形をした左右対称の図形が彫り込んであった。田代は子供の頃から、それを肌身離さずに身につけているのだ。

「そうですね」

その時、田代の視界に三上の机の上の「あるもの」が入った。

「恵造さん。これは…？」

「ああ…、それか。それはあまり見ない方がいいよ」

三上が苦笑いをして言った。

田代が訊ねたそれは、大判の写真だった。二十枚程が重ねて無造作に置かれていた。

「警察から送られてきた捜査資料だよ。散弾銃がらみの事件や事故がある度に、必ずそうやって送ってきて、意見を求められるんだ」

「へえー。恵造さんって、凄いいんですね」

「ははは…、そんなに格好がいい話ではないんだ。うちの商売柄仕方がなく引き受けているんだよ。この日本で散弾銃を造っている会社なんていうのは、そうはないからね。普通の拳銃などはともかく、特殊な散弾銃の部類になると警察の中にも専門家がないんだよ。だから、こうやって協力してあげているんだ」

三上の仕事は、MJ社の経営だけに留まらなかった。

クレール射撃協会の理事も務める彼は、協会運営の仕事にも関わらなければならない。そして、扱う物の特殊性から、様々な場面で警察との連携が不可欠であった。警察からは取得者への指導や管理を任されている為に、月に何度かはその勉強会、講習会や研修会の仕事もこなさなくてはならない。更に、今回のように、散弾銃が使われた事案の捜査協力も行わなければならないのだ。

「なるほど、それで…」

「一銭にもならない仕事さ。まあ、言ってみれば、社会貢献の一種ということになるかな。ははは…」

三上が麦茶を飲みながら、朗らかに笑った。

「あの…。これ、見てもいいですか？」

田代は、その写真が見てみたくなかった。

「君がどうしてもというのなら…。ただし、それは本物の自殺の現場写真だから、気分が悪くなるようなものも入っているよ。それでも良かったら、どうぞ…」

「わかりました」

田代は、取り憑かれたように、その写真に見入った。

二十枚くらいの大判のカラー写真を順番に見ていく。

自殺したとされているのは四十代位の男性だった。口に散弾銃をくわえたまま息絶えている。後頭部の破損箇所を接写したものも違う角度で数枚撮られていた。それを見た時、田代は子供時代によくやったスイカ割りのスイカを思い出した。そして、発射された散弾は男の後頭部を突き破り、後ろの壁に鮮やかな赤色の血痕と薄いピンク色の脳みその破片をこびり付かせてさせていた。気の弱い人間なら、卒倒しかねない写真だ。普通の人間でも、目をそむけずには見られないはずだ。しかし、自分でも不思議なくらいに、田代はこれらの写真を冷静に見ていられた。

時間をおいてから、再び次の写真に目をやる。散弾銃を拡大したもの、引き金にかかっ

た指の様子等があらゆる角度から詳細に撮られている。男の周辺以外を撮ったものも入っていた。散弾を保管している専用ロッカーや散弾銃を保管している保管棚等だ。

田代が写真を、ひと通り見終わった。

「へえー、たいしたもんだ。君は、そういうのを見ても何ともないんだね？」

三上は、田代が凄絶な現場写真を見ても顔色一つ変えなかったことに驚かされた。

「そんなことはありませんよ。決して、気分のいいものではありません」

言いながら、田代は中から一枚だけを取り出して、再び見入った。

「どうした、水丸君。その写真がどこか気になるのかい？」

田代は、その一枚の写真に釘付けになっている。かなり、真剣になっているのが三上にも伝わった。

「ええ、ちよっと……」

それを聞いた三上が、麦茶のグラスをテーブルに置いて田代の方へ移動した。何かがあると感じたからだ。だが、

「なんだ、銃の保管棚の方か……」

三上は少しがっかりしたように呟いた。

田代がしきりに気にしているのは、死んだ男やその周辺の写真ではなく、死体から離れた所にある他の銃が保管してある棚を写したものであった。自殺に使われたものの他に、男は二挺の銃を保有していた。銃の愛好者が違う種類の散弾銃を何挺も所有するのは珍しいことではなかった。田代はその銃に関心があったようだ。

「この写真のどこが気になるのかい？」

念の為に三上が訊くと、

「恵造さん、虫眼鏡ありますか？」

逆に、田代が訊いてきた。

「ああ、あるとも……」

三上があわてて、机の引き出しから虫眼鏡を取り出して田代に手渡す。

「やっぱり……」

虫眼鏡を覗いた田代が呟いた。

「やっぱり、って……。な、何なんだい、水丸君？ この写真のどこの部分を拡大して見たかったのかい？」

三上が答を聞きたがった。

写っているのは、散弾銃が二挺立て掛けてある保管棚だけである。

「いや、特にどこというわけではなくて……。単純に、この棚にしまっている銃の種類を確認したかっただけなんです」

「なーんだ。そんなことか……」

三上が、大声で笑い始めた。

「君が、随分真剣に見直しているから、てつきり、この写真から捜査に関係ある何かに気がついたのかと思ってしまったよ。とんだ、僕の早とちりだけど。あまりにも、君の雰囲気は普通じゃなかったものでね。すまん、すまん。ははは……」

三上は、田代に対してではなく田代に過度な期待感を持ってしまっていた自分自身に対して笑ったのだ。よくよく考えて見れば、二十歳そこそこの若者が、写真を見ただけでこ

の自殺の何たるかが判別できるわけがないのである。それに、これはどこをどう考えてみても普通のありふれた散弾銃による自殺に間違いないのである。

いったい自分は何を期待していたのかと反省しながら、もう一度田代の表情を見た三上は、一瞬戸惑った。

彼がまだ真顔のままだったからである。本来なら、そこで一緒に笑ってやり過ぎすべき流れである。だが、田代の反応は違っていた。

「み、水丸君。どうしたんだい。僕が大笑いしたことで、気分を悪くしたのかい？」

三上は、頭の中が混乱し始めていた。

「いいえ、とんでもありません。そんなことはこれっぽっちも…」

「それじゃあ、どうしたんだい。そんな思いつめたような真面目な顔をして…？」

そう訊きながら、三上の心の中に「ある種の予感」が急に芽生え始めた。

「たぶん、違うとは思いますが…。でも、やっぱり、ちょっと…」

田代は言いにくそうだった。

「言いたいことがあるのなら、何でもいいから言ってごらん」

そう田代に言いながらも、三上は自分がどんどん緊張していくのがわかった。田代の体全体から何かのオーラのようなものが湧き出ているように感じていた。

「はい。じゃあ、思い切って言います」

「う、うん…」

三上は生唾を呑んでそれを待った。

「どう考えても、不自然だと思えます」

田代が、はっきりと言った。

「な、何がだい？」

三上は、やはり来るべきものが来るのだ、と感じた。

「これだけの銃を揃えているんですから、亡くなったこの男の人は銃にもかなり慣れているはずですよ？」

「う、うん。かなりのベテランだと聞いているけど、それが…？」

「だったら、やはり不自然だと思えます」

心を決めた田代に迷いはなかった。

「な、何がだい？」

三上には、何のことはさっぱりわからなかった。

だが、田代の話は向かうべき所に向かい始めている、と感じていた。

「この写真の保管棚に立て掛けてある二挺の散弾銃は、両方とも上下二段式ですよ？」

そう言って田代が虫眼鏡を渡した。

「うん、間違いない。これは上下二段式の散弾銃だ。ついでに言うと両方ともうちの社の製品ではないね…」

虫眼鏡で写真をまじまじと観察しながら、三上が答えた。

緊張しながらも、自分のすべき最低限の補足はする。

「恵造さん、おかしいと思いませんか？」

田代のその問いかけに、三上は答えることができなかった。

「申し訳ないが、君の考えがよくわからない。水丸君は、この写真を見てどこがおかしい

と感じるのかい？」

「じゃあ、こっちの写真を見てください」

田代が、束の中の別の写真を取り出した。

それは亡くなった男が自殺に使ったとされる散弾銃の方だった。

「この二枚の写真を見比べて、僕は不自然だと感じたんです」

「説明を続けてくれ」

三上は、その二枚の写真の違いを見つけようとはできなかった。

どちらも、ごくありふれた散弾銃だからだ。

「棚にある二挺は、上下二段式なのに、自殺に使ったとされるこっちの方は水平二段式です」

散弾銃の形には、大きく二種類ある。銃身が縦に二列に並んだ上下二段式と、横に並んだ水平二段式だ。どちらも、同じように一般的な形である。

「まあ。確かに銃身の並びは違うが、どちらも普通の散弾銃だと思うけど……」

言いながら、三上は田代の答えを待った。

「もし、棚にあるのが水平二段式であつたら、僕は何も感じませんでした。ですが、そこにあるのは上下二段式です」

「つまり……？」

三上が、再び生唾を呑んだ。

「つまり、この人が本気で死のうと思つたら、棚にある上下式の方を使うはずだと思うんです。それなのに、この人はわざわざ死ぬのが難しい水平式の方を選んでるんです」

「水丸君。もう少し、説明を続けてくれ」

三上は、やっと何かが少しずつ見えてきたような気がしていた。

「はい。ここからは、釈迦に説法になると思いますが、我慢して聞いてください」

「うん、気にしないでいいから、続きを聞かせてくれ」

「はい……。そもそも散弾銃とは、散弾が放射状に広がるからこそ、空中を飛ぶものや、地面を速く動くものに対して有効なわけです。しかし、それは、数十メートル先での話であり、銃身から撃ち出された直後の散弾はほとんど広がっていません」

「その通りだ。で……？」

「そう考えると、水平二段式の方は、中心には飛びません。口の中に入れた時に、左右どちらかに偏ってしまうのです。しかも、更に撃った時の衝撃で左右に大きくブレてしまいます」

「なっ……！」

それを聞いた三上は、言葉にならない声を発した。「ある種の予感」が的中しようとしていた。そんな三上の心中を知る由もなく、田代が淡々と説明を続けた。

「おまけに、この人は、自分が経験したことのない不安定な状態で引き金を引くことになります。普段の慣れた射撃の時にように発射時の反動を上手に抑え込むようなことはできません。であれば、発射時の反動の衝撃、すなわち左右へのブレは更に激しく大きくなるはずです。そうなると、自分の脳に当てるのがとても難しくなってしまうし。しかし、それに比べれば、上下二段式の方はそこまでのブレはありません。反動による衝撃は縦軸の中におさまり、多少のブレはあっても、確実に自分の頭を打ち抜くことができる

んです」

「た、確かに…」

三上は、劇場で寸劇を見ているような錯覚に陥った。

それ程、田代の説明には魅入られるような説得力があった。そして、その劇はフィナーレを迎えようとしていた。

「散弾銃に未熟な僕ですら、そう感じます。まして、熟練者のこの人が、そんなことに気づかぬはずがありません。本気で死にたいと思えば、迷わず上下二段式の方を選ばずです。しかも、二挺も持っているのですから…。なのに、この人は確実に死ねない水平二段式の方をわざわざ選んだことになるんです。こんな不自然な話はありません」

「と、言うことは…？」

その答がすでにわかっているながら、三上は訊ねた。

「と言うことは、つまり、本人ではなく他の誰かの仕業である可能性が高いということですよ！」

田代が、ついにそれを言い切った。

「それは…！」

三上が、絶句した。虫眼鏡を握りしめたままだった。

「すみません、恵造さん。ちよつと、飛躍しすぎていますか？」

しばらくおいて田代が長髪を手で後ろにかき分けながら、少し照れくさそうに言った。例のオーラのようなものは消えていた。

「い、いや。ちつとも、飛躍なんかしていないよ。君の推理はきちんとスジが通っているよ。恐ろしいほどにね…」

我に返った三上が、それを肯定した。

「水丸君、素晴らしい助言をありがとう。君の話はさっそく警察の担当者の方にも伝えてみるよ」

「ええっ、そんな…。やめてくださいよ。捜査妨害とかになってでもしたら、恵造さんに迷惑がかかりますから…」

「大丈夫だよ。勿論、そういう可能性もあるという前提付けで先方にはうまく伝えるようにするから」

そうは言ったものの、内心三上は、田代の推理が当たっている可能性が十分に高いと感じていた。

やはり、彼の体に流れている銃に対する独特の「嗅覚」は本物であった。

彼は父親の田代幸吉と同じ国友衆の子孫なのだ。この平成の世においても、室町の時代から続くそれらの血は、脈々と受け継がれているのだ。三上は、それを痛感せずにはいられなかった。

そして、こうも考えた。田代の繊細な容姿は、母方の血統であった。彼の母方は、代々神に仕えていたという。一族は皆、巫女や霊媒師であった。そういう血統の田代には、若い時から古よりの霊力ともいえるべき特別な力が備わっているのかもしれない。

その二つの血統が混じり合わさって生みだされた犯罪への嗅覚が、彼の実体なのかもしれない。それなかつた。

そして、田代水丸の持つその特別な才能に気づいたのは、三上恵造だけではなかつた。

## 九・意外な申し入れ

その日の茨城県友部町は秋晴れだった。

田代水丸は、今日も午前中はM J社の工房を手伝い、午後になってから一キロほど離れた山のふもとにあるこの射撃場で練習に励んでいた。

M J社の射撃場は中央を境に左右に分かれていた。大きさはそこまではないが、ちょうどゴルフの練習場によく似ている。左右のエリアのそれぞれに五つの打席のような区割りが横に並び、上はグリーン色のビニルシートの屋根でつながっている。周囲は綺麗に刈り込まれた芝生と低い植栽に囲まれている。ゴルフ練習場と少し違うのは、射撃場の左右の隅にはそれぞれのエリア用に電光得点板が備えてあることだった。

大きく切り開かれた正面の小山は、六く七十メートル先のあたりで斜めに削られて、ネット保護された巨大な山肌の土の壁が左右に広がっていた。中央から向かって左側の射撃台では、年配の客達が数人でプレーをしていた。そちらは、主に一般の利用者が使うエリアだ。

田代は、右側の上級者専用の方で一人だけでプレーしていた。クレイ射撃を始めてから、まだ一年余りの田代であったが、すでに右側のエリアでプレーできるのに十分な実力を付けていた。

「はッ！」という、田代の掛け声と共に、直径10センチ程のオレンジ色の円盤が青空へ向かって打ち出された。

それは、秒速35mのスピードで勢いよく空の彼方へ飛び去って行く。だが、その直後に発射された散弾がそれを上回るスピードで放たれ、一瞬で円盤を捉える。オレンジ色の円盤は、あっという間に粉々に砕け散った。

通常クレイ射撃は、一回のラウンドにつき二十五回の射撃が行われる。つまり、二十五回クレイが発射され、それを二発以内の散弾で割るのだ。発射されるクレイは方角が定まっていない。正面の場合もあれば、左右どちらかの場合もある。更に、それぞれの角度や高低も定まっていない。そして、それらをすべて割った場合が二十五点満点ということになる。ただし、パーフェクトの満点を取ることは、例え練習であっても、滅多にあるものではない。大半のプレーヤーは一生を通してそれを経験することはまずないのだ。だが、田代はその満点をこの半年のうちにすでに十回以上経験していた。

この日も彼は、いい調子で練習に臨んでいた。すでに終えた三ラウンド目には、二十三点をたたき出していた。そして、四ラウンド目が終わろうとしていた。

最後のクレイが発射された。シュルシュルと、空気を切り裂く音を発しながらクレイが右方向に地面を這うように飛んで行く。ほとんど放物線にならない直線的な飛び方だ。それは、上級者用の射撃台でしかお目にかかれない難易度の高い設定であった。しかし、今日の田代はそれさえも難なく仕留める。そして、脇の電光掲示板に二十四個目のランプがともる。

一旦休憩に入る為に田代が、発射を制御するプレー室の中の岡島に手でサインを送った。岡島は、プレー室のガラス越しに了解のサインを返してきた。彼もひと息入れる為

に、飲み物を買いにクラブハウスの方へ向かった。田代は、散弾銃の機関部を解放して「くの字」に折り曲げると射撃台から降りた。

突然、拍手が起こった。

見ると、射撃台の後ろに置いてあるベンチに男が一人座っていた。

四十代くらいの身なりのきちんとした品の良いその男が、笑顔で田代に向かって拍手を送り続けていた。そして、立ち上がり、田代に近寄って来た。

「見事な射撃でしたよ」

「ありがとうございます…」

と、田代は一応は返答したものの、相手の男には見覚えがなかった。

「もし、これが本当の試合だったら、君は優勝していたかもしれないね」

その男は、射撃台の右脇に備え付けてある電光のスコアボードを見ながら、自分の言葉に頷くように言った。

四ラウンド分行なわれたそこには、標的のクレーを仕留めた印である丸いランプがぎっしりと埋まっていた。実際の試合でも、今日と同じように四ラウンドのトータル得点で競われることが多い。一ラウンドが二十五点満点であり、トータルでちょうど百点満点になるからだ。そう考えると、今日の田代はトータルで九十四点をたたき出していた。

「まあ、そうなるかもしれませんが、練習と試合とはまったく違いますから。まだまだです」

そう田代が謙遜すると、

「いや、そうでもありませんよ。仕事柄、大きな大会で色々な選手を見る機会がありますが、君は実に無駄のない綺麗な射撃フォームをしています。ですから、ラウンドを重ねても射撃が落ちないのです。その若さで、それを身につけているとは驚きですよ」

男の説明には、それなりの説得力があった。

話の内容から、射撃協会の関係者のように思えた。

「それは、ありがとうございます。だとすれば、三上さんや浅尾さんのご指導のおかげでしょう…」

田代は、照れ笑いをしながらそう答えた。

「ははは…。田代君は、謙遜ばかりされますね」

どうやら男の方は、田代のことを知っているようだった。

「謙遜なんかではなくて、本当にそう思っています。…あの、失礼ですが、クレー射撃協会の関係の方ですか？」

田代は訊いてみた。

「ははは…。これは失礼。協会関係ではありません。警視庁の宗方と申します」

「警視庁の…？」

田代が驚いた。想像もしていない職業の人間だった。

「はい、そうです。三上社長から、今ならここで君に会えるという連絡をいただいたので、急いで東京からやって来ました。間に合ってよかったです」

「東京から、僕に会う為にですか…？」

「はい、そうです。君に会う為にやってきました」

「いったい、何故ですか？」



田代は一瞬身構えた。

だが、警察の世話になるようなことには心当たりがなかった。

「ははは…、そんなに硬くならないでください。何も、君を捕まえに来たわけではありませんから。その逆です。直接お会いして、お礼が言いたかったのです」

「お礼、ですか…？」

それにも、心当たりがなかった。

「はい。おかげさまで、三か月ほど前に君がアドバイスしてくれた事件が無事解決したのです。そのお礼のことです」

「三か月前…」

そう呟いた田代が閃いた。

「あ…、ひよっとして、あの散弾銃の自殺の…」

三か月前といえ、三上の部屋で見せてもらったあの自殺写真の件だと思いついた。

「思い出されましたね。その件です。しかし、正確に言うと自殺ではなく他殺でした。つまり、君の推察した通りだったのです」

「ああ、やっぱりそうだったんですか…」

やっとな、田代から緊張が解けた。

「練習が終わったら、少しお話をしてもよろしいですか？」

宗方俊夫が、気を使いながら訊いてきた。

「そろそろ切り上げようと思っていましたから、今からでも大丈夫ですよ」

そう言って、田代は手にしていた散弾銃をくの字に折り曲げたまま傍にある専用ラックに立て掛けた。そして、二人はベンチに腰掛けた。

「やっぱり、あれは自殺ではなかったんですね？」

「ええ、その通りです。君はそのことに確信を持っていたのですか？」

「確信というほどではありませんが、他殺かどうかということはともかく、自殺にしてはあまりにも不自然だと感じました」

「ほ…」

それを聞いた宗方は、低いうなり声をあげて黙りこくった。

「あ…。ズブの素人の僕が、専門の方に生意気なことを言ってますみません」

宗方の様子を見た田代が慌てて謝った。

「いやいや、そうではありません。感心してしまつて声を失つたのです」

宗方が笑顔で説明した。

「我々警察は、拳銃のことについては詳しいのですが、散弾銃までにはなかなか手が回りません。質量共にMJ社の情報量や分析力には敵わないのが現状です。そこで、三上社長のような専門家に色々力を貸していただいているのです。そして、実際、三上社長の助言で解決できた事件が何件もありました。ですから、なおさら我々は散弾銃の事案については三上社長に最終チェックをお願いしてきたのです」

そのことは、田代も以前三上恵造から聞いて知っていた。

「しかし、今回の君は、その三上社長をもってしても見抜けなかった事件を見事に解明してくれました」

「い、いや。そんな…。たまたまです」

田代が謙遜した。

「御自分では気が付いていないのでしょうか、三上社長がおっしゃるには、君には普通の人にはない特別な嗅覚があるとのことですよ。この私もそう感じています」

「ははは…、それは買いかぶりですよ」

「いやいや、そう感じたのは、私だけではありませんよ。ですから、今回、君に感謝状が贈られることになりました」

「本当ですか？」

「ええ。しかも、一番ランクの高い警視総監からの感謝状ですよ」

「そんなに凄いことをしたつもりは…。何か、ピンときません」

「実際に、君は凄いことをしたのですよ。恥をしのんで言いますが、あの時、我々はあの事件を普通の自殺と判断して捜査を打ち切ろうとしていたのです。もしあの時、君の助言がなければ大変なことになっていたのです。つまり、本来逮捕すべき凶悪な犯罪者を野放しにしてしまう所だったのですよ」

「ま、まあ、そうかもしれませんが…」

「それと、もうひとつ。君がしたことは単に真犯人の逮捕に貢献しただけではないのですよ」

「と、言いますと？」

「それと同時に、亡くなられたご本人や残されたその方のご家族の気持ちも救ったのですよ」

「そ、そうなんですか？」

「ええ。もし、あのまま自殺ということで片付けられてしまっていたら、殺された本人はどれだけ無念であったことか…。君はそれを救ったのです。ご家族も同様です、一生、自殺者の妻、子供、という汚名を背負って生きていかねばならなかったのです。それが、君のおかげでそうならずに済んだのです」

「な、なるほど…」

その説明を聞いてもまだ、田代にはピンときていなかった。

しかし、それはともあれ、良かったとは思った。自分に「ある種の才能」があり、それが世の中の為になったというのであれば、悪い気はしなかった。

「ところで、三上社長から伺いましたが、君は大学の三年生ですよね？」

宗方が話題を変えてきた。

「はい、そうです」

「就職の方はもうどこかに内定されているのですか？」

本来なら、今は同級生の皆と同様に就職活動を始めている時期であった。早々と、内定の内定をもらっている仲間もいた。だが、田代は夏休みも通して今に至るまで、何の活動もしていなかった。それには理由があった。

「はい。内定までは頂いていませんが、行きたい会社は決まっています」

「差支えなければ、その会社を教えてくださいませんか？」

「ここです。MJ社です。まだ、三上さんには正式には何も伝えていませんが…」

それ以外は考えられなかった。

子供の頃から、そう考えるのが自然だったのだ。

「やはり、そうでしたか。それを聞いたら三上社長はきっと喜ばれますよ」

「そうだといいんですが…」

「間違いありませんよ。ご本人の口からそう聞いていますから」

「本当ですか？」

「ええ。三上社長との付き合いは長いですが、事あるごとに、そうなればいいとおっしゃっていますよ」

「そうですか。良かった…」

田代は安心した。

「ですが、田代君。そんな君にあえてお願いがあるのです。今の君にとって、MJ社に行くことはごく自然な流れでしょう。しかも、互いに相思相愛の仲です。こんなに良いことはありません。ですが、それを承知で言います」

今まで終始笑顔だった宗方の表情が、少し真剣になっていた。

「は、はい。何でしょうか？」

「警視庁に来ていただけませんか？」

「えっ、来てくれというのは、どういう意味ですか？」

「大学を卒業したら警視庁に就職していただけないか、という意味です」

それは、あまりにも意外な申し入れであった。

「ええっ。僕が、ですか？」

「そうです。是非ともそうしていただきたいのです」

「でも、いったい何で僕を…。今回の事件に貢献できたからですか？ でも、さっき言いましたようにあれはたまたまなんです。たった一度のまぐれです。ビギナーズ・ラックというやつです」

実力以上に買いかぶられていると感じた田代は、必死に弁明した。

宗方は、優しい目をしてそれを聞いていた。それから、はっきりと言った。

「いいえ、違います。あれは、決して偶然から導き出されたものではありません。特別な才能によって導き出されたものなのです。君にはその特別な才能があるのです」

「そんなことは…」

「私にはわかるのです。君には生まれついている種のある種の嗅覚があるのです。それは、誰にもあるものではありません。持って生まれた特別な才能なのです。ですから、せつかくの君のその才能を社会の為に役立ててみたくはありませんか？ 多くの人を救ってみませんか？」

「僕の才能を、社会の為に、人の為に…」

「そうです。私の所なら、つまり警視庁でなら、それが実現できるのです」

「それは…」

「タダで、とは言いません。君が、クレー射撃の選手になりたいということは充分に承知しています。もし、うちに来ていただけるのなら、勤務時間内であろうとなかろうと、クレー射撃の練習時間は自由に取っていただいて結構です。勿論、それにかかるすべての費用はこちらで持ちます。試合の遠征費、宿泊費などもすべてです。それで、いかがでしょうか？」

破格の条件が提示された。

大好きなクレール射撃をタダで好きなだけやれて、しかも給料までもらえる。田代にとってこれほどありがたい申し入れはなかった。

「ほ、本当ですか？ そんなことが可能なんですか…？」

「その点は、間違いなくお約束します。警察と言っても、一種の会社組織だと考えてみてください。大きな会社には、必ず広告宣伝費が確保してあります。しかも、最近では企業のイメージアップ予算というのも出てきています。我々のような、ともすれば市民の方々に敬遠されがちな組織にこそ、そういった手法が必要なのです。ですから、我々もその辺を考えて予算を確保するようになったのです。その場合、特にスポーツ関連に多くの予算を割くようにしているのです。市民の方々に直接的に明るさや親しみやすさをアピールすることができませんからね。まあ、よくある、企業が抱えているスポーツ選手社員とまったく同じものですよ」

「そうなんですか…？」

それならば、間違いなくそうしてもらえるのだろうと思えた。

「どうですか、来てみる気になりましたか？」

「ええ。とても、魅力的なお話だと思いますが…」

その時の田代の頭の中には、三上恵造の顔が浮かんできていた。宗方は、それを察していた。

「どんなに条件がいいとは言っても、いきなりこんな話をされて、今日明日に答えを出すのも無理なことでしょう。君の場合、三上社長への相談もあることと思います。幸い、まだ時間は一年以上ありますから、ゆっくりと考えてみてください」

「ありがとうございます。そうさせていただけます」

「ただし、私は心から君に来てもらいたいと思っています。どうか、前向きに考えてみてください」

そう言って、宗方がニコツツと笑った。

## 十・人生の選択

二日後―。

MJ社の工房で銃の組み立て作業中の田代の携帯が、突然鳴った。

三上恵造からの呼び出しであった。田代を訊ねて人が来ているので、すぐに射撃場の方へ来てくれということだった。

射撃場のクラブハウスへ着くと、三上と一緒に見慣れない親子らしき二人がロビーに座っていた。

「ああ、来ましたよ。彼がそうです。田代水丸君です」

さっそく三上が、その親子に田代を紹介した。

三十代後半ほどの母親と小学校の低学年ほどの男の子の二人連れであった。

「突然で申し訳ありません。鈴木と申します。このたびは、夫のことで大変お世話になりました」

「ほらほら、例の…。三か月前の写真の…」

当惑する田代に、三上が説明した。

「ああ、あの時の…？」

「うん。どうしても、直接君に会って、お礼をされたいということ…」

「はい。田代さまのおかげで、夫も私達親子も気持ちが救われました。そのお礼をひと言申し上げたくて、御迷惑を顧みず伺わせていただきました。このたびは、本当にありがとうございます。うございました」

そう言つて、母親が深々と頭を下げた。

隣りの男の子もきちんと一緒に頭を下げていた。

「いえいえ。そんな、迷惑だなんて…」

田代は恐縮して、どうしていいのかわからなかった。

特に、頭を下げるその男の子の姿は、正直なところ痛々しかった。この子はどんな気持ちで頭を下げているのだろうか。たとえそれが、自殺ではなく他に犯人がいたとわかったとしても、大好きな父親が亡くなったことには変わりがないのだ。そして、これからはこの母親と共に、乗り越えていかねばならない苦勞の多い人生が待ち受けているのだ。母親を早くに亡くした田代には、それがわかつていた。そう思うと、いたたまれなくなった。

田代は、思わず男の子の前にしゃがみ込んでいた。そして、思いっきりの笑顔を作つて話しかけた。

「君は、きちんと御挨拶ができて偉いねえ」

田代は、その子の頭を撫でてやった。

「はい。ありがとうございます！」

「君のお名前は何て言うの？」

「鈴木翔英です！」

「そうか、翔英君か…。君はしっかりとしているから、きっと、ちゃんとお父さんの代りにお母さんを守ってあげられるね」

「はい、がんばります！」

「うん、がんばるんだぞ。君ならきっとできるよ。その代わりに、何か困ったことができたら、お兄さんの所へ相談に来ればいい」

田代は、知らず心からそう思っていた。

そして、その気持ちはその子に伝わっていた。

「はい、ありがとうございます。よろしくお願いします！」

「うん、必ずおいでよ。君にはこの田代のお兄さんがついていいるからね！」

田代は、もう一度その子の頭を撫でてやった。

目がしらを熱くした母親が田代の傍を離れたがらない翔英少年を宥めて、帰り仕度を始めた。やがて、何度も田代達に頭を下げながら、親子は玄關を出た。翔英少年は母親に手を引つ張られながら、何度も振り返つては手を振ってきた。田代はそのすべてに応じてやった。

鈴木親子を見送る田代は、小さくなった二人の後姿を見ながら隣りの三上に言った。

「恵造さん。僕は…」

言葉はいったんそこで途切れた。

だが、田代が何を言いかけたかは、三上にはしっかりと伝わっていた。

「いいよ、水丸君……」

三上も親子の後姿を見ながら言った。そして、続けた。

「君の人生だ、君自身が選択すればいいんだ」

兄同然の三上には、田代の言いたいことが手に取るようにわかっていた。

戦力としての田代はMJ社には、絶対に必要な人材であった。だが、田代はより大きな自分の価値を発揮できるステージを選ぶようになっていた。彼は、多くの人を救うことができる道を選ぶようになっているのだ。それは、もはや仕方がないことだった。人として、尊敬できる正しい決断だった。あの親子の後姿を見て三上もそう考えざるを得なかった。であれば、気持ちよく送り出してやろうと思うことができた。

## 十一・熱い視線

東京、日比谷公会堂――

その会場は、集まった聴衆でぎっしりと埋め尽くされていた。

壇上に掲げられた横断幕には、「原発廃止大集会」とある。

東日本大地震による福島原発の事故以来、こういう光景は珍しくなかった。あれ以来、日本中でこういった集会在が頻繁に行われるようになった。特に、大手町や日比谷などの官庁街界限では、大小のこういった集会在が毎日のように開催されている。

演台の後ろには胸に大きなりボンを付けた六人ほどの招待講演者が座り、自分の講演の順番を待っている。大学の教授、評論家、有名音楽家、更には政治家など著名人がズラリと並ぶ。勿論、全員が原発廃止を唱える論客ばかりである。

男が、舞台の袖でそれをじっと見つめていた。

今は、この集会的の主催者であるNPO法人の女性代表が開会の辞を述べていた。

決して、大きな規模のNPOの法人ではない。そうでありながら、これだけの聴衆の動員力と、これだけのそうそうたる顔ぶれの講演者を集められるのは、ひとえに彼女の持つ並外れた人脈であると言われている。その人脈の広さの理由は定かではない。彼女個人のものなのか、あるいは裏に力のあるパトロンが存在するのか、はわからない。

ただ、少なくとも、彼女の女性としての魅力がその理由の一つであることには間違いないかった。見つめる男は、そう痛感していた。

その女性代表の次は、後ろに座るその男の主（あるじ）が演説する番である。男が秘書をしているその主は、高齢だが、まだ政界にそれなりの力を残す現役の代議士である。

じきに、彼女の話が終わり、男の主の番になった。

主は、普段のように如才なく演説を始めた。何十年も政治家を続けてきた主は当然のように、並み外れて弁がたつ。彼の巧みな演説は、冒頭から聴衆を引き付けていた。

だが、それでも男の視線は席に戻ったその女性代表の方に注がれ続けていた。注がれているというよりは、釘づけになっていると表現した方が正しかった。明らかに、男はその女性代表に心を奪われていた。こんなに男の本能を刺激する女性と出会ったのは初めてだった。死んでもいいから抱いてみたい、とまで想う異性は生れて初めてだった。

とうとう、その大会の最期まで男の視線がその女性代表から外されることはなかった。

## 十二、それぞれの門出

千葉県市原市、千葉射撃場―。

クレ―射撃競技の日本選手権は大詰めを迎えていた。

会場が固唾を呑んで見守る中、ファイナリストの田代水丸が最後の射撃に入った。すでに、田代の勝利は確定していた。この時点で、相手には大差をつけていた。

この日の決勝ラウンドにおいても、田代の射撃は不動の安定感を誇っていた。彼に気負いはなかった。今までと何ら変わりない射撃姿勢で最後のクレ―を待つ。

やがて、彼のかげ声と共にクレ―が発射され、それは空中で見事に粉碎され、その勝利に花を添えた。

田代の二年連続の日本一が決まった瞬間、堰を切ったように、会場が割れんばかりの歓声に包まれた。中でも観戦に来ていた大学生の鈴木翔英少年は、飛び上がった。何度でも何度も万歳を繰り返していた。田代はその会場の方に向かって手を挙げて応えた。長髪でハンサムな彼には、そのポーズが堂に入っていた。そのまま、何かのポスターやCMに使えそうなほどに決まっていた。彼のユニフォームの右胸と背中部分に刺繍された「警視庁」の文字を見なければ、どこかのモデルのように見えてもおかしくはないだろう。

一時間後の表彰式で、クレ―射撃協会の会長から田代に優勝トロフィーが手渡された。手渡したのは、新会長に就任した浅尾義和であった。田代と浅尾はこの日一番の笑顔で固く長い握手を交わした。目の前で二人を見守る協会理事長の三上恵造も、満面の笑みで拍手を送っていた。彼は、その二人が長きに渡って師弟関係にあることを知っている数少ない人間であった。

更に一時間後、マスコミ関係の優勝インタビューを終えた田代が、クラブハウスで先にくつろぐ三上と浅尾の元へ戻ってきた。

「お待たせして、すみませんでした。なにしろ、マスコミ関係にはできるだけいいねいに対応して、会社の宣伝をしなければならぬものですから」

「ははは…、会社とはよく言ったもんだ。警察の方々は、よく自分達のことをそういう言い方で表現するんだよね」

三上が笑った。

「とにかく、水丸君。本当におめでとう。僕は、誰にも増して嬉しいよ。まさか、この僕が、水丸君に日本選手権の優勝トロフィーを直接手渡す日が来るなんて、夢にも思っていなかったからね」

浅尾義和は感無量であった。

「はい、僕も同じ気持ちです」

「しかし、僕が若い頃、MJの射撃場で練習できずにいるのを助けてくれたあの少年が、ここまで来るとはね…。あれはまさに、僕が今の水丸君と同じで日本選手権の連覇がかかっていた時だったな…。昨日のことのように覚えているよ」

「ははは…。そういうえは、そういうことになりますね」

「ああ…。プラーの岡島さんが風邪で休んでいて、代わりに水丸君がプラー役を引き

受けたという、例のあれだね？」

三上が思い出したように言った。

「うん、そうだよ。しかも、まだ小学生だったにもかかわらず、水丸君のクレーの発射コントロールは完璧だった。あの時の僕は、普段とまったく変わりなく練習ができたんだ。今考えてみれば、それは驚くべきことだよ」

「それは、浅尾さんだからですよ。弘法は筆を選ばず、ですよ」

「ははは…、君は旨いことを言うなあ！」

「いや、まったく。ははは…！」

三人は大笑いをした。

「いよいよ、水丸君の時代になったんだね」

浅尾は満足気に言った。

「うん。この調子だと、浅尾君の七連覇の記録も水丸君に塗り替えられてしまうかもしれないぞ」

三上が、からかい半分に言った。

だが、それに対する田代の答えは意外なものだった。

「いや、恵造さん。残念ながら、それはなさそうです」

「ええっ、どうしてだい。今の君の腕なら、充分にその可能性はあると思うが？」

「ええ。僕も太鼓判を押しますよ」

浅尾も後押しする。

「いえ、そういう意味ではないんです。僕が、現役を引退するということなんです」

「ええっ、何故だい。そんなのは、まだまだ先の話だろう？」

「まったくだよ。三上君の言う通りだよ。今の水丸君の射撃なら、この先、十年はトップレベルを維持できますよ」

三上と浅尾は顔を見合わせて頷き合った。

「確かにそうかもしれませんが、その自信も若干はあります」

「じゃあ、どうして？」

「実は、来春から、管理職になるようなんです」

「警視庁のかい？」

「はい、そうです。前回の大会で初優勝した時に、階級の特進を受けることができました。そのおかげで、管理職試験を受ける資格ができたんです」

「で、受験したのかい？」

「はい。勧められて、受験して…、合格してしまっただんです」

「そうなる…？」

「そうなる、どこかの部署を持たされることになります。そうなってしまうと、今のよう自由に職務時間内にクレーの練習をすることはできなくなってしまうんです」

「そういうことかあ…」

三上と浅尾が、再び顔を見合わせて頷き合った。

「まあ…、それはそれで、目出たいことだよな」

「うん。日本のクレー射撃界にとっては痛手だが、そうも言っではいられないしな。…で、どんな部署に配属されるのかい？」



「それはまだ聞かされていません。本部長にすべてお任せしております」  
「そうか。宗方さんなら、悪いようにはしないだろう…」

三上が複雑な顔つきでそう頷いた時、浅尾が思い出したように言った。

「そういえば、僕の方も近々新しい職を任されることになりそうだよ」

「浅尾君も？ それは何だい？」

三上が訊くと、

「この間、オリンピックが決まったのだろうか？」

「ああ…、二〇二〇年開催の…。何かその関係で？」

「うん。それに合わせて新しくスポーツ庁という省庁を創設することになったんだが、どうやらそれを任されるようなんだ」

「ええっ、するとそれは…？」

「うん、スポーツ庁の大臣だよ」

二度目の東京でのオリンピックの開催決定は、東日本大震災で沈んでいた日本の人々の心に明るい活力をもたらしていた。国は、そこでより多くの日本人選手が活躍できるように本腰を入れようとしていた。その柱となるが、スポーツ庁の創設であった。そして、オリンピック種目にもあるクレール射撃での輝かしい実績を持ち、それを通して海外に幅広い人脈を持つ浅尾義和にその任が下されたのだ。

「それは、目出たい。浅尾君、おめでどう！」

「ありがとう。…しかし、これからの五年間を考えると頭が痛いよ」

「そうだな。確かに重席だな。何と言っても、オリンピックだから…」

そう返しながらも、三上の心は半世紀前に思いを馳せていた。

半世紀前におこなわれた前回の東京オリンピックの時のことだ。まさにそれこそが、MJ社の大きな転換期になったのだ。当時、海外への事業拡大を目指し始めた父親の則夫と田代水丸の父親である田代幸吉は、初めての国産型競技用銃でそれに挑んだ。結果は、惨敗だった。だが、それをバネにして切磋琢磨を繰り返し、今日のMJ社にまで発展させてきたのだ。そして、則夫の夢は、息子の恵造へと引き継がれていた。

### 十三・漆黒の中で

東京。田園調布三丁目境界―。

夜の十時過ぎだった。

大きな邸宅が建ち並ぶこの境界に人通りはない。無論、商店のネオンサインなどひとつもない。音と光が拒絶された静寂の世界だ。

そのうちの一軒の扉が静かに開いた。大きな両開きの門の方ではなく、その隣りの人が出入りするのを専用にする小さな扉の方だ。

その年配の男は同居する家族の者に気づかれぬように、そっと扉を閉じる。

暗闇の中で、その年配の男は辺りを見回した。誰かを探しているように見えた。道は緩やかな坂になっており、目の前は大きな公園である。だから、周囲には最低限の街灯しかない。坂の上の方にも下の方にも人影は見当たらない。

二、三分程たってから、男は持つて来た携帯電話を手にした。待ち人にかけているのだろう。だが、何回かけても相手の応答はなかった。それで、彼は待つのを諦めて門の方へ戻ろうとした。

その時、坂の上の方から音がした。車の音だ。だが、車体ははっきりと確認できない。無灯火だからだ。

年配の男は立ちすくんでしまった。

九十歳近い彼にそれを素早くとっさに避けるような反射神経はない。

ドンという衝撃音と共に彼の体が宙を舞った。

その車は、無灯火のままスピードを緩めずに走り去った。その間、車のブレーキ音は一度もなかった。

地面に叩きつけられた年配の男が、うつ伏せになったまましばらく体を震わせた。地面をかきむしる。

やがて、彼は完全に動かなくなった。

#### 十四・域外活動

桜田門、警視庁―。

広報室の電話が鳴った。

「室長、お電話です」

取りついで事務官が室長の田代水丸に転送する。

「はい、田代です。…えっ。何故、私が…？」

その電話の内容に、田代は一瞬怪訝な顔をした。

電話の相手が神奈川県警であり、その依頼内容が自殺者の検分だったからだ。だが、話の内容を聞くうちに、田代は納得して了承した。

「…なるほど、そういうことならすぐに伺います。現状の維持をお願いします。ええ、場所をよく知っています」

電話を終えた田代は、あわただしく外出の準備を始めた。

「五十嵐君。すまんが、空いている車を使わせてくれ。神奈川県警の依頼で、急いで出ることになった。場所は、大磯だ」

「わかりました。これをお使いください。お気をつけて」

「ありがとうございます」

部下の五十嵐麻美から車の鍵を受け取ると、田代は地下の駐車場へ急いだ。

急ぎながらも、電話を一本入れる。相手は、MJ社のオーナーの三上恵造だ。手短かに事の次第を三上に話すと、彼は車に乗り込んだ。

田代がわざわざ管轄外の他の県警から応援を求められたのには、二つの理由があった。

自殺の方法が、散弾銃によるものだからだ。

無論、県警にも警視庁にも優秀な鑑識はある。だが、こと散弾銃の案件の分析に関しては、田代の右に出る者はいなかった。

田代は大学を卒業してから警視庁に就職すると、すぐに庁所属のクレイ射撃の選手とし

て活躍し、最終的には日本選手権に連続して優勝した。その後、クレー射撃の第一人者という実績を買われて広報室に引き抜かれた。年齢よりも早く今の室長の地位に特進できたのは、そのおかげでもあった。同時に、彼は自身の経験や知識に加えて、三上恵造や父親のいるMJ社を通じて国内外の散弾銃に関する最新の知識や情報、過去のデータを得られる立場にいた。それは、各警察組織のものを凌駕するほどの情報量であった。そういった理由で、散弾銃に関する事案については他県からの応援要請であっても引き受けるようになったのだ。

今回彼が呼ばれた理由は、もう一つあった。今回自殺したとされている人物が、有名な政治家であり、日本クレー射撃協会の前会長だったからである。

死んだ亀岡喜三郎は、現役を退いてもなお影響力を残す大物政治家の部類であった。

彼は、唯一の趣味だったクレー射撃が高じて、数年前まで協会の会長に就いていた。スポーツ団体や協会が有力な政治家を協会の会長職に据えることは珍しくない。この場合、それはあくまでも名誉職的な立場にとどまり、実質的な運営のトップは理事長ということになっている。そして、その理事長がMJ社の社主である三上恵造であった。ちなみに、亀岡の後を引き継いだ現在の会長職は、やはり有力な政治家でスポーツ庁の大臣を務める浅尾義和である。

庁舎の地下駐車場から地上に出ると、歩道に集まるデモの一群が目に入る。

福島原発の一件以来、この界限で日常的に行われている原発反対のデモの集団だ。この所ひどい雨の日が続いていたので、久しぶりの晴天になった今日に行っているのかもしれない。先頭を歩いているのは女性だった。赤い皮のジャケットを着ているので目立って見えた。それに青と白のマフラーの組み合わせが、フランスの国旗を連想させた。それを見た田代はふと、一枚の絵画を思い浮かべた。誰の作品かは忘れたが、独立を勝ち取る為に自由の女神が先頭に立って民衆を率いている絵だ。

それを横目に見ながら、田代の運転する車は急ぎ霞が関の入口へ向かった。首都高速の三号線に入り、そのまま東名高速へ入って行く。道路は順調に流れ、サイレンを使う必要はなかった。厚木から小田厚道路を使って、滞りなく大磯に着いた。

大磯の出口から緩やかな山間をしばらく走ると、亀岡邸に到着する。松の並木と吉田茂邸で有名な海沿いの東海道までは降りていかない。その途中の斜面の高台に亀岡の屋敷はあった。

彼の屋敷には、クレー射撃協会がらみで何度か訪れて知っていた。とは言っても、訪れた回数割には、田代個人は亀岡との親交はそれほど深くなかった。どちらかというと、三上恵造や浅尾義和に同行するという形が多かったからである。

## 十五 検分

大磯町、亀岡邸―。

それは、完全なる洋館であった。いつもながらの豪華な屋敷であった。

だが、その主人は既にこの世にはいない。そして、その広いアプローチから玄関前にかけては県警の車両で埋め尽くされている。

田代は入口を固める警官に訊ねた。

「警視庁の田代ですが、石塚警部補は、どちらですか？」

「ご苦勞様です。警部補から伺っております。これに履き替えて、こちらへどうぞ。板上などは滑りますのでご注意ください」

手渡された捜査現場専用の真新しいビニールに包まれたスリッパを履いて、その場所に案内してもらう。現場は田代が見慣れた応接間ではなく、始めて入る二階の亀岡の書斎だった。

ドアは開いていた。すぐに、床に投げ出された両足が目に入った。近づく、散弾銃を抱きかかえるようにして息絶えた亀岡の遺体があった。

田代は、土色に変色してしまっている遺体に向かって手を合わせ、頭を下げた。

「田代室長、神奈川県警の石塚です。わざわざお越しいただきましてありがとうございます」

声をかけて来たのは、田代に電話をして来た警部補の石塚茂文だった。

髪を短く刈り上げ、いかにも腕力がありそうながっしりとした体格の四十代半ばほどの男だ。

「とんでもありません。声をかけていただいて助かりました」

石塚から依頼を受けたおかげで、このことが三上恵造をはじめ協会の関係者に早く伝わる分にはありがたいことだった。浅尾義和は政務の為に来ることはできなかったが、三上は、急ぎこちらに向かうとのことだった。現場の検証では、念の為に三上の意見も聞いておきたかった。

「さっそく、拝見します」

「お願いします」

用意してきた手袋をはめた田代は、まず死体の状況を観察した。

胸に一発。それで片がついていた。デジカメで何枚か写真を撮ってから、持っていた。ペンの反対側でワイシャツの胸の部分の裂け目を少しだけめくってみる。そして、その内容を手帳に記録する。

「着衣の該当部には、焼け焦げた跡があります。体に直接当てて発砲した時に起きる症状だと思えます」

すでに、それを確認している石塚が説明した。

「ええ。そのようですね」

それについては、田代も同感だった。

田代は、抱えられた銃の方に目を移した。

「その銃は、亀岡先生ご自身のものですか？」

逆に、石塚が訊いてきた。

「ええ、おそらく…」

使われた銃は、上下二段式の散弾銃だ。亀岡のものに間違いなかった。田代は、それがイタリア製の銃で、どこの社の製品なのかもわかっていた。

会長という名誉職にとどまらず、実際にクレー射撃が大好きな亀岡とは、立場上様々な場所で会う機会があった。亀岡は協会が主催する競技会場に来る時は、必ずと言っていいほど自分の自慢の銃を持参してきていた。高齢の為、さすがに競技に出場することはない

が、関係者達と射撃や銃の話をするのを楽しみにしているのだ。田代は、事あるごとに彼のその銃談議に付き合わされてきた。散弾式銃はあるレベルを超えると、銃そのものの性能には変わりがなくなる。それ以上の値段の開きは、金属部分の装飾や彫刻の内容、あるいは木製部分の素材や仕上げということになってくる。イタリア製の高価な銃になると、高級車並の値段はする。そして、田代は、見事な彫刻が施された目の前のその銃に見覚えがあった。まちがいない、亀岡の所有する散弾銃であった。

田代はその銃の見分に時間をかけた。石塚も黙ってその様子を見ていた。やはり、さっきの鑑識の場合とは時間の掛け方が違うと感じていた。

やっとそれが終わると、田代が石塚に言った。

「あとで銃や弾(たま)をしっかりと触って見たいので、現状の保全が解けたら教えてください」

「わかりました」

鑑識班が引き揚げるまでは、何も触ったり動かしたりはできない。

その間、田代は石塚から本件の概要の説明を受けた。

妻はすでに他界しており、長男夫婦は海外で暮している為、亀岡はここ数十年一人暮らしだった。日常は、契約している専任の家政婦が身の回りの世話をみていた。他には、東京に置いている個人事務所にいる秘書の男性が、週に何回か打ち合わせに訪れる程度であった。

「唯一の身内である長男は、アメリカに住んでいます。到着は明日でしょう。お話を伺えるのはそれからです。とはいっても、もう何年も離れて暮らしていますので、この件に関する特別な何かを期待するのは無理でしょう」

「そうすると、発見したのは、さっきの二人のどちらからですか？」

「はい。家政婦の方です。彼女は今朝の八時頃、いつものように定時に訪れて、亀岡の遺体を発見したそうです。救急への電話の記録では、〇八時〇七分でした。すでに、ひと通りの聴取は済ませてあります。ですが、手がかりになりそうな点はあがってきておりません。昨夜も、普段とまったく変わった様子はなかったようです」

「もう一人の、秘書さんの方は？」

「市村さんという方です。さっき済ませました。こちらの方も特に目を引くような話は聞くことができませんでした。後日また、お話を伺うことになっていきますが、とにかく今は、これからの葬儀などの準備をさせて欲しいということです。犯罪性の有無が確定するまでは公表・口外しないという条件で、一旦お引き取りいただきました。なにしろ、亡くなったのはあの亀岡代議士ですから、いろいろと大変でしょうから……」

「それは仕方がないでしょうね。そうなると、肝心の自殺の動機の方は……？」

「今のところは、これといって浮かんできておりません」

「そうですか。死亡推定時刻は、どのくらいでしょうか？」

「今の段階で申し上げられるのは、その家政婦さんが帰った昨夜六時から、今朝の八時の間ということになります」

「発砲音とか、誰かと電話で話したとか、何かヒントになるようなことは？」

「それも、今のところはまだ……。今、うちの若い者に付近の聞き込みをさせている最中です。それで何かわかるかもしれません。ただ、この界限はご覧のように近隣が離

れていますので発砲音に関しては無理かもしれませんがね」

「そうですね。それに、昨夜もかなり酷い雨でしたから、散弾銃の発砲音であっても周囲には漏れなかったでしょうね。仮にもし、これが犯罪だとしたら、犯人にはとても好都合だったわけだ…」

「そうなりますね」

「犯人のメリットはまだありますね」

「と言いますと？」

「大雨の日は、目撃者は激減します。それに、自分の足跡も車のタイヤ痕も洗い流されてしまいますからね」

「確かに、室長のおっしゃる通りです」

「おっと、失礼。釈迦に説法でした。気分を害されたら謝ります」

「謝るなんて、とんでもありません。本庁の室長さんにありがたい御指導をいただけましたよ。ははは…」

実際、石塚は警察本部長賞を十回以上も受賞している優秀な刑事であった。田代は調子に乗って余計なことを言ってしまったと後悔した。

「ははは…。まいったな。本庁の室長なんかをやらされてはいますが、まあ、僕の専門は散弾銃にかかわる事案のみですから。すべてあれのおかげですよ。あれのおかげで、分不相応な役職をやることになったんです」

照れたように長髪を掻き上げながら田代が指差して見せたのは、部屋の壁際に設置された大きなマホガニーの銃の飾り棚だった。大半はガラス張りになっており、その中にはコレクションとも言うべき亀岡の散弾銃が収められていた。四挺ある。今回自殺に使ったものを合わせると、亀岡は全部で五挺の散弾銃を保有していることになる。当然、どれも高級な機種ばかりである。収められているという表現よりは、飾ってあるという方が正しいだろう。

「ははは…。ご謙遜を…。それにしても、凄い銃ですね。まさに、よく映画やドラマでお金持ちの家に出てくるのと同じあれですね」

石塚が、ため息混じりに言う。

「そうですね。クレール射撃協会の前会長と言うことを差し引いて考えても、凄いですね。ただ、こういうのにも性格が出るんですよ。署の生活安全課の方ならご存知だと思えますが、最近では取締りの強化の一環として、ドラマに出てくるようなこういった見て楽しむようなガラス張りのスタイルの保管方法はなるべくしないように銃の所持者の方には指導しているんです。我々としては、原則として中が見えなくて頑丈な金属製の銃の保管ロッカーを推奨しています」

散弾銃の保有者に対する啓蒙活動、指導は広報室を預かる田代の本業であった。

「ところが、亀岡先生の場合は大金を掛けてわざわざ芯材は金属で、ガラスは防弾製を使ったこの保管用飾り棚を特注させたんですよ」

「へえー、こんなものを特注で…。本当に、散弾銃が好きだったんですねー」

「ええ、本当に銃が好きな方でした。その棚の中に飾られているコレクションは、それだけの大金をかけて棚を特注する価値のあるものばかりです」

「やっぱり、そうなんです。散弾銃ってのは、我々が携帯している小型銃と比べると、

随分と高いものなんでしょうね？」

「そうですね、いろいろありますが…。競技専用のシンプルなものであれば、40万円くらいからです。上級機種で百万を超すくらいといったところでしょうか。但し、高い外国製のものになると更にその四、五倍は軽くします。まして、木材や彫りものに凝ったものになれば、もはや値段は天井知らずですよ」

「はあー。まさに、コレクターの世界ですね！」

「ええ。でも、さっきも言ったように、性格が出ると思いますが。そのいい例が、今の協会の会長をなさっている浅尾義和さんです。あの方は、亀岡先生に引けを取らない大金持ちで、銃のコレクションでも負けない物をお持ちですが、絶対に人の目につくような保管の仕方はしていませんよ」

「スポーツ庁の浅尾大臣のことですね？」

「はい、そうです」

「お会いしたことはありませんが、政治家で大富豪であるにもかかわらず、とても奥ゆかしい方だと評判ですよね」

「ええ。亡くなった亀岡先生とは、協会と政治との両方で接点のある方ですから。石塚さんが早々に教えて下さったおかげで、浅尾会長にもいち早くこの件を知らせることができました」

「いいえ、結果的にそうなただけです。ところで、田代室長。さっきの話ですと、随分と念入りに調べようとされていますが、何か気になる点でもあるんですか？ 何度か、犯人という言葉を使われましたが、つまり、自殺でない可能性も考えられると…？」

やはり、石塚は優秀だと田代は思った。田代が話したことの一言一句をちゃんと覚えているのだ。

「いいえ、そこまでは…。さっきは、とんだ恥をかいてしまいましたが、僕はあなたのような犯罪捜査の専門家ではありません。僕がわかるのは、それが散弾銃の理にかなっているのか否か、のみです。結論が出るまでは、あらゆる可能性を想定したいのです。少しでも可能性があればそれを排除せずに考えたいということです」

それを聞いた時、石塚は田代を呼んでよかったと思った。

本人は謙遜してああ言っているが、やはりただ単にクレール射撃の日本一の肩書だけで今の地位にいるのではないと思った。

初めて顔を合わせた時は、長髪で垢抜けた美男子の田代のその風貌に少し不安を覚えた。警察官とはおよそかけ離れたイメージの男だったからだ。だが、実際は違った。評判通りの男だった。

## 十六、二つの保管庫

しばらくして、三上恵造が到着した。

「やあ、水丸君。御苦労さま」

応接間に降りていた田代水丸に気づいた三上が声をかけてきた。

「ああ、恵造さん。長距離をご苦労様でした」

三上は、茨城県友部町にあるMJ社から車を飛ばしてきたのだ。そして、その車には同乗者がいた。

「あれ、お父さんも一緒でしたか」

同乗者は、田代の父の幸吉であった。

「うん。三上社長がすぐに知らせてくれたので、一緒に乗せて来てもらったんだ」  
「そうでしたか」

日本を代表する散弾銃造りの名匠である田代幸吉は、八十八歳になる今もMJ社の相談役の立場にあった。三上の父の則夫の代から、MJ社の技術的支柱になっている社の宝である。

「亀岡さんのご遺体は？」

「二階です」

書斎に入った二人は、時間をかけてその遺体に手を合わせた。特に、幸吉の方は長かった。

応接間に戻り、家政婦が出してくれた茶を呑みながら、田代は二人に今回のあらましを報告した。

「ざっと、こんな状況です。ところで、協会で一緒の恵造さんとはもなく、お父さんが亀岡先生とそこまで懇意だとは知りませんでした」

「うん。昔、ちよつとあつてな…」

そう応える幸吉は、浮かない顔つきだった。

田代は、高齢の父がわざわざ茨城からこの神奈川の大磯まで来たことが気にかかっていた。亀岡とはまんざら知らぬ仲でもないのはわかっていたが、死亡現場にまで急いで来ることもないと思ったからだ。別れをするのなら、葬儀の場で済むはずだった。それに、さつき現場で亀岡に合掌した時間の長さは、普通の関係ではないと想像された。

そして、幸吉からその理由が明かされた。

「いい機会だから、話しておこう…。実は、亀岡さんとは、古くからの知り合いだったんだ。それも、太平洋戦争の前に遡るほどの古さだ。戦争がらみの思い出したくない話なので、僕も亀岡さんもずっと皆には話さないで来たことなんだが…」

幸吉がゆっくりと話し始めた。

「戦前のことだ。当時、日本はドイツ、イタリアと同盟を結んでおった」

「三国同盟のことですね？」

そうは答えたものの、田代や石塚にとってのそれは、教科書で学んだ程度の歴史の事象の一つにすぎなかった。だが、幸吉にとっては違った。

「うん、それだ…。その関連で、当時、国内の若手の技術者が百人ほど集められてその二国へ技術研修に行かされたんだ。勿論、その技術とは戦争の兵器や情報に関わるものばかりだったがね」

「ひよつとして、お父さんもそのメンバーの中に？」

息子の田代でさえも始めて聞く話だった。

「ああ。そういうことだ」

「そうになると、師匠…。いや、田代相談役の場合は当然、銃の研修ですね？」

三上が訊いた。



「そういうことです」

「まさか、そのメンバーの中に亀岡先生が？」

石塚が、さっそく切れ味の鋭い勘を働かせた。

「ええ、その通りです」

「それは、僕も始めて聞いた…」

双方と長く親しい間柄の三上ですら知らない話だった。

「今の彼からは想像もつかんだろうが、亀岡さんは、とても優秀な探知機、今でいうレーダーなどの関係の専門技師だったんだ」

「ええ、本当ですか？」

田代と三上が顔を見合わせて驚いた。

「ああ、そうだ。僕はイタリア組で彼は、ドイツ組だったから、それほど親しくはならなかったが、それでも、行きの船では一カ月近くも一緒だったからな。それ相応の親睦はあつた。帰国した彼は、すぐに国内最大手の通信・探知機の製造会社に所属して純国産の探知機やレーダーなどの仕事に関わつた。ところが、戦争が終わるや否や、彼はその専門職をきっぱりと辞めて、政治家に転身したんだ。それからの彼については、君達も良く知っているだろう」

「そうだったんですか。あの豪放磊落な亀岡先生が、昔はそんなに優秀な技術者だったとは…。人は見かけによらないものですね」

ちようどその時、作業が終わつた鑑識班から現状を触つてもかまわないとの連絡が入つた。一同は、再び二階の現場に戻つた。

田代と三上に幸吉を加えた三人は、まず亀岡の遺体の状況を確認した。念入りに見終わると県警指定の安置所へ保管するように頼んだ。

次に、使われた散弾銃を手にする。

「使つたのは、会長が一番お気に入りだった。ペラツツイか…。よかつたよ、うちの銃じゃなくて」

MJ社のオーナーでもある三上が、ポツンと漏らした。

これも念入りに確認する。

最後に、散弾銃をくの字型に開放して、中に納まっている円筒形の薬きょうを調べた。

「弾(たま)の方の保管ロッカーは、あれかな？」

田代が部屋の隅にある大きな金庫の上に、もう一回り小さい金庫のような金属製のケースが置いてあるのに気づいた。銃の所有者は、銃本体と弾(たま)を、分けて、それぞれを別々の専用ロッカーに保管することが義務付けられているのである。

レバーをひねるが施錠されている。

「これの鍵はどこですか？」

田代が訊くと、

「これのうちのどれかでしょう」

と、石塚が机の上に置いてあつた鍵の束を渡す。

確かに、そのうちのひとつでケースの扉が開いた。

中には、十数センチ四方角の紙製の箱が幾つか入つていた。その箱の中には二十五発の散弾が隙間なく綺麗に並べられて収められている。ほとんどが未開封のものだが、一つだ

けは、開封済みで何個かの散弾が使われているのがわかる。

「石塚さん。すみませんが、弾（たま）の使用記録簿を探して下さい。それと、さっきの家政婦さんと呼んで下さい」

「はい、わかりました」

銃の所有者は、自分の弾の保有状況を常に記録することを義務付けられている。

いっどこで何発の弾を購入し、それをいっどこでどれだけ使用し、現在どれだけ手元に残っているかを正確に記録しておかなければならないのだ。その状況は、毎年必ず警察に提出しなければならない。それは、亀岡のような実力者であろうが無かろうが徹底して所管警察に管理させられているのだ。

石塚はその依頼を、別の部下に指示した。自分自身はその場から離れたくなかったからだ。田代の行なう一挙手一投足から、片時も目を離してはならないと感じたのだ。

警視庁の田代水丸の名は警察仲間の間でも有名だった。今日たまたまこの場に來ている父親の田代幸吉やMJ社主の三上恵造は、間違いなくこの国を代表する散弾銃のスペシャリストである。だが、田代水丸は更にその上を行くという評判の男だ。

「おかしいな。狩猟用の弾しか入っていない…。競技用の弾は、どこか別の所に保管されているのかな？」

金属製の保管庫の中を覗きこんだ田代が首をひねった。

「おそらく、銃の飾り棚の方だと思いますよ。棚の下の扉の中だと思います」

石塚は、鑑識がそれらしいものを確認しているのを思い出した。

その通りであった。

田代は、鍵の束からその鍵を探し出し、扉を開けた。デザインは違いがさっきのものと全く同じ大きさの紙製の弾の箱が入っていた。

「うん、これだ」

棚の下のケースの中を覗きこんだ田代は、その箱のどれもが未開封であることを確認する。

「やはり、そうなるのか…」

そう呟いた田代の様子に、石塚が敏感に反応した。

「何か、思い当たることがあるのですか？」

だが、その返答を聞く前に家政婦がやって来た。

部屋の入口で二の足を踏んでいる。おそらく、主人の遺体を見るのが嫌なのだろう。

「ああ。すみません、家政婦さん。中に入らなくていいですよ。そちらの廊下で話をしましょう」

そう言うと、田代の方が自ら入口に向かった。

そのあとを幸吉と三上、そして石塚がぞろぞろとついて行く。

「二、三、何うだけで、すぐにすみませうから。それとも、下で伺いましょうか？」

「大丈夫です。ここで結構です。何でしょうか…？」

「では…。亀岡先生は、最近でも狩猟の方はやっておられましたか？」

「いいえ、まったくなさっておりません。筋力も衰えたし、この足腰の状態ではもういかんと、よくおっしゃっております」

「何故、あなたがそれを御存知なのですか？」

「地元の猟友会の方から、よく電話がかかって来ていたからです。最近、山からよく鹿が町中まで降りてくるのです。ですから、その捕獲や駆除のお誘いのお電話が、猟友会のお仲間から頻繁に来ていたのです。先生はそのたびに、さっき話したように断つていらっしやったのです」

「なるほど、それで…。ありがとうございます。もう、結構ですよ。どうぞ、下に降りてください」

田代は、礼を言つてにこやかに家政婦を帰した。

だが、その笑顔はすぐに消え、逆に厳しい顔つきに変わっていた。

「田代室長。何かあるのですか？」

遠慮がちに、石塚が訊ねた。

「ええ…。申し訳ありませんが、今からしばらく、僕をこの部屋に一人にしていただけませんか。皆さんは、下の応接間で待っていてください」

「わかりました」

石塚は、理由は聞かずに黙つてそれに従つた。

本格的な検分を始めてから一時間も経たないうちに、明らかに田代は何か重大な点を見極めたようだった。彼は、これからそれを頭の中でまとめようとしているのだ。三人は、階段を下りて行つた。

田代は外の廊下にある小さめの椅子を書斎の中に持ち込んだ。

それを部屋の隅に置いて腰かけた。

対角線上には、まだ動かされていない亀岡の亡骸が仰向けに横たわっている。目線の定まらない顔は天井を見つめ、ダランとした両手は絨毯の上にある。

しばらく、じつとそれを眺めてから、田代は鑑識から借りたデジタルカメラを手にした。

鑑識員が撮り溜めた数時間前の室内の様子を、モニター画面で改めて見なおし始める。

静寂の中、ピツ、ピツと、モニターの画面を送る電子音だけが部屋中に響く。

ひと通り写真を見終わると、田代は亀岡の遺体の全体が移っている写真のところで画面を止めた。そこでは、まだ、亀岡の両手には使われた散弾銃が抱えられている。

田代は、座っている椅子を動かしながらそのモニターの写真と今の亀岡の遺体を同じ角度になるようにしてから、その二つを見比べた。

田代は、自分の胸に手を当てた。シャツの上からネックレスのペンダントの部分に触れる。そして、静かに目を閉じる。じきに、深いトランス状態に入っていく。

少しづつ、時間がずれた二つの亀岡の遺体を重ねていく。やがて、もう一人の田代水丸が、十数時間前の「時空」と同化していく。

その時、亀岡の遺体に重なった何かが見えた。

赤い色をした何かだ。それが、遺体の上でうごめいていた。ゆらゆらと、陽炎のようになごめいている。それが、何かはわからない。吐き気をもよおすような、不気味な何かだ。おぞましく、悪意に満ちた何かだ。何の動きをしているのかもわからない。だが、鮮やかな赤色に見えた。やがて、それは消えて行つた。

田代は、ゆっくりと長い髪を前から後ろへ掻き上げた。

そして、自問してみる。

亀岡は何故、こんなことをしたのだろうか。何故、ここまでする必要があったのだろうか

か。そのことにどんな意味があったのだろうか、と。

田代水丸は、もう一度長髪を掻き上げた。

亀岡本人に、その意志はなかった。

田代の「嗅覚」は、そう答えていた。

## 十七・可能性

石塚達三人は応接セットにこしかけて、家政婦が用意してくれたお茶を飲んでいだ。

「田代室長殿は、いつもああやって、一人だけで現場に籠ることがあるのですか？」

「私も捜査関係者ではないので普段の彼のことは知りませんが、彼は独特の感覚を持っていますから、そのために一人になりたかったのかもしれないですね」

三上が説明する。

「独特の、感覚…？」

「ええ、何と表現すればいいのか…。犯罪への「嗅覚」とでもいみましょうか…」

そう言いながら、三上は田代幸吉の顔を見た。

「あいつは、母親の方の血統を濃く受け継いでいるのでしょね」

幸吉が頷いた。

「お母様の…、お母様の方とは…？」

そのことに興味を持った石塚が、更に訊こうとした時だった。

「みなさん、お待たせしました」

その田代が二階から下りてきた。

「田代室長。いかがでしたか？」

田代が応接セットに座るや否や、石塚が訊いた。はやる気持ちを抑えきれなかった。

「どんな些細なことでもいいですから、何かあればお聞かせください」

「では、今の時点での私の考えを申しませう…」

田代水丸の劇場が幕を開けた。

「石塚さん。あなたにはお気の毒ですが、これは亀岡先生本人の仕業ではないと思います。

つまり、自殺ではない。これは、先生以外の誰かによるもの…、つまり殺人の可能性があるということですよ」

田代は、一気に結論まで言い切った。

「さ、殺人…ですか…」

その線を予想していなかった石塚は、動揺を隠せなかった。

「そうだとすれば、大変なことになって行くからだ。

「だとすれば、これからの対応がまるで違ってきてしまいます。すぐに、県警の本部長にも報告することになります。人員投下も捜査体制も、報道対策もまったくレベルが変わってしまいます。本当に、間違いないのでしょうか？」

「いやいや、石塚さん。これは、あくまでも私の個人的な見解です。私はこの方面の専門として、経験上でその可能性を申し上げたまでです。いわば、提言です。それを聞いて判断するのは管轄のあなた方の役目です。まあ、私の拙い経験ではありますがね…」

「この手の事案で、田代室長ほどの方がそう言ってしまわれたら、他に物を言える人間はいなくなってしまうですよ。どうか、謙遜はほどほどにして、その可能性と言うのをお聞かせ下さい」

「では…、お話ししましょう。理由は二つです。ひとつ目は、使われた散弾に不自然さを感じるからです」

「あの薬きょうの弾(たま)にですか？」

「そうです。先生は自分で死ぬのには、一番確率の低い弾を使っているのです」

「といたしますと？」

「あれは、スラッグ弾です。競技用ではなく、狩猟用に使われるものです。一粒弾であり、熊や鹿やイノシシといった大型動物用を相手にする時に使うものです。小型動物や鳥類、そしてクレー射撃に使うような通常の散弾ではありません。そして、一番殺傷能力がある弾(たま)です」

「よくわかりませんね。一番殺傷能力が高いことをよく知っている亀岡先生だからこそ、自殺を確実に行うために、あえてその弾を使ったのではありませんか？」

「残念ながら、その逆だと思います。殺傷能力が高いということは、それだけ火薬の威力も強く、発射時の反動も強いということになります。つまり、亀岡先生のような年配者には、反動が強すぎるのです。まして、普通の射撃の姿勢で撃つのならともかく、今までまったくとったことのない姿勢で、しかも理に反した不安定な状態で撃つわけです。そうなれば、自分一人の力では弾の行き先がうまくコントロールできないはずで、更に、一粒弾であることから、中心を外したらそれまでです。銃の扱いに長けた亀岡先生に、そんな基本的なことがわからないはずがありません。もし、先生が確実に自分の心臓を狙うのであれば、コントロールがし易く、更に中心を外しても広がって当たる散弾の方を使うはずで、」

一同は、声を発することも忘れて、その見事な解説に聞き入っていた。

「事実、その弾の強すぎる反動に対処できないことは、さっきの家政婦さんの証言で裏付けられました。最近の亀岡先生は、筋力も衰えて、狩猟ができなくなっているという話からです」

「ああ。それで、さっき、家政婦さんに…」

石塚が呟くように言った。

「はい」コックリと頷いて見せてから、田代が続けた。

「亀岡先生ではあり得ないことがもう一点あります。それは、使われた銃の中に弾(たま)がもう一発残っていたということ。私は、これが不自然に思えるのです。恵造さんは、そうは思いませんか？」

「不自然？ だって、水丸君。あれは上下二段式の散弾銃だよ。通常は、二発入れるものだろう。一発撃てば、一発は残るのが自然だろう。逆に、一発だけ入れるということは普通ではあり得ないわけで、不自然と言うのなら、むしろそちらの方だろう？」

そう言った三上が、隣りの幸吉と顔を見合わせて頷き合った。

「確かに、通常はそうです。でも、恵造さん。よく考えてみてください。自殺しようとする人間が、二発も弾を込める必要があるでしょうか？ 自殺の場合は、文字通り、一発勝負のはずで、」

そう田代が訊くと、

「そ、それは、水丸君。何十年もやっている先生のことだから、日頃の癖で、つい二発入  
れてしまったんだろう」

と、三上が正論を返す。

「石塚さんは、その点をどう思われますか？」

「い、いや…。私も、三上さんの意見でよろしいかと…」

こと捜査に関しては百戦錬磨の石塚も、話が散弾銃の世界になってくると、一般論しか  
返せなかった。

「確かに、皆さんの考え方が普通かもしれませんが、私は別の意見を持っています」

「室長、聞かせてください」

「あの銃に弾を込めた人間は、散弾銃のことをまったく知らない人間だったのではないで  
しょうか」

「つまり、亀岡先生本人ではない…、ということですか？」

「そういうことです。ドラマかなんかの見よう見まねで初めて散弾銃に弾を込めようと  
したその誰かは、その時戸惑ったことでしょう。その銃は、上下二カ所に弾を込めるよう  
なっていたからです」

「つまり…?」

「つまり、自殺を装うということは、言いかえれば一発しか込められない状況なのに、い  
ざ銃を手にとってみて、先に発射されるのが上の方からなのか下の方からなのかわからな  
かったのです。だから、その誰かは弾を上下両方に込めるしかなかったのです」

「な、なるほど。そういう見方もありますね…」

「ええ。そう考えると、すべての辻褄が合うのです。最初に話したように。使った散弾が  
自殺に不向きなものだったということについてもです。犯人は、散弾の薬きょうの中には  
実は色々な種類の弾(たま)が存在するということを知らなかったのです。散弾銃のイメー  
ジだけで、皆同じ金属性の小さな粒、すなわち、散弾が入っているものだと思いついでい  
たのです。実はその粒の大きさや数は用途によってすべて違う。外観は薬きょうのケー  
スは皆同じだが、中には散弾でなく大きな一粒しか入っていない物もあるということを知  
らなかったのです。だから、たまたますぐに目についた金庫の上の狩猟用の弾ロッカーの方  
の弾を、何も疑うことなく普通の弾だと思って使用したのです…」

応接室は、水を打ったような静けさになっていた。

「本当に使うべき弾の方は目立たない銃の飾り棚の下にあり、それは手つかずでした。で  
すが、狩猟用の弾の箱の方は、使った痕跡があった。これについては、弾の使用記録簿と  
照らし合わせれば証明できるでしょう。きつと、記録より二発少なくなっているはずだ。  
しかし、先生自身は、最近、狩猟をおこなっていないわけですから、もし、そうであれば、  
使ったのは亀岡先生ではなく他の人物なのです」

もはや、田代の独壇場であった。

「改めて、提言します。これは、亀岡先生による自殺ではあり得ません。先生以外の人間  
によって行われたもの。すなわち、殺人です！」

彼の指摘は、他の三人に有無を言わせない圧倒的な説得力に満ち溢れていた。

しばらく、応接間に沈黙が続いた。

そして、やっと石塚が口を開いた。

「どうやら、室長がおっしゃる通りのように思えてきました。無論、ひとつの推測、可能性であることは理解しています。しかし、私は本件については犯人の可能性があるかもしれないという前提で捜査を組み立てていかなければならないと思います。何故なら、亀岡先生が自殺するという確かな動機が今のところ見えてこないからです」

「動機、ですか…。石塚さん、言にくいことですが、亀岡会長が自ら死ぬようなタイプでないことは、少なくともここに居る三人は証言できますよ」

三上恵造が石塚にダメを押した。

「やはり、そうですか…。まいったなあ…」

石塚が、がっかりしたようにぼやいた。

最も楽な部類の事案であったはずが、最も厄介な事件に切り替わってしまいそうなことに、さすがの敏腕警部補も落胆の色を隠せなかった。

「だとすれば、大変なことになります。頭の痛いことになってきました」

石塚が、更にぼやいた。

「さつき言われていた捜査体制とかのことですか？」

三上が申し訳なさそうに訊く。

「無論それもありますが、この事件そのものに、です」

「どうということですか？」

「現時点で、物盗りの線がまったくないからです。こんなにお金持ちの家だというのに、何かを盗み出そうとした痕跡がまるでないのです。その点は、さつきの鑑識班が抜かりなく調べています。だから、私はてっきり自殺だと思いついてしまったのです。金庫や部屋のそれらしきところを荒した様子もないですし…。それに、どこからも、誰かが無理矢理この屋敷に侵入したという痕跡がないのですよ」

「もし、これがあなたが言うように物盗りの線でないとなれば、殺人そのものが目的という事になってしまおうということですね？」

「そういうことなのです…。もし、そうであれば本当に厄介です…」

そう言つて、石塚は完全に落ち込んでしまった。

「石塚さん。この件に関して、私達でできることは喜んで協力しますよ」

「大丈夫です、石塚警部補。あなたなら、きっと解決できると思いますよ」

三上と田代が、それを見かねて励ましの声をかけた。

だが、その石塚に最も大きな助け舟になる情報をもたらしたのは、この時声を発しなかった男であった。

## 十八．捜査体制

その日の夕刻―。

神奈川県警庁舎の一階ロビーで、田代は待たされていた。

庁舎内の上階にある県警本部長の応接室には、県警の主だった面々が急遽集められていた。

「間違いないのか、石塚君？」

県警本部長の蔦川が改めて聞いた。ただ、

「いや…。間違いないとまでは、言いきれません。ただ、その可能性が極めて高いと推測されるのです」

石塚は普段より慎重に受け答えをした。

「物証が何も出てきていないのに、どうしてそう言い切れるのかね？」

「その論拠は、今回の鑑識に参加してもらった警視庁の田代室長の助言によるところが大きいのです」

石塚の横に座る刑事部長の日向が補足した。

「広報室長のあの田代か？」

その名前を聞いて、蔦川の顔つきが変わった。

「はい、あの田代広報室長です」

「そうなる…」

「はい。彼の助言となるとまったく無視するというわけにはいきません。他の県警さんでも、あの人の助言で何度も助けられています」

日向は、自信あり気に答えた。

「うん。それは、俺もよく知っている」

田代水丸の評判は、蔦川の耳にも届いていた。

「それで、今回も念の為に石塚君に声をかけさせました。なにしろ、対象は大物政治家です。ですので慎重を期する為にそう判断しました。それに、亡くなった亀岡先生はクレール射撃協会前の会長をしていましたので…」

「なるほど、そういうことか。経緯はわかった。だが、よそはよそ、うちはうちだ。まずは、自分のところの部下の見立てを信じたいところだ。それで、日向君。うちの鑑識班は何と言っているんだ？」

「それが…。始めのうちは、ごく普通の自殺だと言っていました。しかし、後で田代室長の見立てを聞くと、その可能性が高いと、意見を変えています」

「なんだ。うちの鑑識も、だらしがないなあ…」

蔦川が苦笑いをした。

「本部長。彼らを庇うわけではありませんが、仕方がない面もあります。警察の鑑識のマニュアルの散弾式銃の項のすべては田代室長が監修しているのですから。当然、その背景にはあのMJ社の膨大なデータという絶対的なものが存在しているのです」

日向はそれを説いた。  
「わかった、わかった。鑑識の結論は、その前提も考慮しよう。それで、君もそう考えているんだな？」

蔦川が改めて石塚に訊いた。

「はい。田代室長とお会いするのは初めてでしたが、今回の室長の見立ては充分に信じるに値すると感じました」

石塚は、自信を持って答えた。

「だが、第一発見者のその家政婦にも、普段頻繁に出入りしている事務所の秘書にも完璧なアリバイがあったというじゃないか…。そんな不利な状況の中でも、殺しの線捨てき



れないのかね？」

「はい。確かに、殺されたという証拠は今のところ何もありません。しかし、自殺したという証拠も挙がっていないのです」

石塚は怯まなかった。

「う…ん…」

葛川は、思わず声を詰まらせた。

「まあ、優秀な君がそこまで言い切るのなら…。どうかね、武藤君？」

葛川は、隣の武藤副本部長に意見を求めた。

「はい、刑事部のその判断でいいと思います。自殺と他殺の両面で捜査すればいいのですから…。問題は、死んだのが有名な政治家だということです。当面は、隠して捜査にあたったとしても、いずれは世間に知れることになるでしょう。つまり、捜査の時間が限られているということです」

「うん、そこだな。とりあえずできるだけの根回しはしてみるが、隠して捜査するのにも限度があるな。さて、どうしたものか…」

一同は、思案に暮れた。

「いずれにしても、そういうことであれば警視庁に無断でやるわけにはいかないでしょう。それに、「あの方」ならマスコミを抑えながら捜査する術にも慣れていらっしやると思いますが…」

武藤が進言した。彼は、葛川になくてはならない知恵袋であった。

「あいつに相談してみるか？」

「ええ、それがよろしいかと」

葛川が、机の上の電話ではなく自分の携帯を取り出した。電話はすぐにつながった。「ああ、俺だ。…いや、ゴルフのお誘いじゃないよ。仕事の話で相談があるんだ…」

電話の相手とは、かなり親しげであった。

「本部長は、誰と話をされているんですかね？」

石塚は、隣の日向にそっと訊ねた。

「おそらく、警視庁の本部長だよ。二人は、とても仲がいいから」

日向が、石塚の耳元で説明した。

「そうなんですか」

「…わかった。助かるよ…。…うん。じゃあ、今からそっちへ行くよ…」

葛川は、満足そうに電話を切ると、武藤と頷きあった。

三十分ほどして、石塚が庁舎のロビーに降りてきた。田代の姿を確認すると、急いで走り寄る。

「田代室長。大変お待たせしました」

「いえ、いいですよ。…で、いかがでしたか？」

「うまくいきました。内容の特殊性から、警視庁と県警との合同捜査という形をとります。つまり、田代室長と私は特別班という扱いで二人で組んで動いていいということになりましたよ」

石塚が嬉しそうに報告した。

「そうですか、それはよかったです。でも、僕の方は大丈夫かなあ？」

石塚の報告は、あくまでも神奈川県警のサイドの判断である。管轄を超えて動くには、田代が所属する警視庁の方の許可が必要であった。

「蕨川本部長と武藤副本部長がこれから、警視庁の方にその要請に出向くそうです」

「そうですか。さっそくありがたいですね。もし、揉めそうであれば、僕の方から浅尾さんに手を回してもらいますが」

「本部長は、自分のできないことにはOKを出しませんから、おそらくそれは問題ないでしょう。それに、警視庁の相手の方は本部長とはとても仲が良いとのことですから」

「そうですか、なら安心ですね。蕨川本部長は、うちの誰に会いに行くのですか？」

「勿論、おたくのトップ。宗方本部長殿です」

「そうだったんですか。宗方さんに…。それならば、まちがいなく安心です」

田代は心から安堵した。

そして、嬉しかった。宗方こそ、昔、自分を警視庁にスカウトしてくれた恩人であった。

「そうですね。室長がおっしゃるように、一番確実な方です。なにしろ、宗方本部長の上には、都知事と警視総監しかいませんからね。こと捜査の面に限って言えば、実質的なトップ会談です！」

「確かに！」

「そうと決まったら、さっそく動きましょう。まず、何から洗いましょうか？」

こうして、異色の捜査チームが本格的に始動した。

## 十九・里帰り

その三日後―。

田代と石塚を乗せた車は、友部の料金所を降りた。

五分ほど平地を走り、やがて林道に入って行く。このあたりは、茨城県西茨城郡友部町の山間部になる。

左右を木立に囲まれた緩やかな登り坂をしばらく走ると目的地が現れた。

MJ友部射撃場と書かれたゲートをくぐり、白亜の堂々としたコンクリート造りのクラブハウスの脇の広い駐車場に車を停める。

ハウスの入口でオーナーである三上恵造が、二人を出迎えた。

「石塚さん、先日はどうも。今日は、すみません。とてもお忙しいのにここまでお越しいただいて…」

「いえ、たいしたことはありませんよ。思いのほか早く来られましたし、ここまでは室長が道をよくご存知でしたので」

「まあ、当然でしょうね。おかえり、水丸君」

「ははは…。ただいま」

田代にとって、この場所は青春時代を過ごした自分の実家とも言える所だった。

同じ気持ちの三上の方も、そんな家族同様の田代には、他人にするような大げさな迎え方はしなかった。

「田代相談役は、いらっしやっていますか？」

石塚は、実は田代幸吉に会う為にここまで来たのだ。

「中でお待ちです。ご存知の通りのご高齢ですので、石塚さんの方にここまで出向いていただくことになってしまいました」

「充分に承知しております。それどころか、ありがたいことだと思っております」

石塚のそれは、社交辞令ではなく本心だった。実は、この三日間これといった捜査の進展がなく、行き詰りかけていたのだった。

「ご期待に添えるかどうかはわかりませんが、相談役は自宅から今回の捜査に役立つかもしれない写真を持って来ているようです。さあ、どうぞこちらへ」

案内されたクラブハウスの中は、半分がレストランになっていた。天井まで十メートル以上あり、開放的で洒落ていた。そのテーブル席の一つに幸吉が座っていた。

「田代さん、先日はどうも」

「やあ、石塚さん。わざわざ遠い所まで申し訳ありません。また神奈川まで出向くには、少々きつかったものですか」

「充分にわかっています。どうか、気になさらないでください。何か、今回の捜査の件に役立ちそうな物を見せていただけると…?」

「はい、この写真です」

幸吉が、古い大判の写真を差し出した。総勢が百人くらいの集合写真だった。カラーではない白黒の写真だ。どこかの港のようだった。

「これは？」

「イタリアのジェノヴァ港。昭和十六年です」

「ああ、この間おっしゃっていた例の亀岡先生と一緒にいったという…?」

「はい、その時の記念写真です。このあと、私と亀岡さん達とは別々の行動になりました」

「確か、田代さんはこのままイタリアで、亀岡先生はドイツへ行かれたのですよね？」

「はい、そうでした」

「で、この写真が何か…?」

丁度そこへ、三上が手配したコーヒーが届いた。幸吉はそれを、ゆっくりと口にした。大事な話をする前に、頭の中で考えをまとめているように見えた。

そして、幸吉は話し始めた。

「昨日の新聞で知ったのですが、五日前、私の古い知りあいが亡くなっていました。自宅前の道で、車にはねられたのです。ひき逃げでした…」

「それは、お気の毒に…。担当の所轄はどこですか？」

一般人にまでそういう訊き方をするのは、石塚の職業病であった。

「そこまではわかりませんが、東京の田園調布です」

「ああ、あのお金持ちが住んでいるので有名な？」

「ええ。彼も大きな会社のオーナーでしたから」

「そのご友人のひき逃げ事件と今回の亀岡先生との件は、何か関係があるのですか？」

「勿論です。…ここに写っているのが私です」

幸吉が、集合写真の中の若き日の自分を指差した。

「そして、私の右隣が亀岡さんです」

石塚と田代がその写真を覗きこむ。

「ほう…。なるほど、お二人共別人のように若い」

「ははは…。お恥ずかしい限りです。さて、その亀岡さんの隣の人物をご覧ください」

「はい、この方が何か…？」

「彼が、五日前にひき逃げで亡くなった平本節夫さんです…」

「何ですって…？」

「どう思いますか、石塚さん。偶然にしては、でき過ぎていませんか？ 亀岡さんの不審死の前日に、同じ仲間の平本さんの不審死なんて…」

「た、確かに…」

田代と石塚が思わず顔を見合わせた。

「この平本さんと言うのは、どういう方なんですか？」

「この研修に参加していた時は、戦闘機や戦艦の設計製造などの関係でした。あまり詳しいことはわかりません。彼もドイツ組でしたから…。ただ、彼は政治家に転身した上昇志向の強い亀岡さんとは違って、あまり表に出たがらない控えめな性格の方ですから、終生その関係の畑だけを歩いていました」

「田代さん。改めて考えて見て、今回の一連の事件の繋がりをどう思われますか？」

「あなたをここまで呼んでおいて申し訳ないのですが。私も、昨日からずっとそのことを考えていましたが、何も思いつきませんでした」

「そうですか…」

「ただ、そういうことであれば、私よりも死んだ二人と親しい人間がおりますから、その方に伺ったらいいかと思います」

「い、いるんですか。そんな方が？」

「ええ。この方です」

幸吉が、平本の隣りの男を指差した。

「桐島健吾さんです」

「御存命なんですね？」

「おそらく、まだ生きていると思います。大きな会社の社主ですので、もし亡くなれば、平本さんのように新聞に出ると思いますから。まだお若いあなた方とは違って、私のような年齢になると、新聞の死亡欄には必ず目を通すようになるのですよ」

「ははは…。なるほど…。で、この桐島さんというのは、いったいどんな方なんですか？」

「石塚さん、これをご覧ください」

その石塚の問いを予想していたように、三上恵造があらかじめ用意していた何枚かのコピーをテーブルの上に差し出した。

一枚は、幸吉の写真の四人の部分を拡大した物で、他のは、KENEXⅡケネックスという企業グループのホームページを印刷したものだ。そして、そのグループの代表者の紹介欄に顔写真と共に桐島健吾の名があった。古い集合写真の顔と見比べてもその面影は濃く残っており、それが同一人物であると判断できた。

「僕の方は、こんなことでしかお力になれませんが、必ずこういう話になると思ひまして、さつき事務所でコピー等の準備しておきました」

「ありがとうございます。助かります、三上さん」

石塚は、三上達のそういう配慮が嬉しかった。

さっそく、田代と石塚はその資料に目を通した。

ケネックスは、桐島本人によって戦後すぐに設立されたエネルギー関連の企業グループだった。創業当時のスタートは蓄電池、つまりバッテリーの製造販売であった。今では、世の中の趨勢に乗って太陽光や風力などの自然エネルギーの開発に力を入れていた。

「凄い業績ですね」

「ええ。一代でここまで築き上げたとなると、この桐島なる人物は相当のやり手ですね」

二人は異口同音に感想を述べ合った。

「確かに、当時の桐島さんも、人並み外れてエネルギーで上昇志向が旺盛な方でしたよ。ドイツに行ったら、必ず彼らの技術を盗み取ってやると、意気込んでいましたから。そして、実際に彼はその言葉通りのことをやってのけました」

「と言いますと？」

「これは、後々伝説じみたように語られていることですから、真偽のほどは確かではありませんが……。彼は当時のドイツの最先端の蓄電池技術そのものの習得だけではなく、帰国の際に、ドイツが最後まで明かさなかったバッテリーの主材料の粉を自分の爪の隙間に詰めて日本に持ち帰ったというのです。そして、それを解明し、純国産品を開発したという逸話です」

「ほう、それは凄い話ですね」

「まあ、その話自体がどこまでが本当なのかは別としても、そういうところからも、彼の旺盛な性格がわかると思います」

「その桐島さんが、亡くなった二人のことをよくご存知なのですか？」

「どの程度かは分かりませんが、少なくとも私よりは知っているはずですよ。ジェノヴァへ向かう行き船の中では、すでに三人はかなり仲よくなっていましたし、その後のドイツでも彼らは一緒だったわけですから……」

「桐島さんのお宅がどこにあるかはご存知ですか？」

「詳しくは知りませんが、東京のどこかだと思えます」

「田代室長、これは偶然で片付けるレベルではないかもしれません。さっそく平本さんと桐島さんの裏を取ってみましょう！」

石塚は、何かを感じ取っていた。

「では、すぐに東京に戻ることにしましょう」

故郷に戻って一時間もたっていないが、田代は、逸る石塚の気持ちに伝えることにした。

## 二十、血の文字

その三時間後――

田代と石塚は、田園調布署の一室にいた。

平本節夫のひき逃げ事件の詳細を知る為だった。案の定、こちらの方も捜査は難航していた。

担当刑事の説明によると、田園調布は飛び抜けた高級住宅街であるが為に、監視カメラ

の数が普通の街に比べて極端に少ないことが原因のひとつだった。界限にはコンビニや商店などがほとんどないのだ。それは、近年の自動車犯罪の捜査においては致命的な盲点であった。加えて、目撃情報についても同じであった。近所の接点が少ない、往來の人が少ないのがこの街の特徴であり、それが故の田園調布であった。

それが理由かどうかはともかく、署の捜査の雰囲気は、よくある深夜の老人のひき逃げ被害の範疇で進められているようだった。内心が引けたが、二人は、亀岡代議士の事件との関連性については明かさずに、資料の提示協力のみを求めた。

実際、亀岡の事案は、極秘のうちに進めることになっていた。

他殺の可能性が濃厚である以上、亀岡の持つ社会的な影響力に配慮してのことだ。世間には彼が亡くなっていることは公表されていなかった。その事実を知っているのは、大臣の浅尾以下、神奈川県警の葛川本部長周辺のごく僅かであった。亀岡邸の現場の検証に立ち会った県警の関係者はもとより、亀岡の秘書の市村にも、長男夫婦にも真相は伏せられ、同時にすべての関係者にかん口令が敷かれていた。そして、実際に捜査に動けるのは特別に編成された県警の石塚と警視庁の田代という変則の混合チームだけであった。

二人は、田園調布署の署長から提供された一室で、平本の捜査資料に取り組んでいた。

「田代室長。これ、何に見えますか？」

現場写真を調べていた石塚がノートパソコンのモニターを拡大して見せた。

それは、道路にうつぶせに倒れている平本の右手の指先であった。

「何かの文字に見えませんか？」

単に、息絶える前に血濡れた指で、地面をかきむしったように見える。だが、見ようによつては何かを書いてるようにも取れる。

「何かを書くこうとしていたということですか？」

「ええ、そうです。ダイニング・メッセージには、見えませんか？」

「でも、さっきの田園調布署の担当の方は、それについては何もおっしゃっていませんでしたよね？」

「彼らの分析はあてにはできません。私達とは、スタートからして違いますから」

「どう言う意味ですか？」

「どうやら、彼らは、先入観と言う我々刑事にとつて一番持つてはいけないもので捜査を始めています。この事案を単なるひき逃げ事故だという前提で動いているのです。であれば、見落とすのは当然です。これが、殺人目的かもしれないという目を持たない限りは、ダイニング・メッセージという見方はできないのです」

「おっしゃる通りですね。しかし、仮にそうだとすると、はたしてこれがメッセージなのでしょうかね？」

「可能性はかなりあると思います」

「どうですか？」

「縦線とか横線、あるいは斜めの線だけなら、偶然ということにもなりますが、丸ということになると話が違ってきます。丸だけは、本人に書くという意志がないと残らない物ですから」

そう言つて、石塚がさらにモニターの写真を拡大した。

「これなら、どうですか。室長？」

そこには、はつきりと赤い○が記されていた。

「本当だ。確かにこれは○だ。「丸」と読むのか、あるいは数字の「ゼロ」と読むのか…？だとすれば、その左隣の縦線と短い横線は何の字なのかな…？」

「パツと見ると、第一印象はカタカナの「ト」の字に見えますね。…あるいは、平仮名の「と」。…もしくは、漢字の「人」かもしれません」

「可能性のある組み合わせをすべて書き出してみましょう」  
メモをとった二人は、資料を持って犯行現場へ移動した。

現場は、田園調布の駅から放射状に広がる住宅街の北側の地点だった。

住宅街と言うよりは、屋敷街と表現する方が正しかった。署の担当者がぼやいたように、確かに深夜にここで人が車に轢かれたとしても、なかなかそれに気づく人間はいないと思われた。実際、その場で得られるものは何もなかった。

石塚が、目の前にある平本邸の呼び鈴を押した。

「あの、何か…？」

応対に出たのは、平本と同居している実の娘だった。

応接室に通され、挨拶を交わした。彼女は、久美子と名乗った。

形通りの質問をしていくうちに、石塚はそれとなく彼女に訊ねた。

「事故に会われる前の平本さんに、何か変わった様子はありませんでしたか？」

久美子はすぐに反応した。

「実は、父はここ最近何かを思いつめているようでした」

「ほう…。何かを思いつめていらした？」

「ええ…」

石塚は驚くそぶりも見せずに続けた。

「その理由は何ですか？」

「いいえ、理由は分かりませんが…。ただ、かなり深刻な内容だと感じました」

「どうして、そう思われたのですか？」

「娘ですから、父親の日頃の振る舞いを見ていればわかります。夜も、なかなか寝付けないうようでしたし…」

「そこまで、気にされていたのであれば、その理由を平本さん御本人から直接聞かれなかったのですか？」

「勿論、聞きました。でも、そうしたらその場から逃げるように書斎に籠ってしまいましたの」

「取りつく島もなかったのですね？」

「ええ、そうなのです。しかも、その時に、更に気になる言葉を残していったのです」

「平本さんは、何とおっしゃったのですか？」

「おまえに迷惑をかけるかもしれない、と言ったのです…」

思わず石塚と田代が顔を見合わせた。そして、久美子に訊いた。

「平本さんは、あなたにどんなことで迷惑をかけるかもしれない、と？」

「理由は何も…。ただ、そのひと言だけです」

「そうでしたか…。理由をあなたなりに考えてみましたか？ 失礼な例えになりますが、事業の業績が落ち込んでいるとか、取引の関係で何かトラブルを抱えているとか？」

「その点は、絶対に無いはずですよ。私も会社の役員をやっておりますので断言できます。業績の方はとても好調で、しかも、何のトラブルも抱えておりませんわ」

「でも、あなたの知らないところで何か起きていたということは考えられませんか？」

「絶対にございません。私は、よくある同族のお飾りで役員をやっているのとは違うのです。父とは会社経営のすべてに関して相談をしながらやっておりますので、間違いありません。その為に独身でいるくらいですから……」

久美子は半ば怒ったような口調で再度、断言した。

「そうですか。それは、大変失礼しました……」

石塚は、苦笑いを隠すのに苦労した。

「他に何か、その言葉で思い浮かぶことはないでしょうか？」

石塚は、陳謝しつつもこの話を続けた。

「そういえば……久美子が呟いた。」

「何か、思い出されましたか？」

石塚が身を乗り出して訊いた。

「回想録……。そうだわ、それかもしれないわ……」

「回想録とは？」

「先日、ある有名な雑誌から、父へ回想録のお話がありましたの。生まれ育ちから今日に至るまでの、かなり長い内容のものです」

「すると、平本さんはその回想録に関係することになり落ち込んでいらつしやったのですか？」

「そうかもしれません。いえ……、きっと、そうだわ！」

「どうして、そう思われたのですか？」

確信に満ちた久美子の話しぶりにつられて、石塚もつい興奮気味に訊いた。

「それを境に、父の様子が変わっていったからです。原因があるとすれば、今のところそれ以外考えられません」

「そうですか。よく思い出して下さいました。それで、その回想録にかかわることで、何か思い当たることはありませんか？」

「私も、今気がついたばかりですので、まだ何も……」

「そうですよね……。平本さんは、その回想録をすでに書き始めていたのですか？」

「ええ、書いていたようです」

「そうですか。あの……。よろしければ、平本さんの書斎を拝見してもよろしいですか？」

「何故ですか？」

「回想録を書き始められていたとしたら、是非、その内容を拝見したいと思ひまして」

その時さすがに、久美子が「そのこと」に気づいた。

「あの……。色々と父の心配をしていたくのはありがたいのですが、何故そこまでする必要があるのですか？」

「えっ、それは……」

石塚も我に返り、言葉を失った。

「父のひき逃げのことだというのでお話をしていますが、父の最近の様子が、それと何の関係があるのですか？」



「い、いや。つまり、その…」

石塚は返す言葉に詰まった。

ことの真相は、公表できないからだ。

「いや、申し訳ありませんでした。おっしゃる通り、ひき逃げの捜査とは何の関係もありません。行きがかり上、そういう風な流れになってしまっただけです。我々警察官の悪い習性です。立ち入ったお話になってしまい、本当に失礼しました。心からお詫び申し上げます。用向きは十分に済みましたので、今日はこれで帰ることにします」

そう田代が助け船を出し、うろたえる石塚に目配せをした。

そして、二人は、文字通り逃げ出すように平本邸を後にした。

## 二十一・蛙飛び込む

二人は、平本邸のすぐ目の前にある宝来公園のベンチに腰かけた。

豊かな樹木に囲まれ、大きな池のある雰囲気の良い公園だった。気分転換にはもってこの場所であった。

すでに、夕暮れ時だった。

「田代室長、さつきはすみませんでした。僕はどうかしていました。普段なら、あんな風にはならないのですが…」

短く刈り上げた頭を撫でながら、石塚はまるで新人刑事のように突っ走ってしまったさつきの平本邸での自分の行為を恥じた。

「気にしないことです。僕も、心の中では石塚さんと同じ状態でしたから。たまたま、訊き手があなただったというだけですよ」

田代の方は、何事もなかったかのように長い髪を後ろにゆっくりとかき上げながら、公園の景色に目をやる。

さすがに、二人は疲れていた。亀岡の死亡を世間に隠している以上、捜査にあてられる時間は限られていた。それは、いつしかプレッシャーになっていた。特に石塚の方は、精神的にかなり追いつめられていた。

「今日も、タフな一日でした。正直、少々、疲れました…」

「石塚さんでも、疲れることがあるんですね。ははは…」

「ははは…、あたりまえですよ、室長。午前中は、茨城県で、午後は東京ですからね。通常なら、出張扱いですよ」

「言われてみれば、神奈川が本拠地の石塚さんにとってはそうなりますね」

「室長は、疲れていないのですか？」

「勿論、疲れています。でも、おそらく石塚さんほどではないと思います。茨城は僕の地元ですし、この東京も同じようなものですから」

田代は、茨城で生まれ育ち、警視庁に就職してからはずっと東京で暮らしていた。

「ああ、そうか…。ところで、明日はどうしましょうか？ 気になる平本さんの手掛かりの方を追ってみましょうか。それともやはり、桐島さんに会いに行きましょうか？」

「平本さんの方となると、田園調布署に隠していたこともあり、それなりの説明と

根回しの段取りをしないとまずいですね。調整しなければならない相手が多すぎます」

「確かにそうですね。これは、隠密捜査ですからね。こちらの管轄や平本さんのお嬢さんにきちんとした理由を明かして承諾を得ない限りは、平本さんの書斎に入って調べることはできませんよね。時間はありませんが、やはり、もう少し下調べをしてみても、それから動くと思いますよ」

暮れゆく西の空の彼方に目をやりながら、石塚が力なく言った。

「今回の父からの情報は意外なものでしたが、はたしてそれが、亀岡さんの件とどういう繋がりを持つのか……。あるいは、まったくの偶然で、何の関係もないかもしれません。その時は、あなたに謝らなければなりません。貴重な捜査時間の邪魔をしたことになりましたから……」

田代も同じ方向を見ながら言った。

「じゃ、邪魔なんて、何をおっしゃるんですか、室長。とんでもありません。あの情報のおかげで、どれだけ落ち込んでいた気分が高揚したことか。それに、万が一関係なかったとしても、捜査情報というのは、百のうち一つでも当たればいいものなんですから。もう二度と、そんな風にはおっしゃらないでください！」

石塚は、本気で怒ってくれた。

「ははは……。わかりました、わかりました」

「それに、お父上の情報の線が正しいかどうかはともかく、私は亀岡先生を狙った人物は、先生の知り合いの誰かだと踏んでいるのです」

「ほう。それは、何故ですか？」

「あの後、何度も鑑識に調べさせましたが、やはり玄関以外の所から侵入した痕跡はないのです」

「つまり、犯人は玄関から入ったと？」

「ええ、そうですね。そうすると、侵入者は鍵を開けられる特殊な技能を持った者か、あるいは、顔見知りで先生が自ら開けて招き入れてもらえる者か、もしくは先生の自宅の鍵を持っている者か、のどれかです。でも、田代室長が見破られたように、一連の作業の手際の悪さから推測して、玄関の鍵を巧みに開けられるようなことに慣れた人間の犯行ではないでしょう」

「そう断定できますか？」

「ええ、できると思います。その人物は物盗りの犯行に見せかけるような簡単な細工すらしていません。あれだけの豪邸ですから、金品目当ての犯行に見せかければ、かなり捜査をかく乱できたはずですよ。そういうことを思いつかない素人の犯行だとすれば、つまり、犯人は……」

「先生の顔見知りの人間……？」

「ええ、そう考えています。先生が警戒せずに玄関の鍵を開けてもいい相手、もしくは、もともと鍵を預かっている人間だと思います」

「そうか、いずれにしても先生と顔見知りの人間という線ですね……」

「そうすると、まずは家政婦。そして、秘書の市村……。それから、屋敷を管理している不動産屋ということもありますね。しかし、金品が目当てではないとすれば、不動産屋の線は薄いですね」

「先生の女性関係は何かご存じありませんか？ つまり…」

「愛人、ですか？」

「はい、そういった類の自宅のカギを持たせているような親しい女性とか…？」

「そちらの方の話は、協会関係の方からは聞いたことがありませんね。まあ、昔ならともかく、会長はもう九十歳近いですからね。さすがにその線は、どうですかね…」

「ははは…、薄いでしょうね。まあ、念の為に、家政婦さんから聞いてみることにしましょう。…あとは、これも可能性は低いですが、長男夫婦。といったところでしょうか。本人達はアメリカに居ても、日本の誰かに鍵を送ることはできるわけですから。いずれにしても、もう一回該当者達のアリバイや動機などを洗い直してみたいと思います…」

捜査が本職である石塚は、すでにすべきこと、調べるべきことは、漏れなく行っていた。

「殺さなければならない理由、つまり殺人の動機がわかればもう少しやりやすくなるのでしようが」

「ええ、そうなんですよ」

「でも、政治家…、特に亀岡先生ほどの大物になると、いろいろとあるんでしようからね。

動機を探すのも難しいでしょうね…」

「ええ、まったくです。何かヒントでもあれば、そこから広げていくことができるのですが…。やはり僕は、亀岡先生と平本さん、桐島さんの三人の間に何かがあるような気がしてなりません。平本さんが、亡くなる直前に娘さんに言った「おまえに迷惑をかけるかもしれない…」という言葉も、とても気になります」

「それはわかりますが、その言葉にどこまで意味があるのか…。それに、さつきも言いましたが、亡くなった日が一日違いなのはまったくの偶然かもしれませんよ」

「それは考慮します。亀岡先生の件はともかく、平本さんの場合、老人の夜のひき逃げ事件は、珍しいことではありませんから。でも、僕は、何かを感じるのです。半世紀以上前に、あの三人の間に何かが起こったのではないかと。何かの闇の部分があるのではないかと…」

「三人の共通点かあ…」

二人は、それぞれに疲れきった自分の頭の中で考えを廻らせた。それはいったい、何なのかと。

池の方で、ポチャツと音がした。

二人の視線は、流れるようにその池に注がれた。

水の中に、何かが飛び込んだのであろう波紋の輪が広がっていた。

「蛙かなんかですかね？」

「ええ…」と、答えかけた石塚が急に立ち上がった。

「どうされました？」

「潜水艦だ！」

「何がですか？」

意表を突かれた言葉に、田代は戸惑った。

「あの三人の関係を繋げるのは潜水艦ですよ！」

「亀岡先生達のことですか？」

「ええ、そうです。平本さんは若い頃、戦闘機や戦艦の設計製造に関わっていたといえます。その両方の技術に共通するのは潜水艦です。そして、亀岡先生の探知機・レーダー。それから、決定的なのは、桐島さんの蓄電池。これらすべては、潜水艦を建造する技術です！」

「おお、見事に繋がりましたね。さすがは、石塚さんだ！」

「ありがとうございます。だとすれば、それは旧日本軍、なかでも旧日本海軍での出来事です。きつと、そこに何かがあるのです！」

二人は疲れも忘れて、その新しいヒントに没頭し始めた。

「戦時中のことか…。さて、どう調べていいのやら。やはり、防衛省なのかなあ…」

「仮に、それを知る者がいたとしても、年齢的にほとんどの方が亡くなっているでしょうね」

「そうですね。誰か、その当時の事情に詳しい方が…」

田代がそう言いかけた時、石塚がポンと手を打った。

「います。最高の方がいます！」

「どなたかご存知ですか？」

「はい、防衛省で思い出しました。先日、別件で横須賀の防衛大学校に行った時に聞いた話です」

「その方は、やはり自衛官か何かですか？」

「いいえ、まったくの民間人です。確か東京大学の先生だと言っていました」

「東大の…先生…？」

「はい。防衛大学校の方が言うのには、防衛省の人間も含めて日本の海軍の歴史に関しては、その先生にかなう者はいないということです」

「それは、確かに最高の人ですね。では、石塚さんはその人のことを調べてみてください。」

僕は、防衛省の知り合いの方から誰かそういったことに詳しい人を紹介してもらおうことにします」

二人は、さっきまでの疲れも忘れて車に戻った。

翌日、おのおのが調べ聞いた人物の名前を照らし合わせた。

同じ人物の名前だった。田代が防衛省から聞いて紹介された人物も、石塚が言っていたのと同じ人物だったのだ。

## 二十二. 積み荷の正体

午後、目白台―。

別所段郎は、快く二人の訪問を迎え入れてくれた。

二人は、事件のあらましがまだ明かせない旨を陳謝した上で、協力を求めた。別所はこれも快諾してくれた。

「確かに、日本の潜水艦の製造技術はドイツに習ったおかげで飛躍的に伸びました。ドイツのUボートというのを聞いたことがあると思いますが、当時のドイツの潜水艦の技術は世界の最先端でした。敵を探知するソナーの技術、発生音が低く敵に発見されにくいスク

リユールの技術、長時間潜っていられるバッテリーの技術、そのどれをとっても他国をしのご技術でした」

職業柄、別所の説明はともわかりやすかった。だが、

「ですが、それを学んできた日本の技術者達の動向までは、学者の私には知識が及びません」

そう言っつて、別所は若き日の亀岡らが写る写真を応接テーブルの上に戻した。田代幸吉からもらった写真の複製だ。

「やはり、そうですねか…」

「せっかく、お越しいただいたのに、何もお役にたてませんで…」

「とんでもありません。こちらこそ、急に押しかけてわけのわからない質問ばかりして、申し訳ありませんでした」

石塚は、落胆を隠せないまま席を立った。

確かに、記録に残った軍関係の人間ならともかく、当時の若い技術者の話までを別所に求めるのは酷だった。

だが、田代はまだ座ったままだった。

そして、それを訊いた。

「別所先生…。「と・丸」、「人・丸」、あるいは「人・ゼロ」、もしくは「と・ゼロ」という言葉に何か思い当たる節はありませんか？」

「何ですつて、今、何と？」

別所が、今までに見せたことのないような反応を示した。

田代が、組み合わせの言葉をもう一度復唱した。

「それです！」

「と・ゼロ…ですか？」

「それです。それです。ちょっと待っていてください！」

そう言い残すと、別所が慌てて席を立った。

どうやら二階の自室へ何かを取りに行ったようであった。やがて彼は、一つのファイルを手に戻ってきた。

「お待ちせしました。おそらく、これのことでしょう」

古い写真と、かなり年季の入ったやはり古い手書きの資料が挟まれていた。

別所がその写真をテーブルの上に置いて見せた。

潜水艦の全景が写った写真だった。

「これが、お探しの「ト・零号」…。幻の純国産型潜水艦です」

「幻の…潜水艦…？」

「ええ。この写真があるわけですから、実際には、幻ではありません。間違いなく存在はしていたのですが、戦闘に参加した記録がないのです。それどころか、そのものの存在した記録すら海軍のどの書類にも残されていないのです」

「どういうことですか？」

「詳しく教えてください」

田代と石塚がほとんど同時に訊いた。

「その理由は、完成してすぐに行方不明になってしまったからです。しかし、更にもうひ

とつ隠された理由があったようなのです」

別所の説明が始まった。

「ト・零号型は、劣勢になりつつあった戦況の巻き返しを図るべく技術の粋を結集して建造されました。当時としては世界最高・最強の潜水艦になるはずでした。しかし、それを証明する舞台はすでになくなっていました。完成した時には、もはや日本の敗北は目前となっていたのです。昭和二十年の七月に試験航海の為に瀬戸内の秘密の基地を出たト・零号型は、中国の上海沖に居たところまでは確認されています。しかし、その後の消息は露と知れずです。そして、そのまますぐに終戦を迎えてしまった為に、追跡調査もされぬままに終わってしまったのです」

そこまで話すと、別所はひと息入れた。

「その、もうひとつの隠された理由と言うのはどういうことでしょうか？」

石塚は、そちらの方が話が早く聞きたかった。

「ここからは、すべてが憶測と言うことになります……」

「かまいません。お聞かせ下さい」

「試験航海ということにはなっていますが、実は表に出せない重大な任務があったのではないかと推測されるのです。つまり、ごく一部の人間にしか知らされていない極秘の任務です。その任務の極秘性により、人知れず沈められたのではないかということです」

「その極秘の任務とは、何ですか？」

「中国から撤収する際の「大切な荷」を、秘密裏に運び出すのが目的だったと思います。その指揮をしていたといわれているのが、この写真の人物です」

別所がファイルの中から別の写真を取り出して見せた。口髭をたくわえた目つきの鋭い男の顔写真だった。その軍服の様子からして上級将校だとわかる。

「この男は？」

「横山孝作少将です。何かと良くない噂のある人物のようでしたが、彼こそが最も真相を知る人物と言っているでしょう」

「そうですか……。でも、その横山少将もこの時の年齢から察すると、当然もう亡くなられていますよね？」

「ええ、おそらく。生きていれば私もいろいろと話を伺ってみたいところなんです」

「その横山少将は、戦争のあと何をされていたんですか？」

「いや、その彼もト・零号の一件以来、消息が分からなくなっているのです」

「そういうことですか。では、横山少将もその時に乗船していたのですか？」

「そこまでは、わかりません。乗船していたのか。あるいは、日本に居たのか。中国に居たのか……。手がかりはありません」

「そうすると、最後に目撃された上海沖で一緒に沈んでしまったという可能性もあるのですね？」

「いえ。可能性の話をするれば、上海沖ではなく、私はむしろト・零号は日本に帰還していたと思っています」

「どうして、そう思われるのですか？」

「戻ってこれる可能性が高いからこそ、ト・零号がその重要な任務に選ばれたのだと推測されるからです」

「と言うと？」

「海軍の船はもとより、民間の商船では敵に撃沈される危険性が高かったのです。ですから、そんな大切な荷を運ぶのには怖くて使えなかったはずですが。でも、潜水艦、しかも世界最高の性能を持ったト・零号であれば、これ以上の安全な運搬方法はないわけですから……」

「なるほど、道理ですね……」

「しかし、戻ってこれたので、幻になってしまったのかもしれませんが……」

「おっしゃられる意味がよくわかりませんが……？」

田代も石塚も首をひねった。

「ははは……。何度も、紛らわしい表現をしてしまつて申し訳ありません。つまり、仮に、戻つて来たのが出航した瀬戸内の某所であったのなら、状況的にそのあと、そこでト・零号に何が起つても記録に残りにくかつたということですよ」

「どういふことですか？」

「そのすぐそばで、大変な状況になっていたからです」

「終戦の混乱ということですか？」

「それもあります、より直接的な理由です」

「それは、いったい……？」

「……広島の原爆投下ですよ」

「な、なるほど。そうか……！」

それを聞いた二人は、思わず納得せざるを得なかつた。

「そうだとすれば、行方不明の潜水艦の捜索やその乗組員の安否どころの騒ぎではなかつたかもしれませんね……」

「ええ、そういうことなんです」

「そうなると、その大切な荷というのもの？」

「共に消えました」

「それはやはり、金目の物なんでしょうか？」

「はい。私はそれは金塊だつたと思います」

別所は、ズバリと言つた。

「金塊……。そう断言する理由があるのですか？」

「ええ、あります。皆さんがご存知のように、そもそも潜水艦は物を運ぶような構造にはなつていません。二カ所程度しかない外部との出入り口も、人が一人通れる程度の間口しかないのです」

「ハッチですね？」

「そうです。そう考えた時に、大きな物は物理的に持ち込めないわけです。であれば、小さくできて、しかも普遍的な高い価値のある物、即ち、金(きん)以外にはありえない物です」

別所は、いかにも学者然とした、そして、非の打ちどころのない三段論法で締めくくつた。その説明は、憶測と前置きするには、あまりにも説得力があつた。

「確かに、言われてみればその通りですね」

田代達は、何度も頷いた。

別所は古いメモを読みながら、更に話しの精度を高めた。

「それを裏付ける証言がひとつだけ残っていました。当時、上海に駐留していた若い日本の海兵の証言です。終戦直前に、沖合に停泊していた見たことのない潜水艦に正体不明の荷をボートで運ばされたというのです。それは二百個余りの小さな布袋でした。ところが、その布袋は見た目の大きさの割には、非常に重たかったというのです。鉄よりも重く感じましたそうです」

「やはり、金塊だ…！」

「ええ、そう考えるのが合理的でしょう。上海に限らず敗戦目前の時期、大陸からは大量の金塊が秘密裏に日本に持ち帰られたと言われていきます。おそらく、その一部だったのでしょう。量の少なさから想像すると、それは横山少将が個人的に横領しようとしたものなのかもしれませんね」

「そして、それはト・零号と共に、どこかに消えた…」

田代と石塚は顔を見合わせて、呟くようにそう言った。

## 二十三、新規事業

田代と石塚は、もう一度田園調布の平本邸を訪れた。

今度は、正式な捜査協力ということで、娘の平本久美子には事前に連絡を入れた。

管轄の玉川警察署には田代の計らいで、警察の上層部から許可を入れてもらってあった。

田代達にとって今一番必要なのは、平本節夫から得られる情報だった。特に、あの回想録が存在しているのか否かを早急に知る必要があった。

平本が殺されたとすれば、その回想録に理由が隠されているかもしれないからだ。そして、それは亀岡喜三郎の死へと繋がって行くのに違いない。すべては、石塚の直感だった。だが、ドイツ行きで知り合った平本、亀岡、そして桐島の三人が、帰国後もト・零号の一件で繋がっていることはもはや間違いなかった。

平本が久美子に言った「おまえに迷惑をかけるかもしれない」という言葉が気にかかっていた。それは、終戦直前のト・零号の一件に深く関係しているような気がしてならなかった。だとすれば、自分の過去を振り返る回想録の中で、平本はそのことに触れようとしていたのではなからうか。それを知る為には、どうしても彼の書斎に入って調べる必要があったのだ。

だから、久美子には捜査上どうしても会社ではなく自宅でなければならぬと言って頼み込んだ。彼女は渋々と引き受けた。

「ええっ、嘘でしょ。あれは事故ではないのですか？」

事情を聞かされた久美子は驚きを隠せなかった。

「いえ、まだそれは何とも言えません。ですが、その可能性があるのです」

石塚は、腹を据えて答えた。

「だから、あの時刑事さんは、あれこれと父のことを聞こうとしていたのですね…？」

そして、彼女は納得した。

「そう言うことです。黙っていて申し訳ありませんでした。あの時は、捜査の性質上あま



り細かい話ではできなかったのです。実は、今回の案件には現役の政治家さんも絡んでくるかもしれないのです。それで、極秘の捜査なのです…」

石塚は可能な限り、事実を話すしかないと思っていた。

「ですが、あなたにはできる限りのことはお話しするつもりです。こちらも、あなたのお様の事件の解決の為にできるだけ御協力をいただきたいものですから」

隠し事のない今回の石塚の言葉には、前回のような不自然さはなかった。久美子もそれを感じ取っていた。

「わかりました。そういうことでしたら、私もできる限りの協力をさせていただきます。遠慮なさらずに何でも聞いてください」

「ありがとうございます。感謝します」

「ただ、その前に一つだけ聞かせてください」

「はい、何なりと」

「もし、あなた方が推測されるように父が殺されたのだとすれば、犯人の目途は立っているのですか？」

「いえ、申し訳ありませんが、まだそこまでは至っていません。ただ、その糸口のようなものがひとつあるのです」

「糸口？」

「はい。お嬢さんは、「ト・零号」という名前を聞いたことがありますか？」

「ほほほ…、石塚さん。五十代半ばの私に「お嬢さん」もないですよ。久美子でけっこうです」

気を許した久美子は、友好的だった。

「あ、はい…。そうさせていただけます」

「残念ながら、そう言う名前は聞いたことがありませんわ。それは、何ですか？」

「潜水艦です。それも、今の物ではなくて、第二次世界大戦の時の物です」

「まあ、そんなに以前のものですか。それが、何か…？」

「はい。当時、それに平本さんが関わっていたのです」

「そうなんですか…」

久美子は首をひねった。

「やはり、聞いたことはありませんわ」

「平本さんが以前、潜水艦の製造に関わったというような話は、御存知ありませんか？」

「確かに、父は戦時中に戦艦や航空機の設計・製造に参加しておりました。ですが、潜水艦の話は聞いたことがありませんわ」

「そうですか…」

「でも、潜水艦の製造に参加していた可能性は大いにありますよ。父が専門にしていたのは、潜水艦と共通する技術ばかりですからね。今のうちの会社も、そういった技術を発展させたものを扱っておりますから」

「例えば、どんなものですか？」

「よく知られたものでは、最近では、ドローンの制作です。つまり、基本技術は、航空機なら、プロペラ。戦艦ならスクリューを作る技術です」

「なるほど、スクリューとなれば、まさに潜水艦の重要な技術ですね…」

「では、お父様が、戦前に潜水艦の技術の習得の為にドイツに渡られたことは御存知ですか？」

今度は、田代が訊いた。

「まあ、本当ですか？ それも、始めて聞いた話です。父のことはたいていわかっているつもりでしたが、潜水艦のことといい、そのドイツのことといい、案外知っているようですね」

久美子が、寂しそうに言った。

「そうですね。やはり、お父様はそのあたりのことを隠されていたのですね…」

田代がそう返した時、石塚が本題に入った。

「お嬢…、いや、久美子さん。そういったあなた知らないようなことが、つまり、お父様が実の娘にさえも隠していたようなことが、その戦争の時期には他にもまだあると思うのです。そして、それが今回の事件に何らかの形で関わっている可能性が高いのです。ですから…、できましたら…」

石塚が一瞬躊躇しかけた時、彼女がそれを救った。

「回想録ですね？」

大きな企業を切り盛りしているだけに、久美子は呑みこみが早かった。

「は、はい…。ただ、急な話でしたので、捜索令状とかそういう類の物はまだ用意できていないのですが…」

「そんなものは必要ありませんわ。一緒に書齋までいらしてください」

「あ、ありがとうございます！」

もはや、久美子は田代達と同じ目的で動く同志であった。

「散らかっておりますが…」

二階の平本の書齋は、色々な物が散乱していた。急逝後の慌ただしさが窺われた。探す物や整理する物が多かったのだろう。

「まずは、これですね」

部屋に入るなり、久美子が机の上のパソコンの電源を入れた。

「お父様は文章を書く時は、手書きではなくパソコンなのですか？」

「ええ。ほとんど、パソコンを使っていると思います。会社の書類も自宅で作ることが多かったものですから」

「なるほど…」

「ただ、手書きの下書きや資料があるかもしれませんから、机の引き出しや棚の方は自由に開けて探して下さい」

「ありがとうございます」

「それから、必要ならこれでもご覧になってください。ちょうど、父の葬式の準備の為に出てありましたから」

彼女が机の上に数冊の写真のアルバムを置いた。

「ありがとうございます。じゃあ、僕はこちらを調べましょう」

田代が、床に座ってアルバムを手にした。

「私はコーヒーでも入れてきましょう」

「ありがとうございます」

石塚達は遠慮をしなかった。今の三人に「どうか、おかまいなく」という、儀礼的な言葉はもはや不要であった。

「あつたぞ！」

石塚がそう声をあげたのは、丁度久美子が用意したコーヒーを持って部屋に戻ってきた時だった。

書棚の脇に置いてあったアタッシュケースの中に、大きな封筒型の紙袋が五つ入っていた。それぞれの表には、「幼年期」、「青年期」、「起業」などとマジックで書かれている。時代ごとに資料などを分類しているのだ。石塚が探していたのは、そのうちの「戦時中」と表書きにあるものだった。

その紙袋の中に目的のそれらが入っていた。

ドイツの研修時代の写真や絵ハガキ。そして、「ト・零号」の写真や設計図の一部もあった。別所教授に見せてもらったのと同じ写真だった。

「まあ、本当にドイツに行っていたのですね……」

「はい。そして、このように潜水艦の製造にもかかわっていらしたのです」

「何か、当時の記述のようなものは、ありませんか？」

田代と久美子が石塚を囲んで、覗きこむようにして訊く。

だが、結局、一番欲しかった原稿の下書きはそれの中には入っていないかった。

「じゃあ、あるとすれば、やはりこっちですね……」

そう言つて、久美子がパソコンを開いた。仕事に関しては父と一心同体であると言つていたのを証明するように、彼女は平本のパソコンへ入るパスワードも知っていた。

「これだわ！」

久美子が力強く叫んだ。

はたして、いくつかのファイルの中に、めざす「回想録」と名づけられたものがあつた。

一同は、固唾を呑んだ。

すでに、「幼年期」、「青年期」の部分には、かなりの文章が打ち込まれていた。それを飛ばして、注目の「戦時中」の章へスクロールしていく。

「あつたわ。でも……」

久美子が急に力を失った。その章にはたったの数行しか綴られていなかった。

『当時、瀬戸内には、地図から消された島がいくつか存在した。そのほとんどは、旧日本海軍の秘密施設である。終戦直前に、私はそのうちの一つにいた。そして、そこで起きた話を抜きにしてその後の私の人生を語ることはできない。なぜならば、戦後の混乱期にまだ若輩だった私が今の会社を立ち上げられた理由は、その島での出来事に由来するからだ。』

文章は突然ここで終り、次の「起業」の章からはまた、ぎつしりと文章が綴られていた。

「たった……、たった、これだけですか？」

石塚が悲痛の声をあげた。

「ええ。残念ですけど、この章はこれだけのようすわ。他の章は随分と書き込んであるのに……」

久美子が申し訳なきように答えた。

「他の部分とは違って、すらすらと書くわけにはいかなかったのでしょうか。書こうか書く

まいか、散々迷っていたんだと思いますよ」

田代がそう説明すると、久美子が訊ねてきた。

「散々迷ったって…、いったい、その時の父に何があったのですか？」

「それは、我々にも詳しくはわかりません。さっき言った「ト・零号」そのものの存在が、海軍によって秘密にされてきたからです。どうやら、瀬戸内のどこかの秘密の島での何かの出来事だということは、この文章から推測できますが…」

「そういうことですか。そうすると、死ぬ前に父が私に言った「迷惑をかけるかもしれない」という言葉の意味もわからないままなのですね？」

「ええ。残念ながら、今の時点では…」

その短い文章だけをプリントアウトすると、三人はその場に腰かけてコーヒーをすすった。

コーヒークップを手にしながら、田代はまだ途中だったアルバムの続きを見始めた。ほぼ年齢の推移と共に順番に貼られている写真は、中年期辺りを過ぎて壮年期にさしかかっていた。昭和の年号で言うところと五十年代後半である。今のところ、これと言って気になるようなものはなかった。

「ん…？」

アルバムのページをめくる田代の手が止まった。

その一枚の写真には、巨大なプロペラを背にした三人の男が写っていた。

「久美子さん。虫眼鏡、ありますか？」

「こつちにありますよ、室長」

答えたのは、久美子ではなく石塚だった。

回想録を探している時に、机の引き出しの中にあるのを覚えていたからだ。

「やっぱりそうだ…」

その写真の人物達の顔を確認した田代が、そう言って石塚に虫眼鏡を手渡す。

「あの三人だ！」

それを見た石塚が、小さく叫んだ。

「ええ。かなり前のようですが、あの三人ですよ」

「やはり、戦争の後も彼らは会っていたんですね」

「そういうことになりますね」

二人は、お互いの言葉を確認し合うように頷き合った。

「あの三人とは、どなたのことですか？」

そう言っつて、久美子が興味津々に覗きこむ。

「ご覧になってください」

今度は、石塚が彼女に虫眼鏡を手渡す。

「左端がお父様。真中が桐島健吾氏。そして、右端が代議士の亀岡喜三郎氏です」

「ああ、そうですね…」

そう言う久美子には、特に驚いた様子は見られなかった。

「久美子さんは、この桐島氏や亀岡代議士を御存知なんですか？」

「ええ、知っております。この写真は、きつとあの時のかわ…」

「この写真の時のことも御存知なんですか？」

「ええ、もう三十年以上も前になると思いますが、はっきりと覚えています。桐島さんが、新しい事業の立ち上げの為に、父に協力の依頼をしてきた時のものですか」

「新しい事業？」

「ええ…。風力発電です。三人の後ろに写っている大きなプロペラですよ」

「なるほど。そうすると、桐島氏はお父様にどんなことを頼んできていたのですか？」

「その風力発電用のプロペラの設計と製作ですよ。さっきお話ししましたように、航空機のプロペラを作る技術をうちの会社は持っていましたから」

「なるほど、そういうことですか」

「お父様と桐島氏との関係はわかったとして、そうになると、亀岡先生の役回りは何だったんですかね？」

「申し訳ありませんが、そこまでは存じません…」

「そうですか。お父様は、以前から桐島氏や亀岡先生とはこんな具合に親しく付き合っておられたのですか？」

「いいえ、付き合いらしい付き合いは、この時だけだと思います。おそらく、これ以降はまったく会っていないはずですよ」

それについては、久美子はきっぱりと言った。

「そう言い切れる理由でもあるのですか？」

「ええ。だって、父はこの二人が嫌いでしたから」

「本当に？」

「ええ。それはまちがいありません。今でも、はっきりと覚えています。当時、私はこの二人と父が知り合いだったことにまず驚いたのです。父からは一度も聞かされていない有力な人脈でしたから。それで、私はせっかくだからうちの会社にこの二人の力を活用しようとうと父に勧めたのです。ところが、父は猛反対だったのです。断り切れずに風力発電用のプロペラの初期型の設計製作だけには渋々力をお貸しましたが、それ以降は一切関係を絶ってしまったのです」

「そうだったんですか」

「それにしても、お父様は、何故そんなに二人が嫌いだったのですか？」

「その理由は、当時私も父に訊いたのですが、はっきりとは言いませんでした。ただ、相嫌がっているのだけは感じました」

「そうですか…」

それを聞いて、田代と石塚はがっかりしたように顔を見合わせた。

久美子には詳しく話していないが、その理由こそが、実は平本と亀岡の殺人の原因である可能性が非常に高いからだ。そして、彼女はそれを敏感に察していた。

「そういえば、さきほど石塚さんは、これが政治家がらみの事件だとおっしゃられました。それはひよつとして亀岡先生のことですか？」

その彼女の質問を受けた石塚が、田代の顔を伺った。田代はこくりと頷いて、許可を出した。

「久美子さん、これからお話しすることは決して誰にも口外しないと約束していただけますか？」

「ええ、勿論です。ですから、是非聞かせてください」

「わかりました。では、お話しします…。久美子さんが言われたように、私が言っていた政治家とは亀岡先生のことです。実は、先生は数日前に亡くなられているのです」

「まあ、存じませんでした」

「ええ、そのはずです。そうでなくてはならないのです。それを隠しての極秘捜査になっているのです」

「ということは、その亀岡先生の亡くなり方も…」

「ええ、そうなんです。断定はできていませんが、限りなく他殺に近いと考えています」

「そういうことだったのですか…」

「はい。これだけは、私達でも勝手に第三者には明かすことができませんでした。申し訳ありませんでした」

「ほほほ…、謝る必要はありませんわ。そういう事情であれば、言うことができないのも仕方がないことです。亀岡先生はまだそこその影響力を持つ政治家ですからね」

「はい。御理解をいただき、ありがとうございます」

石塚は、久美子の笑顔が心地よく感じられるようになっていた。

「それに、石塚さん。私はもう第三者ではありませんよ。当事者なのですからね」

「ははは…、確かに、そうですね」

二人は心の通じ合った笑顔を交わしていた。

「ですから、あなた方の立場に御迷惑がかからない範囲で構いませんから、できるだけ詳しく話していただませんか？」

「わかりました。すべてお話ししましょう」

石塚は、今度は田代の顔色を伺うまでもなく、久美子に事件のあらましを説明し始めた。

## 二十四 通話の相手

「そんなことがあったのですか…」

平本久美子が、田代達とすべてを共有する立場になった。

「確かにそう考えると、終戦間近の「ト・零号」が姿を消した時に、父達に何かがあったように思えますね…」

「ええ。私達も、どうしてもそうとしか考えられないのです」

田代と石塚が顔を見合せて頷いた。

「そうすると、あれもそうなのかしら…」

そう言った後、久美子が何かを思い出したように黙ってしまった。頭の中で、その何かの確認をしているようにも見えた。

「どうされました、久美子さん。今の話の中で、まだ何か思い当たるようなことがありましたか？」

念の為に石塚が訊いてみた。

すでに、彼女は予想以上に十分な情報や手がかりを自分達に与えてくれていた。だが、今の彼女の素振りには、それでもまだ他に何かがあるかのような期待感が伺えた。

「もうひとつだけ、思い当たることにはあるにはあるのですが、それが今回の件と関係があ

るのかどうか…」

「何でもいいですから、聞かせてください」

「さつきはあのように申しましたが、ひよっとしたら、父はあの二人と連絡を取っていたのかもしれない…」

「つまり、あの三十年前の風力発電の一件の後にですか？」

「ええ。あれがもしそうなら、三十年前どころか、ついこの間です」

「それは、いつですか？」

「父が車に轢かれる前日です」

「ええっ、本当ですか？」

田代達が色めきたった。

「でも、それがあの二人だったという確証はないのです」

「確証はないにしろ、何故そう思われたのですか？」

「その日、父の怒鳴り声私の部屋まで聞こえたのです。どちらかといえば物静かな部類の父がそんな風に怒鳴るのは珍しいことでしたから、気になって父の部屋の前まで行ったのです。どうやら、誰かと電話で話しているようでした。しばらく、父はその相手と激しく口論していました。電話が終わったのを見計らって、ドア越しに声をかけました。大丈夫ですか？と…」

「その時の平本さんの反応は、どんな様子でしたか？」

「父は、しつこい投資の勧誘だったので、つい大声で文句を言ってしまったと、怒鳴ったことを私に詫びていました。でも…」

「でも、あなたはそうは思わなかった、ということですね？」

「そうです。父が言ったように本当に迷惑な投資の勧誘の電話なら、あんなに長く話しているわけがありませんし、それに、父の方から相手にかけていたようでしたから…」

「おっしゃる通りですね。それならば、勧誘の電話というのは作り話でしょう」

「怒鳴るような電話は、少なくとも二回あったと思います。父は電話を一旦切って、それからまたかけていました。その時には私はもう廊下において、その様子がわかりました」

「少なくとも二度、ですか…」

「ええ。そして、その二度目の電話のおしまいの方で、ほんの少しだけ話しが聞きとれたのです。たぶん、最初のうちは普通の声だったのが、だんだん興奮して大きくなっていったからでしょう。そしてその時、電話の相手は見ず知らずの人間ではないと感じました。友人か、友人でないとしても、少なくとも同じ世代の知り合いのように思えました」

「だとすると、その相手の方は誰だと思いましたが？」

「ごめんなさい、そこまでは…。ただ、その時父はこう怒鳴っていました。「君まで、そんなことを言うのか！ 君は、それでも政治家か！ 恥を知れ！」と…」

「同じ世代の政治家…。つまり、亀岡先生…？」

「ええ。ひよっとしたら、そうかもしれないと思ったのですが、その確証は…」

久美子は、何とか石塚達の力になりたいと思っていた。だが、この話には今までのような自信がなかった。

「久美子さん、その情報で充分ですよ。充分どころか、大変有力な情報になるかもしれないよ。電話の通話記録を調べればいいのですから。それで、その時の話し相手がわかり

ます。勿論、あなたの許可さえ頂ければ、の話ですが」

石塚が、余裕をもって笑顔でそう訊いた。

「勿論、調べてくださっていいですわ」

久美子は二もなく承諾した。

「ありがとうございます。そうすると、その時お父様が使われていた電話はこれですか？」

石塚が、書斎の机の上にある電話を指差した。

「いいえ、おそらく携帯の方だと思います」

「携帯ですか……。でも、お父様が電話をしている時の姿はご覧になっていませんよね？」

「見てはおりませんが、切る時の音でわかりますから。耳が衰えている父の携帯は着信音もすべて一番大きい設定になっていますから、ドアの外からでも聞こえるのです」

「ああ、そうか……。では、そのお父様の携帯をお借りできますか？」

「勿論かまいませんが。それが、どこにも見当たらないのです……」

久美子が、困り顔で言った。

「ええっ、本当ですか？」

石塚は確認した。それさえ手に入れば、事件の大きな手がかりになるからだ。

「はい。一応、それらしい所は探して見たのですが……。もう一度、探してみますわ」

すまなさそうに彼女が言うと、

「いや、久美子さん。それには及びません」

石塚が優しい顔で答えた。

「お父様が加入している携帯の会社と番号を教えてくださいただければ、それで大丈夫です。あとは、こちらで」

「だったら、今すぐにお教えしますわ」

## 二十五 政治家の事務所

翌日。

永田町。海洋会館ビル。

田代と石塚は、その中にある亀岡喜三郎の個人事務所を訪れていた。

亀岡邸の玄関の鍵を預かる人物達を洗いなおそうとしている中で、突然秘書の市村信彦の消息がつかめなくなったからだ。市村は独身である為に、彼の日常の行動を知る者は限られていた。地元の交番に頼んで市村のマンションの部屋の中を調べてもらったが、今のところ不在のまま、数日間帰ってきた形跡もないということであった。郵便受けには数日分の新聞が溜まっていた。勿論、携帯電話は依然として不通のままであった。仕方がないので、彼の職場である亀岡の事務所を訪れることにしたのだ。ここに来れば、何らかの話を聞くことができると思ったのだ。

事務所では、一人だけである五十代半ばほどの事務員の女性が所在無しげにしていた。無理もなかった。肝心の事務所の主と雇い主が同時にいなくなっているのだ。よほど不安だったのだろう。事務員は喜んで二人を受け入れてくれた。

入り口のドアを開けるとすぐにある簡素な応接セットに腰かけて、彼女が用意している



お茶を待つ。壁の正面に貼られた笑顔で手を差し出す亀岡喜三郎の大きなポスターが嫌でも目に飛び込んでくる。田代達は複雑な心境で、それを眺めていた。

しばらくして、お茶を運んできた事務員との話が始まった。

「そうすると、市村さんとはこの数日間まったく連絡が取れない状態なのですね？」

石塚が差し出されたお茶をすすりながら訊いた。

「はい、携帯も切っているようなのです」

「今までにそういうことはありませんか？」

「いいえ、一度もありませんでした。勿論、政治家の秘書ですから、普通のサラリーマンさんのように頻繁にということはありませんが、それでも二日も、三日も連絡を寄こさないなんてことはありませんでした」

「内密に遠方へ出張しているとか、あるいは、不意にプライベートの旅行へ行ってしまったりとかは考えられませんか？」

「どちらもありません。そういう奔放な性格の方ではありませんし…。亀岡先生から何か特別な指示が出ていたとも思えません。そもそも、このごろはその先生ご自身ですらも連絡がつかなくなっているのです」

事務員の女性が、不安気に答えた。

それを聞いた田代と石塚は顔を見合わせた。

「実は、その亀岡先生は今入院されているのです」

石塚が、自然にそう答えた。

「えっ、本当ですか？ 知りませんでした…」

事務員は心から驚いていた。

「それで、携帯がつかないのですね？」

「はい、そういうことです」

「それでは、市村さんもその病院では…？」

「いえ、市村さんはその病院にもいないのです」

「そうなんですか。いずれにしても、どちらの病院ですか？ すぐに行きませんか…」

「いや、申し訳ありませんが、極秘入院ですので…」

石塚は、事実ではない話をごく自然に続けた。

「でも、身の回りのこととかいろいろとご不自由でしょうから…」

「いや、心配には及びません。ご自宅の家政婦さんが付き添っていますから」

「そうですか。先生は、どうして入院を…？」

「申し訳ありませんが、それについても申し上げられないのです」

「かなり、良くない状態なんでしょうか？」

「何とも申し上げられません。先生のお立場上いろいろとありまして。その点は、どうかご理解ください。ただ、その関係で市村さんを必死に探しているのです。何か、彼の行先などに心当たりがありませんか？」

石塚は、亀岡の政治家としての秘匿的な立場を事務員との話にうまく悪用していた。

「そういうことだったのですか、それで、刑事さん達は市村さんを…。それでは、お困りでしょうね」

「ええ、とても困っております」

「でも、申し訳ありませんが、本当に私も行き先がわからなくて困っているのです」  
「そうですか…。ところで、市村さんに最近何か変わったようなことはありませんでしたか？」

「私も、私なりにこの数日間いろいろと考えてみましたが、まったく思いつかないのです」  
「そうですか…」

石塚は弱り果てた。それで、思いきって言ってみた。

「宜しければ、市村さんの机とかパソコンの中を拝見したいのですが？ 行動予定などの何か手掛かりがあるかもしれませんから…」

「申し訳ありませんが、そういうことですと任意の場合でも本人の許可を得ませんと、お受けできません。どうしてもというのなら、令状を用意していただきませんか…」

丁寧な口調だが、きっぱりと断られてしまった。

「すみません、刑事さん。私も、ご協力したい気持ちは山々なんです。でも、あとで怒られるのは私ですから、わかって下さいね。本当は、私も覗いてみたいのですが、ご存知のように政治家の事務所には「いろいろ」とありますので、無許可ではどうしても…」

事務員が陳謝した。

「ははは…、ごもつともです、ごもつともです。今の話は忘れてください」

石塚は、田園調布の平本邸の初日の時に続いて、またもや見事に相手に跳ね返されてしまった。だが、あの時とは違って今回は仕方がないと思った。亀岡や市村の事務員への教育は行き届いていた。さすがに国会議員の事務所は他とは違う。対応の管理が徹底されていた。

「あなたは、優秀な事務方さんですね。さすがは、亀岡先生の事務員さんです」

前回と同じように田代がフォローに回った。

ハンサムな年下の男性にそう褒められた彼女はまんざらでもなさそうだった。

片や、行き詰まりを感じはじめた田代は、残りのお茶を飲みながら事務所の室内をぐるっと見回した。壁一面に貼り出された亀岡のポスターに混じって、一枚の場違いなポスターが目に入った。

「あのポスターは…？」

それは、中心に青い地球が描かれたポスターだった。上段に、「私達の地球を守りましょう」というメッセージが大きく書かれていた。

「ああ、それは先生が応援しているNPOのポスターです」

「先生は、環境問題にも力を入れてらっしゃるんですか？」

「はい。環境にやさしいエネルギー関連の支援にご熱心です」

「ソーラーとかそういった類の物ですか？」

「ええ、そうです。それと同時に、原発からの脱却の運動にも尽力されています」

「やはり、福島の問題がらみですか？」

「ええ。そのこともあって、以前にも増して原発の完全廃止と自然エネルギーの促進に力を入れてらっしゃいます。自分の最後のライフワークだと」

「以前にも増して、というと…？」

「はい、自然エネルギー化の促進に関しては、亀岡先生は随分以前から心骨を注がれてきました」

「ほー。福島原発事故の前からというと、先生は先見の明があったのですね」  
「そういう意味では、そうだと思います」

最近、福島原発の事故を境に急にエネルギー問題を自分の政策テーマに掲げる政治家が増えていた。だが、その大半は支持者への受け狙いの為の手段としてである。悪く表現すれば、時流に乗った小手先の政策テーマである。そう考えると、年配の亀岡がずっと以前からそのことに力を入れていたというのは内心驚かされた。田代が抱いていた政治家としての亀岡のイメージとは少し違っていたからだ。

「未来のエネルギーを考える会…？」

そのポスターの下に書いてある主催者のNPO法人の名前を読んだ石塚が、何かに気がついたようだった。

「石塚さん、そのNPOを御存知なんですか？」

田代が訊くと、

「ええ。どこかで聞いたことが…」

呟きながら、自分の手帳をめくり始める。

「あった。やっぱり、同じだ！」

石塚が大きな声で言った。

「何があったんですか？」

「市村さんのアリバイの証言をした人の勤め先ですよ！」

「まちがいない、このNPOなんですか？」

「ええ。ほら…」

石塚が、手帳の一節を田代に見せた。

「本当だ…。そこに書いてある伊坂良子さん、という方が証言者ですね？」

「はい。裏を取った部下の話ですと、このNPO法人の代表者の方で、とても誠実そうで信用できそうな方だったそうです」

「ほう…」

「市村さんは、頻繁にそのNPOの事務所へ行かれていますよ」

田代達に聞かれる前に、事務員の女性が自分から言ってきた。勘のいい女性だった。

「そんなによく行かれていたんですか？」

「ええ。少なくとも週に一回は…」

「ということは、亀岡先生は、かなりこの団体の支援に力を入れられていたんですか？」

石塚が訊くと、

「ほほほ…、それもあってでしょうが…」

言いながら、事務員が笑いだした。

「どうされました？」

石塚が、キョトンとして訊いた。

「ほほほ…、ごめんなさい。勿論、仕事の打ち合わせもあったのででしょうが、市村さんは個人的な理由もあって行かれていたんだと思いますよ」

「といますと？」

そう訊いた石塚にはわからなかった。

だが、田代はすぐにわかった。

「市村さんは、その伊坂さんという代表に個人的な「関心」があったということですね？」  
「はい、お察しの通りです。いい勘をしていらっしやいますね」

事務員が、嬉しそうに田代に向かって答えた。

「何で、あなたがそれを御存知なんですか？」

石塚が訊く。

「ほほほ…、電話でのやり取りの一つも横で見なければわかりますよ。市村さんは、政治家の秘書をしている割には、態度や仕草に出る方ですしね」

「はー、そうですか…」

なかなかの事務員だと、石塚も感じた。

「石塚さん。それだけ懇意な伊坂代表なら、市村さんの所在をご存知かもしれませんね」

田代がそれを促した。

「た、確かに！」

そう言つて、石塚が携帯電話を取り出した。

ポスターの下に書いてある法人事務局の番号に電話を入れてみる。だが、

「えっ、海外に？ …ヨーロッパへ。で、いつお帰りに？ …そうですか、そんなに長期ですか。…わかりました。はい、また改めてかけます」

石塚の顔色が変わっていた。

「海外ですか？」

「ええ。おとといから、急にヨーロッパへ視察に出かけたそうです」

「どのくらい行っているんですか？」

「帰ってくるのは、いつになるかわからないと言いつ残して行ったそうです」

しばらく、思案の沈黙が続いた。

「田代室長、少しひっかかりますね。ひよつとして市村さんは伊坂代表と一緒にヨーロッパへ行ったのでしょうかね。だとすれば、行方不明の理由も、携帯が繋がらない理由も説明がつかます」

「ええ。その可能性はおおいにあり得ますね」

と、田代が同意すると、

「でも、刑事さん。市村さんが私に無断で海外に、しかも長期間も行くなんてことは考えられませんよ。もし行くのなら必ず私に言い残していくはずですよ」

事務員が自信を持って進言した。

「そうですか…。では、まず、その確認をしましょう」

そう言うやいなや、今度は田代が携帯を取り出した。

相手はすぐに電話に出た。

「五十嵐君。今、どこにいますか？」

相手は警視庁広報室の部下の五十嵐麻美であった。

「そうですか、ちょうど良かった。急いで調べてもらいたいことがあるんですが、大丈夫ですか…？ …じゃあ、頼みます。…出国者記録です。対象は、一週間前から今日にかけてです。一人は、市村信彦…。そう、その字です…。住所は新宿区矢追町です…。それから、もう一人は伊坂良子…。そうです…。住所は分かりません。勤務先は、NPO法人・未来のエネルギーを考える会の代表です…。えっ、年齢…？」

田代が、傍で聞いている事務員にそれを聞こうとすると、彼女は察したように、指を三本立てて「三十代後半です」と応えてくれた。田代は携帯を耳に当てながら、ぺこりと事務員に向かって頭を下げ、礼を言う動作を返した。

「…三十代後半だそうです。うん、これから僕もそちらへ戻ります…。では、宜しく願います…」

「室長。今の電話は警視庁の？」

「ええ。部下の五十嵐君です」

## 二十六・支援者たち

田代と石塚は、亀岡の事務所から警視庁の広報室に戻った。

部下の五十嵐麻美は、調べが終わったらしく資料をファイルにまとめていた。

国立の工科大学を優秀な成績で卒業した彼女にとって、パソコンを使つての調査はお手物だった。在学中からその優秀さを買われていた麻美は、多くの大手コンピューター関連産業や電気産業から誘いを受けていた。だが、彼女はすべての断つて、警視庁に入庁した。それは、彼女の子供の頃からの夢だった。

「それで、五十嵐君。結果はどうでしたか？」

手短に同行の石塚の紹介を済ませると、さっそく田代は結果を聞きたがった。

「結論から言いますと、この数日間、二人共国外に出た記録は残っていません」

「二人共ですか？ 市村さんはともかく、伊坂代表もですか？」

「市村さんが出ていないのは間違いありません。貨物船にまぎれこんで密航でもしていない限り、絶対に出国していません。ただし、伊坂代表についてはコメントのしようがありません」

「どういうことですか？」

「記録に残っていないというのは、その言葉の通りなのです。つまり、伊坂良子という該当者そのものがどこにも見当たらないのです」

「ええっ。それはつまり、そういう人間が存在しないってことかい？」

「はい。まったく同姓同名の女性は日本に四人ほど存在します。ですが、室長達が調べようとしている伊坂良子という女性に該当するような人間はどこにも存在しないのです」

優秀な麻美がそう言い切るのであれば、間違いないだろう田代は思った。

「じゃあ、偽名ってことになるのか…」

「まあ、偽名とまでは行かなくても、何かの事情があつて本名以外の名前を使っているのかもしれない。それはよくあることです。いずれにしても、免許証や戸籍謄本など、公的な身分を登録しているものに関しては、その伊坂という人間は存在しません」

「糞っ、それは厄介だな…」

石塚が唇をかんだ。

「これが、「未来のエネルギーを考える会」のホームページの写しです」

あたりさわりのない、ごくありふれたNPO法人のホームページだった。

設立目的の欄には、原発反対や自然エネルギーの促進とある。そして、肝心の組織の概

要の欄にも、代表者として伊坂良子という名前しか紹介されていなかった。

「これじゃあ、何の手掛かりにもならないな…」

再び、石塚が唇をかむ。

「ええ。せめて、この人の顔写真でもあれば、顔認証システムを使って空港での出入りが確認できるかもしれないんですが…」

麻美も悔しそうに言った。

すぐに石塚がそのNPO法人の事務局に電話を入れた。だが、もう誰も電話にはでなかった。

「出ません。もう、みんな帰ってしまったようです…」

「そうですか…」

今度は、田代が携帯を取り出して、どこかへ電話をかけた。

「もしもし、警視庁の田代です。…はい、先ほどはどうもありがとうございました。ひとつお願いがあるのですが…。さっき話に出たNPO法人の伊坂代表の写真かなにか、顔を確認できるものはないでしょうか…。ええ…。調べましたがそのホームページにも載っていないのです。…そうですよね。わかりました、結構です…。はい、どうもありがとうございました」

電話を切った田代が、がっかりとしたように首を横に振ってみせた。

「ひよっとしてと思い、さっきの亀岡先生の事務所の方に訊いてみましたが、やはり伊坂代表の手掛かりはないようです」

「そうになると、ゴーストを相手に捜査するしかないんですね。もし、本名のパスポートを使って海外に出国でもされていたら、お手上げですね」

石塚も同じように首を横に振って力なく言った。

二人の人間が不可解な死をとげ、その関係者が姿を消していく。調べれば調べるほど、闇に落ちていくようだった。

しかし、ここで落ち込んでいたはずの麻美が一筋の光をもたらした。

「それじゃあ、室長。こちらの資料はどうですか？」

彼女が、細かい数字などがぎっしり印刷された紙の束を差し出した。

「五十嵐君。まさか、これは？」

「このNPO法人の十五年分の口座記録です」

涼しい顔をして、彼女が言った。

「おいおい五十嵐君。いくらなんでも、これはちよつとやり過ぎですよ。本件は非公開捜査で、丸ガイの口座を開ける手続きすらやっていないんですから」

外見の美しさから広報室に配属されてはいるものの、麻美のコンピューターを使つての能力は、サイバー犯罪対策課に配属されても充分にやっていけるほどの高さであった。だが、時として彼女のその能力は暴走気味になることがあった。

「すみません。出そうか出すまいか迷っていたのですが、お二人の落胆した様子を見てみると…。それに、いくつか気になる点があつたものですから…」

「まあ、もうやってしまったことは、とやかく言ってみても仕方がないですね。それで、何が出たんですか？」

「はい。入金と出金に一つの決定的なパターンがありました。そして、その二つとも見事

に十五年間変わらずに続いているのです」

「それはどれのことですか？」

「まず、入金の方ですが、黄色い網を掛けたものです。入金者は毎月決まって同じです。それが十五年間切れ目なく続いています。おそらく、そこがこのNPO法人の柱になっているスポンサーでしょう。というよりは、このNPOはスポンサーのダメー組織と言って間違いないでしょうね」

「カブシキガイシャ・フウコウ…？」

石塚が右側にある入金者欄の名前を読む。

「それは、「風光Ⅱふうこう」という名の商社です」

そう言って、麻美が別の資料を取り出した。

「風光は、KENEXⅡケネックスというエネルギー関連グループの中の商社部門のひとつです」

「何だって？」

その親会社の名前を聞いた田代と石塚が声をあげた。そして、顔を見合わせる。

「どうやら、ビンゴですね？」

調査の詳細を知らない彼女が、興味深そうに言った。

「ははは…。すまんが、本件の詳細を明かすのはもう少し待ってくれ。いろいろとあつてね…」

田代が陳謝すると、

「いいんです。政治がらみであれば、仕方がないでしょう」

麻美がわかったように返してきた。

「えっ。君は、何でそれを？」

本件は、警察内部でも限られた一部の人間しか知らないはずであった。

「もうひとつの、パターンの方ですよ。出金欄を見ればわかりますよ。その青色の網掛けをしてある方です」

「ツルカメカイ…？」

「鶴亀会Ⅱつるかめかい」という政治団体です。それは、大物代議士の亀岡喜三郎の後援会です」

「な、何と…！」

田代と石塚が思わず顔を見合わせた。

「こちらも、毎月決まって支払われています。十五年間欠かさずにです。しかも、かなりの大金です」

「うーん…」

それを知った田代と石塚は絶句したまま動かなくなった。

そして、やっと田代が口を開いた。

「五十嵐君、とても助かりました。申し訳ないが、石塚さんと二人だけにさせてください」

「はい。では、失礼します」

後ろ髪をひかれる思いに堪えながら、麻美は潔く部屋を出た。

「田代室長。こうなってくると…」

「ええ。桐島と亀岡先生の関係は、私達が考えていた以上に大きくて深いですね…」

トントンと、部屋をノックする音が聞こえた。

「はい、どなたですか？」

田代がドアに向かって訊ねた。

内心、迷惑であった。今まさに事件は急展開の様相を見せ始め、それに集中しようとしているところであった。桐島と亀岡との現在の強い繋がりを突きとめた功労者の麻美ですら退室してもらったくらいなのだ。

が、名乗らぬままにドアは開けられた。

「すみませんが…」

文句を言おうとした田代が、急にそれをやめた。

「ははは…。お邪魔だったかな？」

ドアから顔を覗かせたその年配の男は、満面の笑顔であった。

「ははは…。とんでもありません。さあ、どうぞ」

同じように笑顔に変わった田代は、上座に位置する自分の席を譲って言った。

六十絡みの品の良いその男は、遠慮せずに空けられた席に座った。

石塚は、啞然としてその成り行きを見ていた。今の田代は、自分と同じで誰にも邪魔されたくないはずであった。最も気を許している部下の五十嵐麻美でさえ退室してもらったほどののだ。だが、田代はその突然の来訪者を心から喜んでいようだった。

「田園調布署への根回しの件はありがとうございます」

「いや、何でもないよ。政治家がらみだという、うまい理由があったからね。楽に話を通せたよ」

「なるほど、言われてみればそうでしたね」

二人は仲良さそうに笑い合った。

「あの…」

状況のわからぬ石塚が、とりあえず声を発した。

二人の会話のやり取りから、田園調布署へ話しを通したのは入って来たその人物なのだろうことはわかったが、しかし、後の言葉が続かない。

「君が、神奈川県警の石塚警部補ですね？」

品の良い男の方が笑顔で確認してきた。

「はい、そうですが、そちら様は…？」

「警視庁を預かっております、宗方です」

「えっ？」

石塚は耳を疑った。

「石塚さん。この方が宗方本部長ですよ」

まだ、理解できていない石塚に田代が説明を加えた。

「あっ！」と、叫んで石塚が慌ててその場に立ち上がった。

「あ、あまりにも田代室長と親しげにされているもので、まさか、本部長殿であるとは…」

知らぬこととはいえ、大変失礼いたしました！

まるで警察学校生の訓練の時ように背筋をピンと伸ばして敬礼をし、直立不動の姿勢のまま天井を見つめる。無理もなかった。相手は実質的に警視庁四万二千人の頂点に立つ絶対的な人物である。まして、名本部長としての宗方の名声は、関東一円の警察に知れ渡っ



ていた。

「ははは…、そんなに彼処ばらんでもいいですよ。さあ、元のように座って、リラックスしてください」

「はっ、失礼します！」

不意を突かれた石塚が正常な状態に戻るのには、もう少し時間がかかりそうだった。

「君が感じたように、実際、僕と田代君とはとても親しい間柄なんですよ。彼は、僕が頼みに頼み込んで警視庁に来てもらったんですから」

「そうだったのですか…」

「でも、僕は無理にでもそうして良かったと思っています。僕の目は正しかったことを彼はそれから何度も証明してくれましたからね。今回の一件も、まさにそうです」

「はい、それは私もよくわかっております。あの時、もし田代室長に現場を見ていただかなければ、とんでもないことになっていました」

それについては、石塚自身が身をもって知っていた。

そして、すべてはそこから始まったのだ。

「やめてくださいよ、二人共…。たまたまですよ」

と、謙遜する田代に対して、

「君はいったい、いつまでそうやって謙遜し続けるのかねえ。しかし、もうビギナーズ・ラックという言葉は使わせないぞ。ははは…」

宗方が嬉しそうに笑った。

「確かに、さすがにもうそれは使えませんか。ははは…」

田代も嬉しそうだった。

そんな二人のやり取りを見ていて、本当にこの二人は階級を超えて仲がいいのだと石塚は感じた。

「そういえば、石塚警部補のことは葛川君も褒めていましたよ。県警でも一、二を争うほどの優秀さだと」

「いやいや、とんでもありません。特に、このところへまばかり繰り返して…」

石塚はまだそのことを気にしていた。

「だとすれば、それは疲れのせいもあるのでしょう。そのことは、捜査員の数を限定し、捜査の期限を短く切った僕や葛川君にも責任の一端があるんですから、あまり気にしないことです」

石塚は、最高峰の地位にありながらも、末端の者にさえ気遣いを忘れない宗方の言葉に感動のようなものを覚えていた。豪放とソフトという表現方法の違いこそあれ、葛川も宗方も部下思いの素晴らしいトップだと感じられた。

「さて、諸君。例の亀岡先生の件はどんな状況かい？」

宗方の目が戦闘モードに切り替わった。

田代と石塚はこれまでの三日間の動きを交互に説明した。説明を受けながら、宗方はこの二人が実に息の合ったいいコンビであることを感じていた。今回の複雑な話の流れもわかりやすく整理されて、自分の頭の中にスムーズに入ってきていた。

「…なるほど。ということは、太平洋戦争前に知り合った亀岡先生と桐島健吾の関係は、その後もずっと続いてきたということだな」

「ええ。おそらく、亀岡先生は政治の側面から桐島のエネルギー関連の事業に有利になるような活動をしてきたのです。自然エネルギーの開発への国の補助金の法案促進や原子力政策の廃止への働きかけなどでしよう」

「その見返りとして、自分の政治資金を桐島から回してもらおうというわけです」

田代と石塚が息の合った説明を続けた。

「しかし、君達。政治家と企業が、その関連法案や政策がらみで持ちつ持たれつの関係にあるのは、そんなに特別なことではないだろう。むしろ、それが常識と言ってもいいくらいだ。それが原因で、殺人にまで発展していくものかなあ」

「確かに、そうかもしれません」

石塚が、短く刈り上げた頭を撫でながら困ったように続けた。

「そうになると、やはり原因はもっと遡って「ト・零号」に関わる何かということになるんですかね？」

「私も石塚さんの考えに同感です。そう考えていいと思います。亀岡先生と桐島は共に上昇志向が旺盛です。二人は同類同士で互いに協力し、利用し合う仲だったのでしよう。ですが、対して平本さんはちよつとその二人とは人種が違うような気がします。彼は、あの二人のようなギラギラした上昇欲はない人間です。いかにも技術者らしい控え目で目立つのを好まないタイプです。ですから、「ト・零号」の後は二人とは距離を置いていたはずですよ。となれば、最近のことで何かトラブルが起こるような接点はないはずですよ。であれば、原因はやはり「ト・零号」の時期に関係してくると思うんです」

田代が長い前髪を後ろに掻き上げながら、真剣な面持ちで言った。

外見の方は見事に対照的な二人ではあるが、事件に対する視点は一致していた。

「うん。君達が推察する通り、今回の二件の殺人の動機は、その時期にあると考えていいのだろう。しかし、それについては、あまりにも時間が経ち過ぎていて、もはや証明するのが困難だ。従って、やはり当面は二件の殺人のホシを挙げることに注力するべきだと思う」

完全に田代達のレベルに同調した宗方から、的確な指示が出始めた。

「今や、すべての糸が桐島健吾に繋がって来ています。思い切って、引っぱってみましょうか？」

「いや。石塚君の言うのもわかるが、ここは慎重に行こう。いろいろと積み上がってきてはいるが、まだまだ具体性がなさすぎる。物証が何一つないんだからね。今の状況では、僕は令状の書類に印鑑を押すわけにはいかないし、任意での許可も与えられない。もう少し、桐島の周辺を探ってみてくれ。桐島本人や平本さんの通話記録や口座の方も徹底的に調べてもらってかまわない」

「そこまでやっても、よろしいのですか？」

「ああ、かまわない。責任はすべて僕がとる。まだ、直接の応援はできないが、もう少し二人で頑張ってみてくれ」

「わかりました！」

田代と石塚が、同時に答えた。

二十七・河川敷にて

翌日。大田区内、多摩川河川敷。

田代と石塚は、鑑識班と共に半日近くもそこに釘付けになっていた。

行方不明中の亀岡代議士の秘書である市村信彦の名刺入れがそこで発見されたからだ。この日の朝早く、散歩をしていた近所の老人が、それを近くの交番へ届けてくれたのだ。

「結局、それらしいものは何も出てきませんね」

石塚が、落胆して呟いた。

早朝にこの一報が入った時の踊るような期待感も、もはや完全に消えてしまっていた。

「これだけでは、市村氏本人がここで名刺入れを落としたのかどうかもわかりません」

「そうですね。他にわかったことといえば、名刺入れが落ちていたのと同じ場所に車が一台停まっていたらしいということぐらいですね」

草むらには、明らかに車が停車していた痕跡がうかがえた。

更に、それは比較的大型の車種であることまでは推測できた。排気口の辺りの草に付着していた排気物を調べた結果、それがハイオクのガソリンであることまではわかったからだ。草をなぎ倒した跡から推測されるタイヤの大きさや間隔からもそれは間違いなさそうであった。

「ですが、それも、直接市村さんと関係があるのかどうか……。一応、この界隈の監視カメラを当たらせてはいますが、いかんせん、こんな場所にはほとんどカメラなんかは設置されてないでしょうからね」

河川局の監視カメラも、河川敷全域を網羅して監視しているわけではなかった。

「まあ、昼飯を食べ終わったら、僕達は署に戻って、引き続き桐島健吾の周辺をあたるようにしましょう」

うかうかとはしていらなかった。時間に限りがあるからだ。いつまでも亀岡議員の不審死を世間に伏せておくわけにはいかないのだ。

石塚は、桐島本人との直接対決を決断していた。

二十八・いざ、本丸へ

翌日の昼過ぎ。

田代水丸と石塚茂文は、田園調布の平本邸の前にある宝来公園へ来ていた。

緑に囲まれ、大きな池があるその佇まいは、リラックスしながら頭の中を整理するのはもってこいの場所だったからだ。

池の前のベンチに腰掛けた二人は、コンビニで買ったおにぎりを食べながら、改めて今までの話の流れを整理した。

謎の多いNP O法人代表の伊坂良子と名乗る女、多摩川の河川敷に名刺入れを残したまま忽然と姿を消してしまった亀岡の秘書の市村氏、共に依然として行方知らずのままだった。だが、その両方とも本質の枝葉の部分にすぎない。

すべての事の本質は、第二次大戦終結時に建造された潜水艦「ト・零号」にかかわる何

かであった。それが、幹の部分にあたるのだ。

別所教授の説明によると、処女航海の際には主だった機械や装備の技術者が同乗することとはごく自然なことだという。であれば、潜水艦の重要な部分をまかされたドイツ研修組の桐島、平本、亀岡の三人は、その時「ト・零号」に乗っていたと仮定して考えることができる。そして、三人のうちの誰かがその潜水艦の「大切な荷」の存在を知り、それを横取りしようと考えたのではなからうか。それは、平本節夫の書きかけの回想録から読み取みとることができる。帰還した瀬戸内の秘密の島で行われたのだ。それがうまくいったからこそ、戦後のあの大変な時期に普通なら何も持っていないはずの若い三人がそろって、それを原資にして大きな飛躍を遂げることができたのだ。だが、それほど大切な荷であれば、警備や保管も厳重で手に入れるのはそう簡単ではなかったはずだ。それには、かなりの「強引き」が必要だっただろう。

回想録の依頼を受け、自分の人生を振り返った時に、根がまじめな平本は、ずっと心の中で恥じていたそのことを公にしようかどうか悩んだのではないだろうか。平本が娘の久美子に言った「おまえに迷惑をかけるかもしれない」という言葉の意味は、それで説明がつく。そして、その告白の相談の過程で彼は殺害されてしまったのだ。であれば、首謀者は、その秘密を公にされては困る人間だ。

であれば、その鍵を握るのは、三人の中で唯一の生き証人である桐島健吾ということになる。

そして、田代と石塚は、桐島邸へ向かった。

桐島邸は、隣町の尾山台にあった。

「こんなに平本さんのお宅から近いとは驚きましたね」

事前に調べてわかっていたとはいえ、石塚は改めて驚いた。田園調布の平本邸からは車で三分とかならない距離であった。

「そうですね。屋敷の方も、同じように立派ですね」

「まったくです。しかも、凄く広さだ」

大きく頑丈な門からの奥行きは、驚くほど広がりがあった。田代達の車が中へ入ろうとした時、ちょうど建物側から出ようとする車があった。高級そうな赤いスポーツカーだった。田代は、停まって道を譲った。運転している三十代程の女性は、田代達に向かって軽く会釈をしながらそのまますれ違っていた。田代は、どこかで会ったことがあるような気がした。美しい女性だから、そう感じたのかもしれないかった。

「綺麗な女性ですね」

石塚もそう感じたらしい。

「ええ、そうですね」

「桐島と関係のある方なのかなあ……」

言いかけたその時、石塚の携帯が鳴った。

田代は車を屋敷のロータリーに停めた。

じきに、石塚の電話が終わり、二人は玄関のインターホンのボタンを押した。

玄関先で家政婦が応対し、二人は応接間に通された。

広い壁一面に沢山の表彰状や感謝状の額が掛けられていた。とりわけ目を引くのは、特注で造らせたのであろう中央に鎮座する立派なガラスケースだった。その中には、その世

界では最高位にあたる勲章が飾られていた。

大きな窓の手前に置かれたソファアセットに、桐島健吾が座って待っていた。

「いらつしやい。座ったままで失礼させていただきますよ」

イスの脇に置いてある杖を見せながら彼が言った。

引き締まっていたいかにも意志の強そうな顔立ちだ。戦後の大変な時代を勝ち抜いてきた男の顔であった。そして、その顔には客を迎え入れるような笑顔はなかった。

「勿論です。無理を言って、お時間を割いていただいて恐縮です」

歓迎されていないことは承知していた。

「そういえば、先ほど、門のところですれ違った赤いスポーツカーの女性は？」

型どおりの挨拶の延長で、石塚が訊いた。

「ああ、娘の綾子ですよ」

「そうですか、とても美しい御嬢さんですね」

「それは、ありがとう。で…。電話では話せない件とは、いったい何なのですか？」

型どおりの世間話は省いて、早く用件に入ってくれと言わんばかりであった。

「では、さっそく伺いますが…。先日、平本電機の平本節夫会長が亡くなられたのは御存じですよね？」

石塚の方が訊き始めた。

宝来公園での事前の田代との段取りの際、この日の桐島への訊き込みはすべて石塚が行うということになっていた。

「そのようですね。新聞なんかで拝見しました」

桐島は平然と返した。

「来週に行なわれる社葬には、出席されるのですか？」

「特に考えておりませんが、何故ですか？」

「いや、それならばそれでいいのですが…」

「何か、おかしいですか？」

桐島が、怪訝そうに訊いた。

「いいえ、いいのです。ある方が、あなたと平本さんは若い頃から仲が良かったと言っていたものですから、であれば当然、葬儀にも出られるものかと…」

「ははは…。それは何かの間違いか、人違いですよ。そんな話したのはいったいどこのどなたですか？」

桐島は、豪快にそれを笑い飛ばした。

「いや、それならばもういいのです…。我々の捜査上の手違いでしょう。よくあることなのです」

「捜査って、その平本さんの、ですか？」

「はい、あまり大きな声では申し上げられませんが…」

「あれは、普通のひき逃げ事件ではないのですか？」

「はい、その通りです。ひき逃げ事件です。でも、「普通の」という言い方は適切ではありませんね。ひき逃げは、立派な犯罪であり、卑劣な殺人です」

石塚は、少し語気を荒めて言った。

「まあ、そうかもしれんが…。それはあなた方の世界で言うところの過失致死であって、

計画的なものではないのでしょうか？」

「さあ、それはどうでしょうか…」

「まさか、故意に殺されたとしてもいうのですか？」

「それはまだ申しあげられません。ただ、我々警察は、少しでもその可能性があれば、手を緩めないということです」

「それは、見上げたものだ。警察はそうでなくてはいけません」

この時、はじめて桐島が動揺のようなものを見せた。

「まあ、いずれにしても、あなたが平本さんと親しいのでなければ、もう伺うこともありません。お時間を取らせました」

そう言って、立ち上がりかけた石塚が思い出したように訊いた。

「そういえば、桐島さんは、亀岡喜三郎さんとはお付き合いがありますか？」

「亀岡って、あの有名な代議士の？」

「はい。あの亀岡先生です」

「まあ、それなりにはありますが…。先生に何かあったのですか？」

「先日、自殺を図られました」

「そうなんですか、それはお気の毒に…。まあ、そちらの方も葬儀に出ることはないですがね」

「いえいえ、死んだとは言っておりませんよ。自殺を「図った」と申し上げたのです」

「えっ、生きているということですか？」

再び、桐島の動揺が見て取れた。

しかも、今回のそれは前よりもずっと大きかった。

「まあ、助かるかどうかは、今の所半々ですがね」

「そ、そうですか…。助かるといいですね」

石塚は、桐島のその言葉は無視した。

「この件も、まだ捜査中ですので他言は無用ということをお願いします。では、今日はこれで失礼します」

挨拶もそこそこに、二人は桐島邸を後にした。

「石塚さん。あなたって人は、悪いお人だ…」

車に乗り込むなり、田代が笑って言った。

「ははは…。嘘も方便と言いますからね。黙って付き合っていたいてあげがどうございまして」

「あんな風に亀岡先生がまだ死んではないなどと言ってしまつて、大丈夫なんですか？」

「おそらく、大丈夫だと思います。少しずつですが、確実に核心に近づいていると思います」

「そう思う何かがあるのですか？」

「ええ、根拠はあります。さっきの電話です…」

「屋敷に入る直前の？」

「ええ、そうです。実は、例の平本さんの通話記録と一緒に桐島の方の記録も調べさせていたのです…。その結果報告の電話でした」

「で、何か出ましたか？」

「出たので、さっきの嘘の芝居になったんです」

「何が出たんです？」

「平本さんと桐島の二人は、平本さんが亡くなる前日と、その当日に電話で連絡を取り合っていました」

「やはりそうでしたか」

「ええ…。最初の方は平本さんから桐島にかけています。そして、翌日の夜の電話は、桐島の方からです。おそらく、最初の電話の時に昔の一件を回想録に書く旨の話が打ち明けられたんでしょう。ちなみに、平本さんは同じ時に亀岡先生にもかけています」

「久美子さんが廊下で聞いた話し相手は、やはり亀岡先生だったんですね？」

「ええ、そうでした」

「翌日の桐島からの電話は…？」

「夜にかけていますから、家の外へ誘い出す為の電話だとみていいでしょう。待ち伏せていた車で轢き殺す為の電話です…」

「そうだったんですか。そうになると、決定的なものではないにせよ、二人を関連付ける極めて重要な物証ということになりますね。…そうか、それであなたはあんな風に芝居をし…」

「ええ、そういうことです。桐島の反応を見てみたかったです。そして、彼は反応して欲しい部分で見事に反応してくれました」

桐島へ發揮された石塚の巧みな会話術は、当初の失態続きを挽回して余りある程のものだった。これが、石塚本来の切れ味なのだと思えていた。

「どうやらこれで、現実的に外堀が埋まりはじめましたね」

「はい。埋まりました。二件の殺人の首謀者は、桐島に間違いないでしょう」

石塚は確信を持ってその名を口にした。

「ただし、九十歳近い年齢では本人が直接自分でやるのは無理でしょう。しかも、あの足の状態ではなおさらです」

「桐島の命を受けた実行犯が他にいるわけですね？」

「ええ。それは、亀岡先生の自宅の鍵を手に入れた人物だと思います。あれだけ餌をまいて脅してやりましたから、焦った桐島は何らかの方法でその人物と接触を図るのではないかと期待しています」

石塚は口にごそ出さなかったが、その人物が実行犯であろうということは田代にも伝わっていた。そして、それは事件が発覚して急に姿を消した人間のはずだった。

「殺したと思いきんでいた亀岡先生が、死んでいないとわかった桐島はかなり焦っているでしょうからね」

「はい、そういうことです」

「いよいよ、石塚さんの本領発揮ですね」

「ははは…、少し調子が戻ってきました。すでに、さっきの電話の時に桐島の屋敷周辺とすべての電話回線に部下を配置させるように手配しました。そろそろ、屋敷の前と裏に張り込み班が着くと思います」

「さすがですね。桐島が動いた時の為の網張りですね？」

「ええ。宗方本部長のお墨付きですから。うまくかかってくれるといいのですが…」

その時、田代の携帯が鳴った。  
発信者は五十嵐麻美だった。

運転中の田代に変わって、石塚が出る。

「もしもし…。：ああ、五十嵐さん。石塚です。ええ…。室長は運転中ですので、私でよろしければ…。えっ、本当ですか…。：わかりました。我々も、そちらに向かいます…。」  
「五十嵐君から何か？」

「やりましたよ、室長。伊坂良子の顔がわかったそうです！」

石塚の厳つい顔が、嬉しさで紅潮していた。

「そいつは、凄い。よく見つけましたねえ！」

「いえ。彼女が見つけたのではなくて、あの亀岡先生の事務所のおばさんが、持ってきたそうです」

「ええっ。あの人か、ですか？」

「ええ。早い方がいいと言って、わざわざ、警視庁の広報室まで届けに来てくれたそうですよ」

「ほー、それはありがたい」

田代は、亀岡の事務所が警視庁からほど近い永田町にあったことに感謝した。  
無論、わざわざ探して持ってきてくれた事務員の女性の厚意にはなおさらだ。

「しかし、よく写真が見つかりましたね？」

「いえ。写真ではなくて、何かのパンフレットのようです。まあ、それでも充分だそうです。五十嵐さんは、さっそくそれを使って、空港の出国者のチェックを始めるそうです」

「もう夕方の六時だというのに、それもありがたい」

「ははは…。五十嵐さんは、田代室長の為なら何でもしてくれるんですね。それに、あの事務員のおばさんも…」

「えっ、誰のことですか？」

「あの亀岡先生のところの事務員さんのことですよ」

「事務員さんが…。どういうことですか？」

「彼女も室長に好意を持っているから、一生懸命に伊坂代表の資料を探してくれたんですよ」

「ははは…。何を言い出すかと思えば…」

「いいえ、間違いありません。この間事務所ですらに褒められた時に、彼女はうっとりとしていましたからね。私はそれを見逃しませんでしたよ。それに、そうでなければ、わざわざ警視庁まで届けに来てくれたりはしませんよ」

「それは、石塚さん…。近いから、厚意で帰宅のついでに寄ってくれたんでしょう」

「いいえ。そちらの厚意ではなくて、好きの方の好意の方ですよ。神奈川県警で一、二を争うほど優秀なこの私が断言しているのですから、間違いありませんよ。ははは…」

「わかった、わかった。あなたの優秀さは、痛いほどわかっていますから、そういうことにしておきましょう。ははは…」

田代は嬉しかった。

石塚が、軽口が言えるくらいにすっかりと立ち直っていたからだ。そして何よりも、事態が着々と進展してきたことが嬉しかった。最も頭を悩ませていた実行犯の正体に近づく



ことができるかもしれないからだ。

## 二十九 容疑者の正体

警視庁に着いた頃には夜の八時を回っていた。

広報室に戻ると、五十嵐麻美が一人残ってパソコンと格闘していた。空港やその周辺のカメラに写った顔認証の確認作業だ。

「五十嵐君。遅くまで御苦労さま」

田代が、途中コンビニで買った差し入れのおにぎりを手渡して労をねぎらった。

「ありがとうございます。遠慮なく、いただきます」

「で、例の事務員さんが届けてくれたものは？」

「あ、これです。…なかなか綺麗な人ですよ」

麻美が差し出したのは、一年くらい前に発行された亀岡喜三郎の支持者向けのパンフレットだった。よくある政治家の後援会の簡単な冊子だった。

原発反対と自然エネルギー推進をテーマにした対談形式の構成になっていた。亀岡の対談相手はNPOの代表・伊坂良子。二人がやり取りする対談風景のものと他に何枚かの顔のアップ写真が織り込まれている。

「あああっ！」

それを見た田代と石塚の目が大きく見開かれた。

「しまった。そういうことかっ！」

「あの女だっ！」

二人は、ついさつき、実行犯とすれ違っていた。

「五十嵐君。済まんが、空港のその作業は中断だ。すぐに、桐島綾子という名前の女とその車を調べてくれ。住所は世田谷区尾山台。車種は赤のスポーツタイプ。わかり次第、緊急手配だ。Nシステムと近隣の各県警に連絡。それと成田と羽田の両空港付近の駐車場もだ！」

「了解です。…対象範囲は？」

「石塚さん、あれからどのくらい経過していましたかね？」

「二時間と五十分つてところですよ」

それは正確な時間だった。石塚が、桐島邸に入る直前に部下から報告の電話を受けていた携帯の受信時刻が記録されていたからだ。

「世田谷区尾山台を起点に最大、車で三時間の範囲で頼む」

そう田代が指示すると、

「いや。五十嵐さん、範囲は四時間にしてください」

石塚が、訂正を進言した。

「スポーツカーですから、四時間にしておいた方がいいでしょう」

百戦錬磨の石塚は冷静だった。

桐島綾子は、マリア像の下でこうべを垂れていた。

三十年ぶりに訪れる教会の聖堂だった。

真夜中であろうが、いつでも神はその扉を開けて迷える者を受け入れてくれた。子供の頃の印象に比べて、こんなに小さくて狭かったのかと驚かされた。だが、中の様子は記憶にあったそれと変わっていないかった。

子供の頃は、毎日欠かさずにここで祈りをささげていた。神様への願い事はたった一つだった。いつか必ず自分の親が迎えに来てくれると言う願いだっただけ。

迎えに来てくれたのは、親ではない見ず知らずの初老の男だった。

でも、幸せだった。桐島の愛情は、自分を捨てた親の存在を忘れさせてくれるくらいに深かった。

だが、その幸せはある日いきなり、壊された。

平本節夫のあの電話がすべてを狂わせた。

あの時、横山少将を殺害する為の丸太の棒を二人に渡したのは桐島だった。

それを回想録に書くというのだ。世間に打ち明けるといふのだ。七十年前も前の若気の至りを、何故今頃になって公表する必要があるのか。するのなら、せめて桐島が亡くなった後にして欲しいと頼んだ。しかし、生真面目な平本はそれを受けつけなかった。そのことに取り憑かれてしまった彼の感情には、もはや冷静に損得を考える余地は残っていないかった。だから、ああするより仕方がなかったのだ。

悪いことに、今度はそれを知った亀岡が、厳しく責めたててきた。挙句の果てに、平本と同じように世間に公表すると脅してきた。それを盾にとつて大金を要求してきた。だから、ああするより仕方がなかったのだ。

数年前に勲章を授与された時の桐島の嬉しそうな顔が忘れられなかった。長きに渡る自然エネルギーの普及活動に対して与えられたのだ。自分のような人間でも世の中に貢献したのが認められたのだと、彼は涙を流して喜んでいた。あんなに嬉しそうにしている彼を見るのは初めてだった。そんな桐島の喜びが奪われるのは、断じて許せなかった。世間に認められたまま人生を全うさせてあげたかった。放っておいても、あと僅かの人生なのだ。愛する桐島の晩節は絶対に誰にも傷つけさせない。自分が桐島の榮譽を守らねばならないのだ。

三十年間、娘として、女として精一杯愛してもらった。でも自分は子供を産んであげることさえできなかった。だから、今こそ桐島の力になるのだ。本人は高齢で動きようがない。だから自分が変わりに成し遂げてやったのだ。

ただ、その為に関係な人間を巻き添えにしてしまった。

亀岡の秘書の市村だ。彼にはすまないことをしてしまった。しかし、あの時はどうしても、急いで亀岡邸の鍵が必要だったのだ。彼が、その鍵を私が一時的に借用していたことに気づきさえしなければ、それすんでいたのだ。そのことを彼が問い詰めてこなければ、殺さずにすんだのだ。

綾子はマリア像にすべてを告白し、そして懺悔した。

それから、礼拝堂を出て海の方角に歩き始めた。

見上げた夜空の星が美しかった。

やがて、視界にそれが入って来た。それは三十年経った今でも、同じように威風堂々とそびえ立ち、巨大なプロペラを回し続けていた。強い海風に長い髪をなびかせながら、彼女はしばらくそれを眺めていた。

「おじさん。これはお空を飛べるの?…」

彼女が、ポツンと呟いた。

やがて彼女は、傍らに停めてあった赤いスポーツカーのトランクを開けた。

その中の「彼」を確認すると、礼拝堂でしたように地面に両足を突いて座り、短く祈りをささげた。

それから、運転席に座った。

車内がしっかりと密封されているのを確認すると、彼女は七輪の中の練炭に火を灯もした。

### 三十一・選んだ理由

田代水丸の元に、その一報が入ったのは、その日の朝十時頃だった。

田代と石塚はその確認の為に現場へ向かった。

東名高速の豊川インターを降りてから渥美半島に入り、それを南下していく。

その現場は、岬の先端の平地だった。

赤いスポーツカーを囲むように県警の人間が数人いた。鑑識の人間だ。トランクが空いたままになっているのが見えた。その中は、かなり濡れていた。氷詰めにされた市村信彦の死体が入れられていたようだ。

すでに、運転席にあった桐島綾子と市村の遺体は近くの救急病院へ運ばれた後だった。

出迎えた愛知県警の担当者の説明によると、蘇生処置を施すまでもなく両名とも完全に事切れていたということだった。

二人は、しばらく巨大なプロペラを見ていた。

「伊坂良子…、いや、桐島綾子は、ここへ死にに來たのかもしれないね」

石塚が、やつと口を開いた。

「どうして、そう思うんですか？」

「いや、単なる思い付きですが。ただ、そんな気がしてなりません。人生の清算というやつです。室長はそうは思われませんか？」

「僕にはよくわかりません。ただ、一連の件は、すべて自分がやったのだということアピールしているように見えます。市村さんを殺害したのも、すべてが自分の責任で、その罪滅ぼしの為に自殺するんだということをアピールしているかのようです」

「そこまで感じますか？」

「ええ。彼女の強いメッセージのようなものを感じます。何から何まで、自分が一人でやったのだというのを強く訴えているように見えるんです。つまり、彼女が桐島をかばっているように思えてならないんです」

「そうなんですかね…」

石塚は、その意見に関しては何とも言えなかった。

「ええ、そんな気がします…」

二人は、主のいない赤い車を見ながらしばらく思案に更けた。後部座席の足元に七輪が置かれ、その中に役目を終えた練炭の燃えかすが残る。

「それにしても、石塚さん。今回もさすがでしたね」

「はあ、何のことですか？」

「あなたが、車の捜索範囲を広げる進言をしてくれたおかげで、愛知県警はすぐに彼女を特定することができました。そのおかげで、僕達もすぐにここへ来ることができました。もし、あの時捜査範囲を四時間にして、愛知県にまで広げていなければ、僕達への通報にはもともとずっと時間がかかっていたはずですよ」

このところの石塚の捜査への切れ味は目を見張るものがあつた。彼の高い実力はその随所で証明されていた。

「ははは…。室長にそう言われると、お世辞でも嬉しく感じます」

「とんでもない。お世辞なんかではなく、心からそう思っていますよ」

「ありがとうございます。ですが、遅かれ早かれ、彼女が死んでしまっていれば同じことです。あの時、私達は桐島邸の前で彼女とすれ違っていたわけですから…」

石塚は、それを悔やんでいた。

「それはわかりますが、僕達は最善を尽くしました。その結果なんですから…」

「そうですね。そう考えるとしまししょう」

二人は、車から離れて海の方へ視線を移した。

「仮に、そうだとしたら、彼女は、何でここを死に場所に選んだのでしょうかね…？」

遠く海岸線を見渡しながら、石塚がポツンと言った。

「調べていくうちにわかるんでしょうが、もし、ここを選んで来たのだとすれば、きっとここが彼女の人生の中で大きな意味を持つ場所なんでしょうね。…ひよっとしたら、伊坂良子という偽名の由来は、この伊良湖岬からとつたのかもしれない…」

「なるほど、きつとそうですね！」

石塚が大きく頷いた。

それから、二人はまた海を眺めた。

久しぶりの安らぎだった。激動の二週間だった。そして、結果はともかく事件の山場は越えたのだ。

「あの大きなプロペラは、風力発電ですね…。ひよっとしたら、桐島と関係があるのかもありませんね。ほら、例の平本さん宅で見たあの写真の…」

海風に乱れる長髪を掻き上げながら、田代がそれを見上げて言った。

「ええ、そうかもしれませんね。私も今、そう考えていました。あの写真のと似ていますね。もし、これが三十年前のものならば、例の三人が写っていたのと同じ場所なのかもしれません。とは言うものの東日本の大震災以降、急に日本中の海沿いにこういうのが増えていますから、実際はどうかわかりませんがね…」

一瞬風がやんだ。

そして、二人の後ろから声が聞こえた。

「これは、三十年前からここにあつたのですよ」

声の主の年老いた女性が立っていた。  
その服装から、教会のシスターだとわかる。

「そして、これが彼女を死に追いやるきっかけでもあったのです」  
シスターが悲しそうに言った。

「失礼ですが、あなたは？」

石塚が訊いた。

「このふもとにある教会の者です。亡くなられた桐島綾子さんをそこで子供の頃に預かっていた者です」

「ええっ？」

二人の驚く反応を見た彼女が、間違いなくそうだと言うようにゆっくりと頷いた。

「あの…。もしよろしければ、少しお話を伺わせていただけますか？」

「ええ、かまいませんよ」

三人は、ふもとに向かった。

### 三十二、想いの変化

教会らしい簡素な応接室だった。

「綾子ちゃんは、あの離れで五歳まで暮らしていました。同じように身寄りのない子達と一緒に生活していたのです」

窓の外の裏庭に、平屋の古い大きな木造家屋が建っているのが見えた。

「今はもう、誰も住んでいませんし、使ってもいません。幼稚園に切り替えて運営を続けるという選択もあったのですが、そうするにはこのあたりでは不便すぎますし、私自身も、もうこの通りの年齢ですので…」

庭の隅にある半分チェーンが切れた古いブランコが、彼女の言葉を裏付けていた。

「シスター。実は、私達は綾子さんのことをまだほとんど何も知りません。このホームの出身であったことも、さっきあなたに言われて始めてわかったくらいなのです。ですから、どんなことでも結構ですから、聞かせていただけるとありがたいのですが…」

田代が訊いた。

「私も、綾子ちゃんとはあれ以来、まったく会っていませんでしたから、ご期待に添えるようなお話はできないと思いますよ…」

「彼女は五歳までここで暮らしていたとすれば、かれこれ、もう三十年以上経ったということになりますね？」

「ええ、そうなのです。私にはつい昨日のこのように思えますが、実際はそんなに経っているのですよね」

「どういったいきさつで、彼女が桐島氏の所へ行くことに…？」

「お二人がご覧になっていたさっきの風力発電用のプロペラの建設がきっかけでした」

「やはり、あれは桐島氏が…？」

「ええ、そうです。当時の桐島社長が、自然エネルギーの開発の実験の為に、岬にあれを建てることになったのです。その説明の為に、この教会にもいらしたことがありました。」

公害のまったくない発電設備の実験だと言うことでしたので、私どもも反対はしませんでした」

「その時に、綾子さんと知り合ったのですね？」

「簡単にいえば、そういうことです。桐島さんは綾子ちゃんのことをいたく気に入られたようです。それで、保護者である私に引き取りたいと申し出てこられたのです」

「そういうことですか。まあ、桐島氏は大金持ちですからね。シスターとしてもさぞかし安心して、出されたのでしょうかね」

石塚が納得した。

「いいえ、その逆です。私は心配でなりませんでした。勿論、経済的な面では申し分のない方には違いありませんでしたが……」

「えっ、そうなんですか。でも、結果的には桐島氏の所に……？」

「はい、結果的にはお受けしました。ですが、始めのうちは固くお断りしていたのです」

「何故ですか？ 経済的には問題ないと……？」

「引き取り先の条件は、原則として両親がきちんと揃った家庭でなければなりませんのですよ」

「あ……、そうか。そういうえば桐島氏は生涯独身を通していましたね」

石塚は、最近目を通した桐島の資料を思い出した。

「はい、そうでした。まして、当時の桐島さんは五十歳半ばで、もうすでにいいお歳でしたから」

「そうになると、逆にそんな相手の所へよく綾子ちゃんを出されましたね？」

「何度お断わりしても、あの方はここへ通われてきたのです。東京から五時間もかけてです。何度も通われてくるうちに、その態度、熱心さに次第に誠意を感じるようになってきました。それに、何よりも、綾子ちゃん自身が桐島さんにとってもなついていたのです。プロペラのおじさんは、今度はいっ来てくれるのかと、楽しみに待っていましたから」

「そうだったんですか。それで、結局……」

「はい……。但し、条件を付けさせていただきました」

「どのような？」

「綾子ちゃんが小学校を卒業するまで、毎月必ず本人から私に手紙を書かせるという条件にしました」

「なるほど。それで、手紙はきちんと届きましたか？」

「ええ、一度も休まずに、毎月必ず届きました。しかも、それは彼女が中学校に入学したその後も、ずっと続いていました。更に、高校生になってもそれは続きました。そしてそのうちに、クリスマスの季節になると、まだ残っていたホームの後輩達にプレゼントを送って寄こすようにもなりました」

「きつと、彼女は幸せな日々を過ごしていたのでしょうかね。そして、他人を思いやることができる素晴らしい女性に育っていったのでしょうかね」

田代は、知らず綾子のことを褒めていた。

「はい。それは、いつも届く手紙の隅々に感じられました。日々の楽しさと桐島さんへの感謝の言葉で埋め尽くされていました。本当に幸せそうでした……。ですが……」

「ですが……？」

「ですが、何ですか？」

田代も石塚も、すっかりその話に引き込まれていた。

「彼女が大学に入って、成人したあたりから、その手紙の文章に微妙な変化が表れて来たのです」

「どのような変化が？」

「桐島さんへの依存心が違う方向にどんどん深く、強くなって行ったのです。つまり、小さい頃から変わらずに、桐島さんへの感謝の気持ちが綴られてはいるのですが、だんだんと言葉の節々に深い愛情を感じさせるようになったのです。彼は孤独な人なので、寂しい老人なので、自分が支えてあげなければならぬ、といった具合に……」

「違う方向ですか……？ その程度なら、家族としては当り前の愛情表現だと思いますが……。何と言っても、十五年も一緒に一つ屋根の下で暮しているわけですから……」

「そうだろうと頷き、二人は顔を見合わせて確認し合った。

「そうではありません。それは、親への愛情ではなく、異性への愛情です」

「な、なんと……」

「そうなのです。殿方には、わかりにくいかもしれませんが。女の私には、ピンとくるものがありました。彼女は、娘としてではなく、女として桐島さんを愛し始めていると……」

「ほ、本当ですか……？」

「間違いありませんか？」

「おそらく、そうだと思います。それを感じ取った私は、久しぶりに彼女に返事を書いたのです。そして、その中で桐島さんを男性として愛しているのかと、思いきって訊ねてみたのです」

「そうですか……。それで彼女からは何と……？」

田代達に、小さな緊張が走った。

「残念ながら、返事は返ってきませんでした。……それ以来、彼女からは、ぱったりと手紙が来なくなっていました」

「そうですか。それでは確証は得られなかったのですね……」

「ええ、そうかもしれません。でも、私はそれが彼女の答えだったと思っています」

「つまり？」

「返事が出せないということが、つまり、イエスということですよ」

「そ、そういうことか……」

それを聞いた二人は、天を仰いだ。

「もつとも、もうそれを本人の口から確認できる術はなくなっていましたか……」

「そう言つて、彼女は頭をもたげた。そして、そのまま言葉を続けた。

「やはり、私は彼女を出すべきではなかったのかもしれない……」

田代達に、かける言葉は残っていなかった。

### 三十三. 再び岬へ

教会を出た二人は、もう一度岬の現場の方へ向かった。

だが、すぐにその場を離れ、何かに導かれるように再び海の見える岬の先端に向かっていた。

「実行犯・綾子の動機は、桐島への強い愛情ってことになるわけか…。愛する彼を守りたいという気持なのか…。育ててもらった彼の恩義に報いたいという感謝の気持なのか…」

石塚は自問自答するように言った。

「そのすべてでしよう…。綾子にとつての桐島は、父であり、夫であり、恋人であった。つまり、彼女にとつてのすべてだったのですよ」

シスターの話聞いた田代は、その気持を更に強めていた。

「そうか、そうなるのかあ…」

もはや、石塚もその考えに同意せざるを得なかった。

「死ぬ間際に、綾子もあれを見ていたのかなあ…？」

上を見上げた石塚が、ポツンと言った。

「ええ、そうかもしれませんね…」

しばらく二人は、その白い大きなプロペラを眺めていた。

#### 三十四 鮮やかな赤色

二週間後、横浜元町―。

目抜き通りを一本横に入った所に「霧笛楼」と言う名のそのレストランはあった。

店の入口には小型のイーホンをつけた体格のいい男が、目立たないように立っていた。同じ風体の男が、店内の奥の一角にもいた。

パーテーションで仕切られたその奥の一角は、彼らが守るべき主人達が予約したテーブル席であった。宗方と鳶川の両警察本部長が、今回の事件を見事に解決に導いた二人の主役を慰労する為に一席設けたのだ。

そこには、主役の二人を後方で支援した五十嵐麻美も同席していた。

「両本部長殿、本当にごちそう様でした。こんなに美味しい肉を、腹いっぱい食べられて幸せでした！」

特上のステーキを存分に堪能した石塚茂文は、満面の笑みで礼を言った。

「ははは…、どういたしまして。今回の難事件を解決してくれたことに比べたら、こんなのは安いもんだよ。な、宗方」

「いや、まったくだ。ははは…」

ホスト役の両本部長は、それ以上に上機嫌だった。

「捜査中は、おにぎりばかりでしたからね」

そう言つて笑う田代水丸も、久しぶりに心からくつろいでいた。

「今回は、五十嵐君にもだいたい負担をかけてしまいましたね」

「いえいえ、お二人に比べたら、私なんかは…。でも、そういえば、私も、おにぎりで残業させられましたね。ふふふ…」

麻美も、冗談が言えるくらいにリラックスしていた。

「ははは…。それは随分と安上がりに済まされてしまいましたね。それにしても、三人を



殺したのがまさか女性だったとはな…」

そんな彼女を見て思い出したのか、鳶川が改めて驚くように言った。

「亀岡先生、平本さん、そして、市川さん…。三人とも養父の桐島の名誉の為に仕方なくやったのでしょうか。彼女はどうしても桐島の人生を守りたかったのです」

亀岡事件のそれは、急転直下の結末であった。

桐島健吾の養女・綾子は被疑者死亡扱いで送検された。亀岡喜三郎と平本節夫、そして、市村信彦の殺人の容疑である。

宗方と鳶川、両本部長の決断は早かった。いつまでも亀岡喜三郎の死を隠しておけなかったという事情もあったが、裏付ける為の物証は二週間で充分過ぎるほどに揃えることができていたからだ。

亀岡が殺害されたその夜、西湘バイパス・大磯料金の出口のカメラに綾子の顔が写っていた。しかも、一時間後には入口の方のカメラにも写っていた。その夜は大雨だった為に通過する車はほとんどなく、しかも車種に大きな特徴があったおかげで五十嵐麻美の確認作業は驚くほど短時間で済ませることができたのだ。その車が、赤いスポーツカーだったからだ。

「それには、僕も驚かされました。まさか、君達が桐島邸ですれ違った女がすべての実行犯だったとは…。さすがの神奈川県警を代表する名刑事さんも、その時にピンとくるものはありませんでしたか？」

ワイングラスを手にながら、宗方が笑って言った。

「ははは…。正直なところ、あの時はまったく…。あの時も、桐島の通話記録の報告がもう少し早ければ、彼女を死なせずに済んでいたかもしれませんでした…」

石塚が、無念そうに頭をかいた。

「まあ…。それは仕方がないでしょう」

宗方が宥めた。

「でも、養女とはいえ、自分の娘に殺しをさせるとは、酷いものですよね…」

麻美が呆れた口調で言った。

「そうだね…。でも、五十嵐君。そう決めつけるのは、まだ早計だと思うよ」

田代の答えは、麻美には少し意外だった。

「そ、そうですか？」

麻美が焦って聞き返した。

「うん。一応、殺人教唆の線で検討をしてはいるけど、実際の所、桐島がそうさせたのか、あるいは、彼女の方が自分から率先してやったのかはまだわからないから…」

念を押すように、田代が言った。

「そうすると、桐島本人の供述を待つしかないわけだね？」

鳶川が訊ねた。

「ええ、そうなってしまう。しかし、すべての関係者が死んでしまった以上、桐島がどこまで本当のことを語ってくれるのかは…。おそらく、彼はこのまま何も語らないでしょう。仮に、綾子が桐島をかばう為に自らの身を犠牲にしていたとしたら、桐島はそれに応える為に、やはり沈黙を守ることになりますから…」

シスターの話聞いた今の田代は、そちらの可能性が高いような気がしてならなかった。

綾子が三人もの殺人を犯したのは、ひとえに桐島への深い愛情だったのだと。

「彼が話さなければ、立証するのはかなり困難でしょうね。人一倍エネルギーシユな男と言っても、いかんせん、もうすぐ九十歳になろうかという老人ですから」

石塚が重ねて言った。

「その潜水艦といい、実行犯の綾子といい、まさに真相は闇の底深くに沈んでしまうということか…」

蔦川がため息混じりに呟いた。それから、石塚に訊いた。

「ところで、亀岡先生や平本さん、それから市村さんの犯行の方の裏付けは大丈夫なのかい？ 例えば、車の方の立証はその料金所の写真で十分なのか？」

「勿論、それだけでは不十分です。亀岡先生の場合、決め手になったのは、料金所を出た後の彼女の行動なのです」

「その後、とは…？」

「料金所を出た後に最初にある国道の入り口のNシステムには、その車は確認されていません。しかし、一時間後には再び料金所の入口に戻っています。ということはつまり、料金所と国道の手前までの間というごく限られた範囲の中で動いていたということになるのです。即ち、亀岡邸の周辺ということですよ」

「なるほど！」

蔦川は、思わず感嘆の声をあげた。

「平本さんの方に使われた車の時は、どうだったのですか？」

「結果的にわかったのですが、その時に使用されたのは彼女の例の車ではなく桐島の送迎の大型外国車でした。バンパーから平本さんの毛髪や血痕が採取されました。ちなみに、助手席とトランクの中に市村さんの毛髪も確認されました。しかし、こちらの方は大磯の時とは違って、逆に周囲のどのシステムにもカメラにも該当する車種が写っていませんでした」

「今どきの都内なのに？」

思わず、ワイングラスを口から話して、蔦川が訊いた。

「ええ。ですが、そのことが逆に証明になりました。所轄の田園調布署が、手を焼いたのも領けました。犯行の車はごくごく狭い範囲でしか動いていませんでした。そして、運転する犯人は防犯カメラのないような道ばかりを選んで移動していたのです。つまり、犯行現場界限の細かい裏道を知りぬいている人間だということになるわけです。即ち、桐島綾子です」

「そうか、確か平本さんと桐島は御近所だったね」

「そういうことです。ごくごく狭い範囲でした」

「平本さん宅に留まらず、市村秘書を睡眠薬で眠らせ、練炭で殺害した河川敷。それらすべては、彼女のよく知る慣れた場所でした。だから、その行動にも穴がなかった。しかし、逆に、慣れていない亀岡先生の住む大磯周辺の道路においては、その行動に穴が多かったということですよ」

石塚の説明を、田代が総括した。皆が一樣に頷いた。

「直接的な物証は、他にはあったのかね？」

一息おいて、再び蔦川が訊いた。

「はい、ありました。犯行時に彼女が着用していたレザージャケットです。そのポケットの中に市村さんから奪った亀岡先生の自宅の鍵が入っていました。更に、そのジャケットの袖口から、微量ですが硝煙反応が出ました。調べたら、亀岡先生に使われた散弾のものと一致しました」

「そうか…。それは、決定的だね。しかし、そのジャケットが彼女のものであるとの証明は？」

「有名な高級ブランド品でしたから裏取りは楽でした。そのジャケットの店の売り上げ記録と彼女のカードの支払記録とで照合できました。講演会やデモ集会の時の写真でも、それを着ているものが何枚か確認されました。それに、その気になれば周囲の人間からの証言はいくらでも取れるはずですよ」

「と、いうと…？」

「彼女の車と一緒に、とても印象に残る着衣の色でしたので、一度見れば忘れられないと思います」

「印象に…、それは？」

「とても鮮やかな赤色ですよ」

「なるほど、それなら目立つな。まさに女性の犯人ならではの証拠だ。ははは…」

一同が笑いに包まれた。口々になるほど、と頷きながら赤ワインを口に運ぶ。

「あっ！」

急に、田代が笑うのをやめて、そのグラスを見つめた。

「田代君、どうした？」

宗方が訊く。

「いや、その…。とても美味しいワインだな、と思ひまして」

田代は、とっさにそう言ってごまかした。

「ははは…。気づいていただいて良かった。美味しいはずだ。今日のワインは少々はずんだからね」

葛川が得意気に笑った。

「いやあ、それはうかつだった。緊張していて、ワインの味まで気が回りませんでした。

本部長殿、大変失礼しました。言われてみれば、確かに美味しいですね。はっはは…！」

大笑いしながら石塚が、ワインの残りを豪快に呷った。

田代は、胸のペンダントに手を当てながら、あることを思い出していた。

彼女に会ったのは、桐島邸でのあの時が初めてではなかった。彼女とは、この事件の始まりから出会っていたのだ。綾子は、桐島がオーナーであるケネックス社が裏で援助している原発反対運動のNPOの代表をやっていた。即ち、伊坂良子である。

警視庁の前で遭遇したあのデモの女性だ。あの時の、デモ行進の先頭に立っていた赤い皮のジャケットをまとった自由の女神がそうだったのだ。皮肉にも、彼女は自らが死ぬことによって桐島の呪縛から解放され、自由を手に入れたのかもしれない。皆の楽しそうな笑い声にまぎれて、田代水丸は、再び赤ワインのグラスをじっと見つめていた。